



Japan Foundation for
Regional Art-Activities

平成29年度
公共ホール音楽活性化事業
報告書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、財政支援、研修・交流、情報提供、調査研究などの事業を実施しております。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」を実施しております。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国18の団体との共催により実施された平成29年度「公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。あわせて、平成28年度から29年度にかけて愛知県で実施された「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業」及び平成29年度に新潟市で実施された「公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業」についても取りまとめています。

この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いです。

終わりに、各公演を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、平成29年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

〈本文中の社名、所属、役職等は平成29年度のものです〉

第1部 平成29年度公共ホール音楽活性化事業の概要

実施概要	2
登録アーティスト／コーディネーター	3
実施団体	3
全体研修会実施概要	5

第2部 平成29年度公共ホール音楽活性化事業 事例紹介・アシスタントレポート

〈通常〉

銚田市 (茨城県)	8
秩父市 (埼玉県)	14
上里町 (埼玉県)	22
南砺市 (富山県)	28
野々市市 (石川県)	34
塩尻市 (長野県)	41
高浜市 (愛知県)	47
舞鶴市 (京都府)	53
豊中市 (大阪府)	58
箕面市 (大阪府)	64
坂町 (広島県)	69
太宰府市 (福岡県)	75
嬉野市 (佐賀県)	81
菊陽町 (熊本県)	86
玖珠町 (大分県)	91

〈発展継続 (モデル)〉

滑川市 (富山県)	97
関市 (岐阜県)	103
九重町 (大分県)	111

第3部 平成29年度公共ホール音楽活性化事業 コーディネーターレポート

小澤 櫻作 (チーフコーディネーター)	118
丹羽 徹 (コーディネーター)	120
花田 和加子 (コーディネーター)	123
山本 若子 (コーディネーター)	125

第4部 平成28-29年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業

実施概要	128
派遣アーティストプロフィール	134
レポート	
加藤 愛 (事業担当者)	137

児玉 真	(チーフコーディネーター).....	138
根間 安代	(コーディネーター).....	139
YASSY	(コーディネーター).....	141
箕口 一美	(コーディネーター).....	142
丹羽 梓	(アシスタントコーディネーター).....	143
奥田 もも子	(アシスタントコーディネーター).....	144
酒井 雅代	(アシスタントコーディネーター).....	146

第5部 平成29年度公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業

実施概要.....	150
アウトリーチセミナー.....	152
レポート	
榎本 広樹 (ホール担当者).....	155
児玉 真 (アドバイザー).....	156

第1部

平成29年度公共ホール 音楽活性化事業の概要

平成29年度公共ホール音楽活性化事業 実施概要

1 事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを、公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

2 実施内容

(1) 実施団体 全国18団体

※地方公共団体または指定管理者等。原則として都道府県と政令指定都市及びそれらが関わる指定管理者等は除く。

(2) 研修事業 ①全体研修会

平成29年4月17日(月)～19日(水) / (一財)地域創造、HAKUJUホール
開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修を実施。

②個別研修の実施

広報を始める前の段階(公演2、3カ月前)に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。

(3) 公演事業 公演事業の実施(全国18地域) 平成29年9月～平成30年3月

登録アーティストと共演者を数日間の日程で地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサート及びアクティビティを実施した。

①コンサート 身近で、親しみのある本格的なクラシック演奏会

②アクティビティ 出前コンサート、ワークショップ等地域との交流を図るプログラム

3 費用負担

一般財団法人地域創造と開催地の地方公共団体との経費区分は下記の通りとした。

(1) 一般財団法人地域創造が負担する主な経費

①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費

(演奏家の出演料、交通費(現地移動費を除く)、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料(演奏家)、演奏家派遣に関するマネジメント料)

②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費のうち10万円(発展継続事業は20万円)を限度額として負担

(2) 開催地の地方公共団体が負担する主な経費

演奏家の派遣に係る経費以外に係る経費(現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など)

4 主催・共催等

主 催：開催地の地方公共団体等

共 催：一般財団法人地域創造

制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

平成29年度登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

1 平成28年度・29年度登録アーティスト

岩崎 洵奈	(ピアノ)	コンサートイマジン
坂口 昌優	(ヴァイオリン)	株式会社ミリオンコンサート協会
加藤 文枝	(チェロ)	株式会社パシフィック・コンサート・マネジメント
福川 伸陽	(ホルン)	株式会社ヤマハミュージックアーティスト
喜名 雅	(チューバ)	株式会社プロ アルテ ムジケ
ヴィタリ・ユシュマノフ	(声楽 (バリトン))	一般社団法人ブラームスホール協会
塚越 慎子	(マリンバ)	株式会社AMATI

2 コーディネーター

小澤 櫻作	(上田市交流文化芸術センター プロデューサー)
丹羽 徹	(一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 理事事務局長)
花田 和加子	(keynote代表、ヴァイオリニスト)
山本 若子	(有限会社N. A. T取締役)

3 サブコーディネーター

三浦 幸恵	(HAKUJU ホール 事業担当)
桜井 しおり	(ワークショップデザイナー、ピアニスト)

4 アシスタントスタッフ

高荷 春菜	(NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部)
山田 知代	(ヴァイオリスト、(有)おふいすベガスタッフ)
松山 唯	
野澤 美希	(神戸大学大学院国際文化研究科 科目等履修生)

5 アドバイザー

大澤 寅雄	(株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室)
-------	-----------------------------

6 研修スタッフ

千葉 真弓	(一般財団法人北上市文化創造)
井尾 祥子	(公益財団法人真庭エスパス文化振興財団)
竹内 ひとみ	(三次市民ホール)
貴田 雄介	(公益財団法人熊本県立劇場)

6 実施団体

No	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	派遣アーティスト	担当コーディネーター
1	茨城県	鉾田市 (ほこたし)	鉾田市	鉾田市立大洋公民館	1/18(木)～ 1/21(日)	塚越 慎子	花田 和加子 桜井 しおり
2	埼玉県	秩父市 (ちちぶし)	秩父市	秩父宮記念市民会館	3/1(木)～ 3/3(土)	塚越 慎子	花田 和加子 山田 知代
3	埼玉県	上里町 (かみさとまち)	(一財)上里町文化振興協会	上里町総合文化センター (ワーブ上里)	1/11(木)～ 1/13(土)	坂口 昌優	山本 若子 野澤 美希
4	富山県	南砺市 (なんとし)	文化創造南砺合同会社	南砺市福野文化創造センター 「ヘリオス」	3/8(木)～ 3/10(土)	坂口 昌優 岩崎 洵奈	山本 若子 桜井 しおり
5	石川県	野々市市 (ののいちし)	(公財)野々市市情報文化振興財団	野々市市文化会館フォルテ	9/7(木)～ 9/9(土)	坂口 昌優	丹羽 徹 山田 知代
6	長野県	塩尻市 (しおじりし)	(一財)塩尻市文化振興財団	塩尻市文化会館 (レザンホール)	11/30(木)～ 12/2(土)	ヴィタリ・ ユシュマノフ	花田 和加子 松山 唯
7	愛知県	高浜市 (たかはまし)	高浜市やきものの里かわら美術館 (乃村工藝社・NTTファシリティアーズ 美術館運営共同事業体)	高浜市やきものの里かわら美術館	12/10(日)～ 12/12(火)	ヴィタリ・ ユシュマノフ 喜名 雅	丹羽 徹 三浦 幸恵
8	京都府	舞鶴市 (まいづるし)	(公財)舞鶴市文化事業団	舞鶴市総合文化会館	9/22(金)～ 9/24(日)	塚越 慎子	山本 若子 松山 唯
9	大阪府	豊中市 (とよなかし)	豊中市市民ホール指定管理者	豊中市立文化芸術センター	10/11(水)～ 10/13(金)	坂口 昌優	花田 和加子 高荷 春菜
10	大阪府	箕面市 (みのおし)	(公財)箕面市メイプルホール文化財団	グリーンホール (箕面市立市民会館)	1/19(金)～ 1/21(日)	福川 伸陽	山本 若子 三浦 幸恵
11	広島県	坂町 (さかちよう)	坂町	坂町立町民交流センター	3/15(木)～ 3/17(土)	岩崎 洵奈 喜名 雅	小澤 櫻作 井尾 祥子
12	福岡県	太宰府市 (だざいふし)	(公財)太宰府市文化スポーツ振興財団	プラム・カルコア太宰府	1/25(木)～ 1/27(土)	坂口 昌優 喜名 雅	丹羽 徹 竹内 ひとみ
13	佐賀県	嬉野市 (うれしのし)	嬉野市文化振興事業実行委員会	リパティ [嬉野市社会文化会館]	10/12(木)～ 10/14(土)	ヴィタリ・ ユシュマノフ 加藤 文枝	小澤 櫻作 千葉 真弓
14	熊本県	菊陽町 (きくようまち)	菊陽町	菊陽町図書館ホール	1/18(木)～ 1/20(土)	喜名 雅	小澤 櫻作 貴田 雄介
15	大分県	玖珠町 (くすまち)	玖珠町	くすまちメルサンホール	9/28(木)～ 9/30(土)	塚越 慎子	小澤 櫻作 貴田 雄介
16	富山県	滑川市 (なめりかわし)	(一財)滑川市文化・スポーツ振興財団	滑川西地区コミュニティ ホール	9/21(木)、 9/22(金) 10/19(木)～ 10/21(土)	早稲田 桜子 大熊 理津子	山本 若子
17	岐阜県	関市 (せきし)	関市	関市文化会館	9/26(火)～ 9/30(土)	BLACK BOTTOM BRASS BAND	丹羽 徹
18	大分県	九重町 (ここのえまち)	九重町教育委員会	九重文化センター	9/21(木)～ 9/23(土) 3/15(木)～ 3/17(土)	BLACK BOTTOM BRASS BAND Quatuor B	小澤 櫻作

平成29年度公共ホール音楽活性化事業 全体研修会実施概要

1 概要

平成29年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミを開催した。2日目には登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーションと交流会を実施し、最終日はグループに別れて企画検討会議及び発表を行った。

2 参加者

平成29年度事業実施団体 担当者

3 日程

平成29年4月17日（月）～19日（水）（3日間）

4 会場

4月17日（月）・19日（水）：一般財団法人地域創造 会議室

4月18日（火）：HAKUJU ホール

5 実施団体研修スケジュール

4月17日（月）

時間	会場：地域創造 会議室
13:00～13:10	オリエンテーション
13:10～15:10 (120分)	ワークショップ 赤丸急上昇 赤松美智代、丸山陽子（ダン活支援登録アーティスト）
	休憩（20分）
15:30～16:00 (30分)	おんかつを知る Vol.1～基礎編～ 小澤 櫻作
16:00～16:30 (30分)	おんかつを知る Vol.2～実務編～ 地域創造
	休憩（10分）
16:40～19:00 (140分)	おんかつを知る Vol.3～事例紹介編～ Ⅰ：真庭市、つくば市の事例（45分） 井尾 祥子（真庭市）、中村 利昭（つくば市）、小澤 櫻作 Ⅱ：演奏家の事例（45分） 磯 絵里子、神谷 未穂（登録アーティスト）、丹羽 徹 <休憩（5分）> Ⅲ：事業担当者の役割とは（45分） 三浦 幸恵

4月18日（火）

時 間	会場：HAKUJUホール（渋谷区富ヶ谷）
10：00～11：30 (90分)	おんかつから始まるホールと地域の未来 大澤 寅雄（アドバイザー）
昼食休憩（60分）	
12：30～14：20 (110分)	フィードバック～これまでのゼミを振り返って～ 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
14：20～14：30 (10分)	プレゼンテーションの聴き方 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
休憩・移動（30分）	
15：00～18：35	平成28・29年度登録アーティスト公開プレゼンテーション 加藤 文枝（チェロ） 喜名 雅（チューバ） 岩崎 洵奈（ピアノ） ＜休憩（20分）＞ 塚越 慎子（マリンバ） 福川 伸陽（ホルン） ＜休憩（20分）＞ ヴィタリ・ユシュマノフ（声楽（バリトン）） 坂口 昌優（ヴァイオリン）
休憩・移動（25分）	
19：00～21：00	交流会 参加者、H28・29登録アーティスト、コーディネーター

4月19日（水）

時 間	会場：地域創造 会議室
10：00～12：00 (120分)	フィードバックとグループ別企画検討 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
昼食休憩（60分）	
13：00～15：00 (120分)	企画発表 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
15：00～15：15 (15分)	事務連絡、閉講式

第2部
平成29年度公共ホール
音楽活性化事業
事例紹介・アシスタント
レポート

実施団体：茨城県鉾田市

実施時期：平成30年1月18日（木）～平成30年1月21日（日）

出演アーティスト：塚越 慎子（マリンバ） 志村 和音（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：塚越慎子 Concert of Marimba Music

～あまい音色のいちご一会～

期 日：平成30年1月18日（木） 18：00～18：45

会 場：鉾田市立旭公民館 講堂

参加者：JA茨城旭村 理事・職員 41人

JA茨城旭村の帽子とジャンパーを着用した塚越さんと志村さんは、マーチング用の木琴と鍵盤ハーモニカを用いて、「道化師のギャロップ」を演奏しながらの登場。マリンバと木琴の違いや仕組み、マレットの材質・大きさによる音の違いなどを説明。さらに別の角度から音楽の面白さを知っていただこうと事務員に扮しての「タイプライター」を演奏。来場者を5班に分け手拍子によるボディーパーカッションを行い『リズム』を楽しんでいただきました。また、鉾田市の特産である『いちご』をモチーフにした塚越モデル(?)いちごマレットが初登場し、会場が大いに盛り上がりました。

タイトル：塚越慎子 Concert of Marimba Music

～あまい音色のいちご一会～

期 日：平成30年1月19日（金） 16：00～16：45

会 場：茨城県立鉾田第二高等学校 音楽室

参加者：吹奏楽部・邦楽部・音楽授業専攻生徒・写真部・教員 40人

高校生らしく笑顔あふれる温かい雰囲気の中での登場。前半は前日と同様の内容。邦楽と洋楽の良さを理解するため、洋楽らしくテンポをキープした演奏と邦楽らしくルバートに演奏した曲の受けた印象の違い、メロディーラインは変えずにリズムのみ変えた演奏の違いを聴き比べ、自分の好きな音楽（奏法）を大事にして欲しいと説かれた。

また、同校吹奏楽部と「エルクンパンチェロ」を共演していただき、部員一同思い出に残る演奏会となりました。



タイトル：塚越慎子 Concert of Marimba Music
～あまい音色のいちご一会～

期 日：平成30年1月20日（土） 10：30～11：15

会 場：銚田市立銚田小学校 西音楽室

参 加 者：吹奏楽部・教員 39人

インフルエンザの影響で休んでいる部員もおり開催が危ぶまれましたが、温かい拍手に迎えられての登場。マリンバの温かく豊かな響きを体感してもらおうと「白鳥」を演奏。次に、「雪」をリズムを変えて演奏し、自分の受けた印象を大切にすること、意見を出し合いみんなで共感する音楽の楽しみ方を学びました。前日と同様に3組と共演していただいた後、プロの姿勢、考え方が聞ける質問コーナーでは、部員が考えた質問に一つ一つ懇切丁寧に答えていただきました。

参加してくれた部員の目の輝きがとても印象に残る授業となりました。



タイトル：塚越慎子 Concert of Marimba Music
～あまい音色のいちご一会～

期 日：平成30年1月20日（土） 19：00～19：45

会 場：銚田市立大洋公民館 大集会室

参 加 者：銚田市民合奏団Brighten（ブライタウン） 18人

翌日に控えたコンサート会場にて平成28年11月に発足した市民合奏団と最後のアクティビティ。団員はオリジナルTシャツを着用し客席にて鑑賞。ステージに席を移し、塚越さんを囲むようにして「Top of the World」を共演。合奏団の特徴でもある弦楽器、吹奏楽とが入り混じる編成での音楽を塚越さん・志村さんにも楽しんでもらいました。最後はサプライズで「Sing Sing Sing」まで共演させていただき、終始笑顔の絶えない時間となりました。



コンサート

タイトル：塚越慎子 Concert of Marimba Music
～あまい音色のいちご一会～

期 日：平成30年1月21日（日） 14：00開演

会 場：銚田市立大洋公民館 大集会室（定員：308人）

入場者数：252人

休憩20分を挟む2部構成のプログラム。事前にメッセージ動画や楽曲解説をいただき、塚越さんの人柄やクラシックに親しんでいたこうと目でも耳でも楽しめるコンサートを目指した。塚越さんの楽曲に対する想いや解説付きの演奏、「ボレロ」では志村さんが会場を練り歩くなど、観衆を巻き込み、温かい雰囲気に包まれたコンサートとなりました。

また、運営面でもアクティビティの参加者から協力を頂き、多くの方々に支えられ、銚田ならではのコンサートを創り上げることができました。



① 応募の動機・事業のねらい

農業を基幹産業とする本市において、文化芸術に対する意識は低いうえ、施設も公民館しかなく老朽化や耐震問題があるなか、ホール機能と公民館機能を併せもつ『市民交流館』の建設を平成30年度の開館に向けて整備を進めており、これまでクラシックに縁のない方々に本物の音楽を伝え、一人でも多くの市民に興味を持ってもらい、開館への機運を上げていくために応募した。

② 企画のポイント

- ・職員は企画運営面での経験が無く、新施設の開館後を意識してノウハウを学ぶ
- ・農と芸術との組合せをどうするか
- ・市民（吹奏楽部員など）とプロ奏者との共演
- ・市民にクラシック音楽を好きになってもらう（クラシックの壁を破る）
- ・塚越さん、志村さん、花田さん、桜井さん、米山さんと出演関係者に銚田市を好きになってもらう

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・『市民交流館』建設計画の白紙
- ・アーティストのスケジュール計画とアクティビティ先との日程調整
※当初マリimba組立・解体の所要時間、演奏による体力の消耗などを考慮しない計画としていた
- ・予約済みの公民館クラブとの諸室の調整
- ・アクティビティ先での一連の流れ、進行の打合せ不足
- ・食事場所（特に夜食）

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・芸術文化の必要性を課内及びこれまで関わっていただいた市民と再確認するとともに、市長、市議会議員に会場まで足を運んでいただき、会場内の雰囲気を感じ、市民の生の声を聞いていただく。
- ・コーディネーターの花田さん、アシスタントの桜井さんにアドバイスをもらう。
- ・公民館職員と連携をとり、公民館クラブと柔軟な調整を図ることができた。

⑤ 事業を実施しての成果

今回のアクティビティ先として、銚田市の『農』と『未来の若者』をテーマに4団体を選定。農と芸術との組合せをどうするか、プロと共演することで奏者の意識改革とレベルUPを計りたいと考えた結果、塚越さん、志村さんのお力により参加していただいた団体から感謝のお言葉をいただきました。プロの演奏を間近で聴ける機会は少なく、市民が望んでいるものであると実感できる瞬間でした。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

会場とした公民館では設備が整っていないため、控室とトイレは公演の度に不足しており、アーティストと観客とが共有して使用しなければならない。また、技術スタッフも居ないため、照明のタイミングなど四苦八苦してしまった。有料公演で開催する以上改善していかなければならない点である。また、場当たり・転換など花田さん、桜井さん、米山さんに全て任せてしまい、運営を学ぶことを疎かにしてしまった。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

文化施設の建設計画は白紙となりましたが、本市における芸術文化事業はスタートしたばかりです。この火を絶やすことなく、本物を体験することが如何に大事であるか、未来の子どもたちに継承し愛される街となるよう大人たちが考え、良き答えを導き出さなければならないと考えさせられました。

塚越さん、志村さんと4日間一緒に過ごさせていただき、二人ともアイデアは豊富であり、改めてアーティストの持つ力の奥深さを実感できました。今回の事業を糧に一人でも多くの音楽ファンが生み出せる事業を展開し、継続していきたいと思いました。

関東平野の東の端に位置し、北に涸沼、南に北浦、東に太平洋と水に囲まれた市域をもつ人口約4万人の銚田市。水はけが良く、温暖な気候に恵まれた農地では、メロン栽培が有名で、味、収穫量ともに日本一を誇っている。今回は平成30年度にオープンする予定であった新館に向け、市民や行政の芸術文化に対する意識高揚を図るとともに、本物の音楽を伝える機会として、クラシックに親しむ機会の少ない市民でも、クラシックに入り易く、楽しく参加できるステージを演出していただきたいという担当者の平沼さんの願いによって実施された。

<アクティビティ>

アクティビティ先は、銚田市在住の市民の皆様によって構成されている銚田市民合奏団のメンバー(学生時代に吹奏楽部やバンド活動をしていた、自分の楽器を持っている人等)、全国有数の農地を誇る銚田市のJA茨城旭村の農協理事の方をはじめとする職員の皆様、市内の小学校1校、高等学校1校(吹奏楽部・邦楽部)の計4カ所である。担当の平沼さんがこの4カ所に着目した理由は、クラシック音楽への「意識改革」と「意識向上」の2つにあった。

まず、JA茨城旭村でのアクティビティでは、基幹産業である農業に従事されている方に対して、日常生活とは違う異空間を体験して頂きたい、平沼さんご自身がおんかつを通じてクラシックに興味を抱ようになったように、市民の皆様にその機会を是非提供したいという願いが強くあった。普段は中々耳にすることのないクラシック音楽の魅力に触れ、芸術に対する市民の皆様の意識を高めていきたいという狙いがあった為、アクティビティ内容は親しみをもてるような曲目や演出が求められていたが、アーティストの塚越慎子さんは見事に集中力の高い演奏に加え、工夫を重ねた構成で会場の空気を集めていったように思えた。

また、残り3つのアクティビティ先では、曲目は違えど、塚越さんとの共演を必ず1曲プログラムに取り入れていた。これも担当の平沼さんの“ホンモノに触れて感じてほしい”という願いから実施に至った。塚越さんの音を間近で感じながら共に演奏することは、小学生だけではなく、合奏団の大人の皆様にとっても大変貴重な機会となったようだ。特に、合奏団の皆さんは、終演後も塚越さんに自ら話掛けに行き、普段の練習方法を質問していたりと平沼さんの当初の狙いを叶えることが出来たと実感した。

<コンサート>

当初はクラシックの主催公演が少ないこともあり、来場者数の心配もあったが、担当の平沼さんをはじめとする本事業担当の方々の尽力もあり、8割はアーティストが現地入りする前に売れていた。コンサート内容は、マリンバのオリジナル作品からクラシックの名曲アレンジ作品、日本の童謡等、幅広いレパートリーを披露し、マリンバの魅力を存分に伝えられるプログラムであった。また、伴奏者の志村さんの功績もかなり大きく、本来の伴奏者の役割を枠を超え、鍵盤ハーモニカや小打楽器も担当しており、塚越さんの世界観をより一層強く体現する役割を担っていたように感じた。

アクティビティ先の先生や生徒達も足を運んで下さり、お客さんの様子から、非常に満足度の高いコンサートであったことが証明されたと思う。さらに現銚田市長も塚越さんの演奏の虜となり、終演後には「銚田市をもっと芸術であふれた町にしていきたい」と強く語っていらした。

<さいごに>

今回のおんかつで特に感動したことは、本事業に携わっていた銚田市の皆さんの情熱である。銚田市民への愛、芸術への意識の高さ、何より皆さん全員が銚田市を心から大事に想っていることが、今回の

おんかつ成功のカギだったと感じている。それがアーティストに伝わり、アーティストを通じて市民の皆様にも伝わり、銚田市を音楽で活性化していくきっかけになったのではないだろうか。今回は担当の皆さんの熱意の上に、各方向からの働きがあり、チームワークが実ったおんかつだった。今後も、この情熱で銚田市を盛り上げていってほしいと切に願う。

実施団体：埼玉県秩父市

実施時期：平成30年3月1日（木）～平成30年3月3日（土）

出演アーティスト：塚越 慎子（マリンバ） 志村 和音（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：塚越慎子マリンバミニコンサート

～音楽のパワーでいきいきと～

期 日：平成30年3月1日（木） 14：00～15：00

会 場：秩父市福祉女性会館 集会室

参 加 者：シルバー人材センター会員 43人

シルバー人材センターの会員向けに、限定50名で、ミニコンサートを実施。会場内では、お二人の登場から、音楽に合わせて、手拍子が沸き起こった。日本のうたメドレーでは、12曲含まれているという演奏曲を思い思いに考え、知っている曲に合わせて歌詞を口ずさむ方々もいた。アクティビティでは、表打ちと裏打ちの手拍子を二人1組で行い、会場は終始笑顔であふれ、大盛り上がりのなか、音楽とリズムを楽しんでいた。



タイトル：～お仕事帰りにふらっと癒しのひとときを～

塚越慎子マリンバミニコンサート

期 日：平成30年3月1日（木） 17：45～18：30

会 場：秩父宮記念市民会館 エントランス

参 加 者：秩父市職員 28人

秩父市職員向けに、限定30名で、ミニコンサートを実施。日が沈み、外が暗くなったエントランスは、とても良い雰囲気のコンサート会場となり、「白鳥」や塚越さんのソロ演奏曲「アメージンググレイス」など、しっとりとした曲をじっくり聴いていただくことができた。アクティビティでは、表打ちと裏打ちの手拍子の練習を経て、「シングシングシング」では、リズムに乗って、手拍子を打ち鳴らし、思い思いに音楽を楽しんでいた。



タイトル：つかぞしのりこマリンバミニコンサート

～マリンバってなあに？おんがくってたのしいな～

期 日：平成30年3月2日（金） 10：15～11：00

会 場：秩父市立久那幼稚園 ワークルーム

参 加 者：園児20人 評議員5人 職員8人 合計33人

幼稚園児と職員、評議員に向けて、ミニコンサートを実施。園児は、「さんぽ」の音楽に合わせて、足を踏み鳴らし、早くなったり、遅くなったり、止まったりと元気に身体を動かしていた。アクティビティでは、「この楽器は何か？」と楽器の音色に耳を傾け、口々に楽器の名前を発言していた。マリンバとピアノの伴奏で、「ひなまつり」を大きな声で歌い、最後には、マリンバに触れそうな距離でマリンバの音色に聴き入っていた。



タイトル：塚越慎子マリンバミニコンサート
～中学1年生に贈るマリンバとの素敵な出会い～

期 日：平成30年3月2日（金） 14：40～15：30

会 場：秩父市立吉田中学校 音楽室

参加者：1年生42人 職員10人 合計52人

中学1年生に向けて、ミニコンサートを実施。高音を連打する「剣の舞」と低音の和音が美しい「白鳥」の響きの違いを聴き比べ、「雪」では、リズムを変化させた3パターンを演奏し、自分が好きだと思うパターンを発表し合った。アクティビティでは、自分の選んだ「雪」のテーマに合わせて新聞紙でリズムを奏で、音楽の自由さを体験した。最後は、「千本桜」をマリンバのすぐ近くで聴き、身体全体でマリンバの響きを体感していた。

コンサート

タイトル：未来へ羽ばたくすべての人へ贈る音楽のプレゼント
「塚越慎子マリンバコンサート」

期 日：平成30年3月3日（土） 14：00開演

会 場：秩父宮記念市民会館 大ホールフォレスト（定員 721人）

入場者数：364人

THEクラシックという名曲から、童謡、ポップスまで、マリンバの高音のコロコロとした可愛らしい音色から、低音の深い音色まで、マリンバを存分に堪能できるバラエティに富んだプログラムとなった。また、マリンバだけに限らず、キッチン用品やタイプライターなど、楽器でないものを楽器にしたり、鍵盤ハーモニカによる客席の練り歩きがあったりと、観客を惹きつける工夫が随所にちりばめられていた。塚越さん、志村さんのお二人のハーモニーが、木のぬくもりのあるホールと相まって、とても素敵な時間を作り出し、来場者からは「ブラボー」の声が上がるなど、大盛況のコンサートとなった。



① 応募の動機・事業のねらい

秩父宮記念市民会館は、平成29年3月26日に開館したばかりのホールであり、同年8月から開館記念公演として様々な事業を展開してきた。旧市民会館では、自主事業を行っておらず、新市民会館では、鑑賞事業のみならず、育成事業も積極的に展開し、会館のコンセプトである「つながる・はぐくむ・とどける」を実現することを目指している。そこで、本事業の取り組みを通じて、新会館のPRを行うとともに、様々な対象、世代に音楽をとどけることにより、行政間の枠組みやジャンルを越えて地域の人々とつながり、ホールと地域との関係をはぐくみ、豊かでしなやかな心と秩父の地域づくりを推進するため、本事業に応募した。

② 企画のポイント

継続的な取り組みを目指し、初年度のアクティビティは、様々な人々との出会いをつくりだすことをポイントとし、市民会館になかなか足を運ぶことができない遠い地域に住んでいる身体的距離感が遠い方々、また、興味や関心が薄く市民会館との精神的距離感が遠い方々に向けて、アクティビティを行った。幼稚園と中学校については、アクティビティ当日までに、子どもたちの気持ちを盛り上げるため、名前入りの招待状を作成し配布した。

コンサートについても、継続的な取り組みを目指し、卒業や就職など、人生の節目を迎える方々に向けて、音楽でエールを送り、市民会館が未来への一步をふみ出すとき、背中を押してくれる家族のような存在となることを目指し、テーマ設定を行った。

プログラムでは、秩父で生まれた「旅立ちの日に」を活用することで、あまり馴染みのないクラシック音楽を身近に感じてもらえるよう工夫した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

当初、コンサートのテーマを絞りすぎていたため、集客が難しいことが予想された。

コンサートのテーマから、本番日を3月に設定したため、準備期間が長期間にわたり、スケジュールの見通しが立てづらかった。

コーディネーター、アシスタント、地域創造、マネージメントと、関係者が多く、当初、決定権を持っているのが、どなたかが分からず、どのように進めてよいのか迷うタイミングもあった。

初めての試みであったため、アクティビティ先からの要望をどのように吸い上げてよいか、また、市民会館としてどこまで希望を出してよいのか分からず、当初、アイデアを出すことが難しかった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

関係各所と綿密に連絡を取り合うことで、役割分担が明確となり、疑問点はすぐに連絡し、解決する関係作りを構築した。また、アクティビティ先にも、何度も足を運び、積極的にコミュニケーションを図ることで、先方の要望やこちらの希望を話しやすい環境づくりを行うことにより、対象者を第一に考えた提案が可能となった。コンサートのテーマ設定については、コーディネーターのアドバイスを受け、対象を広げることで、集客につなげた。

⑤ 事業を実施しての成果

各アクティビティの対象に合わせたプログラムにより、いずれのアクティビティも大変喜んでいただき、市民会館の取り組みを関係各所に示すことができた。また、アウトリーチを行う際のノウハウを学

ぶとともに、ネットワークを築くことができ、新しい事業の幅が広がった。

コンサートでは、アクティビティでのつながりや、様々な媒体での広報宣伝を行ったことにより、これまでの来場者とは異なり、鑑賞機会が少ない人にも多く来場いただくことができた。また、コンサートの照明も工夫し、舞台の演出の可能性が広がった。

エントランスの飾りや体験コーナーの設置など、会場全体で、コンサートを楽しんでいただけるよう工夫を凝らし、担当者のみならず、会館スタッフ全員で事業を作り上げ、盛り上げることができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

コンサートの来場者は、60代、70代が多く、最初のメインターゲットである卒業を迎える子どもをはじめ、若年層の集客が少なかった。チラシや情報誌は、郡市内の全小中学生に配布しているが、集客に繋がらなかったことから、親御さんや先生方など、子どもに直接影響を与える大人への働きかけと意識改革が重要であることを改めて実感した。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

秩父市は、平成17年に合併し、埼玉県内で最も面積の広い市町村となった。また、昨今、どの自治体でも課題として挙げられている高齢者の増加も市の大きな課題の一つとなっている。そのような背景の中、本事業に取り組んだことにより、秩父市の広さとまだ出会っていない人々との出会いを感じた。アクティビティでは、ホールから飛び出し、直接音楽を届けることの大切さ、影響力、必要性を実感するとともに、市民会館としてこの事業に継続的に取り組んでいくことの重要性を更に感じる事ができた。毎日とはいかないが、繰り返しアウトリーチを実施することにより、「劇場」や「音楽」がある暮らしが当たり前になり、市民会館に興味を持ち、「市民会館」が身近な存在となって、足を運んでくれる人が増えるのではないかと考えている。市民会館が新しくできたことにより、市民をはじめ、多くの人々の人生をより豊かに充実したものにすることができる環境を整え、市民会館から新しい生活スタイルを提案していきたい。

2017年3月に開館したばかりの「秩父宮記念市民会館」は、池袋から特急で80分、最寄りの西武秩父駅から徒歩5分ほど。西武鉄道による再開発の一環で、西武秩父駅も同時期にリニューアルオープンしており、温泉施設・フードコート・秩父の名産を扱うお店が併設された立派な駅舎となっている。市民会館は、歴史文化伝承館（中央公民館）と市役所と同じ敷地内に立っており、外観はガラス張りでオープンな雰囲気。1000席余りの大ホール、多目的室や会議室を有している。ホールには秩父産の木がふんだんに使われており、舞台に立ってみると、あたたかな空間にほんのり木の香りがした。

市民会館の基本方針として掲げられているのが、“つながる・はぐくむ・とどける”という3つの言葉。開館初年度の今年は、まず、“つながる”ことを主軸に、さまざまな人に会いに行くということをテーマとされている。市民のみなさんに市民会館を身近なものとして知っていただき、そして足を運んでいただけるように、今回のおんかつを“つながる”第一歩として、今後も継続的に展開をしていきたいということであった。担当の高井さんは、開館準備の段階から秩父に赴任、在住されているコンサルタント。そしてもう一人の担当の彦久保さんは、秩父生まれ秩父育ち、市民会館の担当となられて初めて文化芸術関係に携わられるとのこと。そんなお二人が考えられたテーマが、“次の一步を踏み出す全ての方々に応援したい”というもの。実施時期がちょうど3月であり、この春卒業を迎える子どもたちや、希望を持って新たなステップへ進もうとしている全ての方にエールを送り、市民会館が地域のみなさんにとって“背中を押してくれる家族のような存在”を目指してのことであった。

アーティストはマリンバの塚越慎子さん。秩父産の木をふんだんに使用したホールとマリンバの相性が大変良いこと、そして、4月のプレゼンテーションを聴いた高井さんの頭の中に、即座にイメージが浮かんだのが塚越さんのマリンバだったそうだ。こうして、地域のさまざまな年代の方に会いに行くアクティビティと、『～未来へ羽ばたくすべての人へ贈る音楽のプレゼント～ 塚越慎子マリンバコンサート』は始まった。

〈アクティビティ① シルバー人材センター〉

学校用務や庭掃除、市民会館を含め、施設の受付などの業務を請け負って働く高齢者が会員となっており、登録会員数は約750名、主な世代としては60～70歳代が多いという。センター内には歌のサークル、手芸サークルがあり、年1回程度、会員同士の交流会も行われている。このアクティビティのテーマは“いきいき”。働く高齢者のみなさんに、音楽の力でより元気になっていただき、少し敷居が高いと思っているクラシックを身近に感じてほしい、というねらいであった。

事前申込制で集まった50名ほどの会員のみなさんは口々に、生演奏やクラシックは初めて、こんなに近くで演奏を聴くなんて、と言いつつも、とても楽しみにされている様子である。そんな会場に飛び出すように登場する塚越さんと志村さん。それぞれマーチング用の木琴と鍵盤ハーモニカを携え、「道化師のギャロップ」を軽快に演奏しながら部屋中を練り歩く様子に、みなさん大変驚かされていた。木琴との比較でマリンバの特徴を説明した後、マリンバならではの音色や響きを体感してもらうために「白鳥」を、その後は、何でも打楽器として用いて音楽ができるということで、実際のタイプライターを使って「タイプライター」を演奏した。目の前で繰り広げられる光景と、聴こえてくるさまざまな音は、みなさんから多くの反応を引き出していた。続いて、かの有名な「エリーゼのために」をアレンジしたもの、全十数曲をメドレーにした「日本のうたメドレー」と続き、参加型のプログラムへ。「上を向いて歩こう」に合わせて、二人一組で手を交差させ、表裏リズムを叩いていただくという内容で、うまく曲にのることと、二人のコミュニケーションが必要となるものであった。最初は戸惑っていた様子であったが、音楽を体で感じるという体験や、自分も音楽に参加をしたという達成感を感じられていたように

思う。ラスト2曲は、尾崎紀世彦の「また会う日まで」、モンティの「チャールダーシュ」。多くの方が口ずさめる曲で親しみを、技巧的な曲でクラシックをしっかりと聴かせ、拍手喝采のうちに終了した。

〈アクティビティ② 市民会館ロビー：市職員向けのミニコンサート〉

市役所と市民会館は隣接しており、2つの建物は通路でつながっている。普段から市民会館の催しに参加して下さっている市職員も多いが、市民会館の取り組みを知ってもらい、存在をよりアピールしたいということで、終業後の時間帯にアクティビティを実施することになった。市民会館の中のホールに足を運んでもらうきっかけとなれば、ということで、当初は大ホール舞台上でのアクティビティを計画されていたが、ガラス張りのオープンな雰囲気を活かし、気軽にふらっと立ち寄っていただけるように、場所を市民会館ロビーに変更した。ガラス張りで天井も高く、夕焼けから日没後にかけて、とても良い雰囲気である。

“お仕事帰りにふらっと癒しのひとときを”ということで、事前申し込みを含め、30名ほどの方が集まった。アクティビティ①と同じく「道化師のギャロップ」でスタートし、「白鳥」、「タイプライター」、参加型のプログラムと続く。スイング・ジャズの名曲「sing sing sing」をバリッと聴かせた後、「アメイジンググレイス」でしっとりとした大人の雰囲気に。最後は駆け上るような「チャールダーシュ」の演奏で、メリハリのある選曲、充実した内容のアクティビティとなった。

〈アクティビティ③ 久那幼稚園：3歳児、4歳児、5歳児 23名+教職員+評議員 5名〉

毎年恒例の『ひなまつり会』の日に、『つかごしのりこマリンバミニコンサート ～マリンバってなあに？おんがくってたのしいな～』として実施された。どのクラスでも毎日歌を歌っているという子どもたち。毎年12月にある発表会では、すずやトライアングル、タンバリンなどの打楽器やピアノなどで合奏を行っているという。

「道化師のギャロップ」で登場し、子どもたちの顔の前まで近づいて演奏を行うお二人。近すぎるくらいの距離で聴くプロの技に、みんな釘付けであった。子どもたちに身近な曲として、「北風小僧の寒太郎」、「さんぽ」などを演奏した後、参加型のプログラムとして、目をつむって打楽器の音を聴き、それが部屋のどこから聴こえてくるかを指さすというものが行われた。こっそりと部屋中を移動する塚越さん、静かに耳をすませる子どもたち。子どもたちの集中力を高め、聴覚を研ぎ澄ませる良い体験となった。続いて、この会のために練習していた「ひなまつり」を歌い、塚越さん、志村さんと「共演」。最後はそれぞれが好きな場所に移動して、「チャールダーシュ」を聴いた。志村さんの後ろで食い入るようにピアノを見る子、つま先立ちで自分の背丈ほどの大きなマリンバを見る子、思い思いの楽しみ方をすることで、子どもたちの記憶に強く残るアクティビティとなったのではないだろうか。

〈アクティビティ③ 吉田中学校：1年生2クラス 44名〉

市街地から少し離れている吉田中学校は、普段から音楽鑑賞の機会が少なく、学校としても、取り組みたい気持ちはあるものの、なかなか実現できていないということであった。また、秩父市内で最も市民会館から遠く、子どもたちだけでは市民会館に足を運ぶことが難しいということから、こちらから出向いて音楽を届けるために、今回のアクティビティが行われた。

前半の曲目は、アクティビティ①、②と同様「道化師のギャロップ」、「白鳥」、「タイプライター」で、子どもたちの興味と耳をひきつける。参加型のプログラムは、志村さんのピアノに合わせて1人1人が新聞紙を用いて、ピアノとセッションをするという内容。雪やこんこん♪で有名な「雪」の原曲とアレ

ンジ版2種類を聴かせ、それら3曲のうちから自分の好きなバージョンを選んでもらい、それぞれグループに分かれた後、一人ずつ演奏を行う。新聞紙が楽器になるのかと戸惑いや驚きを見せた子どもたちに、塚越さんはどのような方法があるかを問いかけ、びりびり破る、ぐしゃっと丸める、ひらひらと揺らす、ぱんっと蹴るなどのアイデアを引き出して、即興で実演を聴かせていた。いざ新聞紙を手にとると、恥ずかしがったり、うまくできなくて焦ったりと子どもたちの様子はさまざまであったが、どんな形であってもそれがみんなの音楽、ということで、一人ひとり違った「雪」を聴かせてもらうことができた。再び塚越さんの演奏に戻り、担当の先生のリクエストであった「剣の舞」を、最後は子どもたちの間でよく聴かれているボカロの曲「千本桜」。好きな場所に移動して聴いても良いということで、ピアノの中を覗き込む子、下にもぐる子、マリンバの共鳴管を目の前にして聴く子など、子どもたちの聴き方と反応が面白かった。

〈コンサート〉

「マリンバのマレットが巻き方ひとつで奏でる音が変化するように、それぞれの個性を大切に、次のステップへ羽ばたいてほしい」と話されていた高井さんと彦久保さん。そんなコンサートの仕掛けは、ロビーに足を踏み入れた瞬間から始まっていた。ロビーの壁一面が色とりどりのマレットのイラストで飾られ、マリンバの音が聴こえてくるよう。これは、ロビーにある階段の柵部分をマリンバの音板に見立てたという、高井さんのアイデアによるものであった。また、地元の作家さんが製作された、自分で木の板を並び変えることができる木琴の体験コーナーもあり、これから始まるコンサートへの期待が高まった。

コンサートは「剣の舞」で華やかに始まり、「白鳥」、「エリーゼのために」と続く。ビジネスマンになりきった志村さんと塚越さんの名刺交換から始まった「タイプライター」は、まるで志村さんのピアノの音が重役の話し声で、それを秘書の塚越さんがタイプライターで文書化しているように私には聴こえた。ブラームスの「ハンガリー舞曲第5番」から「sing sing sing」へと続き、塚越さんの演奏に会場内は釘付けとなっていた。

後半最初はラヴェルの「ボレロ」。泡だて器にボールなどの台所用品から、チャイム、グロッケンなどの打楽器に、4種類の鍵盤ハーモニカ、そしてマリンバが、入れ代わり立ち代わりメロディを担当し、たった2人しかいないにも関わらず、さまざまな音の種類と、まるでオーケストラの演奏のような厚みで音楽が進んでいく。塚越さんのアイデア、そしてお二人のアンサンブルとテクニックで、圧巻の仕上がりであった。続いては、アクティビティでも好評であった「日本のうたメドレー」、そして、卒業式の定番曲「旅立ちの日に」。この曲は、秩父市で生まれ、広く歌われるようになった曲で、今回はぜひ会場全体で歌いたいという担当者のリクエストによるものだった。さすが発祥の地ということで、みなさんしっかりと歌っておられ、会場が一体となったように感じた。

あたたかな雰囲気にも包まれたホールで、コンサートはクライマックスに向かっていく。歌詞がコンサートのテーマにぴったりということで、リクエストのあった「銀河鉄道999」、相性の良いホールでマリンバの響きをたっぷりと感じられる「星に願いを」、そして、クラシックの魅力とテクニックを存分に聴かせる「チャールダーシュ」。アンコールの「千本桜」まで、盛りだくさんの充実した内容であった。

〈全体を通して〉

担当者のお二人とは、実は4月の研修会で同じテーブルとなり、そのコンビネーションの良さが印象的であったが、第一印象と変わらず、お二人のチームワークを発揮されていた秩父市おんかつ。そして、

それはお二人だけでなく、市民会館のスタッフのみなさん全員にあるものだということを実感した。高井さんの頭に浮かんだアイデアを具体化し、実現して下さる方、ハードワークを気遣いながら、お父さんのように見守って下さる上司の方。初めて伺ったときから、なんとなく落ち着く、あたたかい空間だと思っていたが、それは、スタッフみなさんの人柄とチームワークによって生まれたものだということが、このおんかつを通して分かった。“市民会館は、市民をはじめ、ご来場・ご利用されるすべての方々の人生に寄り添う場所でありたい”というビジョンをお聞きしていたが、きっとここならそれが実現可能だと思う。

今回のおんかつは当初より、目的と目標設定が明確であり、担当者の熱意、それをなんとか実現しようというスタッフのみなさんの気持ちも合わさって、ここまでの内容の充実につながった。“つながる”ための初年度、今回の種蒔きを活かして“はぐくむ”、そして育てたものを“とどける”といったように、市民会館が地域の中でどういった役割を担っていくか、これからがとても楽しみになった。

実施団体：一般財団法人上里町文化振興協会

実施時期：平成30年1月11日（木）～平成30年1月13日（土）

出演アーティスト：坂口 昌優（ヴァイオリン） 鶴見 彩（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：音楽との素敵な出会いコンサート

期 日：平成30年1月11日（木） 10：30～11：30

会 場：ワープ上里多目的ホール 舞台上

参加者：ピアノ＆ヴォイスクラブ 21人

中央公民館の定期利用団体のピアノ＆ヴォイスクラブさんへのアウトリーチですが、公民館では、音が響きすぎてしまうためにワープ上里の舞台上で開催しました。講師のソプラノ歌手との共演、またメンバーとのアヴェマリアの共演を行いました。また、リクエストのあった真田丸の演奏をしていただきました。



タイトル：音楽との素敵な出会いコンサート

期 日：平成30年1月11日（木） 14：20～15：05

会 場：上里町立長幡小学校音楽室

参加者：5年生 39人

小学校5年生を対象にアウトリーチを行いました。カルメンではDVDを観てもらってから演奏していただきました。39名の児童がヴァイオリンの演奏を至近距離で堪能しました。



タイトル：音楽との素敵な出会いコンサート

期 日：平成30年1月12日（金） 10：20～11：00

会 場：萌美保育園遊戯室

参加者：年長・年中・年少

保育園の年長、年中、年少児を対象にアウトリーチを行いました。リズムに乗って体を動かしてもらったり、ディズニーの小さな世界の合唱等を行いました。



タイトル：音楽との素敵な出会いコンサート

期 日：平成30年1月12日（金） 13：50～15：00

会 場：上里町立神保原小学校学習室

参加者：6年生 50人

小学校6年生を対象にアウトリーチを行いました。カルメンではDVDを観てもらってから演奏していただきました。カノンの演奏の際にピアノカで共演してもらいました。

演奏終了後は、かなり大勢の児童からの質問がありました。最後は、記念写真の撮影も行いました。



コンサート

タイトル：やすらぎと癒やしの時間

坂口昌優ヴァイオリンコンサート

期 日：平成30年1月13日（土） 14：00開演

会 場：ワープ上里多目的ホール（定員：500人）

入場者数：162人

やすらぎと癒やしをテーマにコンサートを開催しました。コンサートでは、初心者でも分かりやすい曲を中心に演奏していただきました。



① 応募の動機・事業のねらい

当財団では、音楽活動として「かみさと音楽祭」や「クリスマスコンサート」を開催しています。また、平成27年度より「ふるさと文化・芸術人材バンク」を設立して地域で活躍するアーティストや団体に登録いただき、アウトリーチコンサートやワークショップ等を開催しています。しかし、地域の団体や地元アーティストは、アマチュアや会社員を本業としている方が多く、音楽を本業としているプロの一流の音楽を聴いていただきたい、アウトリーチ活動を通じて音楽の楽しさを知ってもらいたく、事業に応募しました。

② 企画のポイント

アクティビティでは、少人数を対象になるべく幅広い年齢層に聞いていただきたいということもあり、保育園児から大人まで聞いて欲しいという思いで保育園、幼稚園、小中学校、サークル活動を行っている一般の団体に声を掛けてアクティビティ先を決定しました。コンサートでは、やすらぎと癒やしをテーマにして、コーディネーターの山本さんや坂口さんとも打合せを行いながら企画をしました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティでは、小中学校は2校と決めていて教育委員会を通じて難なく選定しましたが保育園、幼稚園は7園ある中の1園と決めていて、3園ほど申込があり、決定方法を検討しなければいけなくなりました。また、一般の団体は公民館利用団体の中からすぐに決定しましたが、メンバーの方から内容が良く分からないと言われました。コンサートでは、やすらぎと癒やしをテーマにしましたがテーマが上手く通じるか不安でした。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

保育園、幼稚園は公平を期すために抽選を行いました。公民館利用団体には、練習時におんかつの説明をして納得していただきました。コンサートのテーマについては、担当者のイメージを演奏者である坂口さんに伝えてプログラムを考えていただきました。

⑤ 事業を実施しての成果

今までもアウトリーチ活動は、地域のアーティスト等に依頼して行っており、例えば小中学校の場合だと全校生徒対象のアウトリーチコンサートとなっていました。“おんかつ”では、少人数を対象とすることにより演奏者との距離が近くなり、聞いている方が吸い込まれていく様子がわかりました。ある会場では感動で涙を流された方もいました。コンサートでは、坂口さんのMCも素晴らしく来場された方から素晴らしかったという言葉の数多くいただきました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

反省点としては、やはりコンサートの来場者数が少なかったことが上げられます。広報活動を行っては来ましたが、もっとPRする方法を模索しなくてはいけないと思います。また、このような事業は継続してこそ意味があることだと思いますので継続出来るようにしていきたいと思います。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

上里町は、比較的音楽に親しんでいる方が多くワープ上里でもご自身が出演される方が多いのですが、

そのような方達にもコンサートに足を運んで欲しいと思います。上里町は、町全体が平地で、特に今の冬の時期は、町外から来た方から景色が良いと言われます。そういった自然の景色等も活かした事業を、今後開催できたら良いと思っています。

▶まちとアーティストが丁寧に「出会う」

上里町は、埼玉県最北部、埼玉県本庄市と群馬県高崎市の間に位置する人口約3.1万人のまちである。東京駅から東海道本線の普通電車で揺られて約2時間、上野駅から上越新幹線に乗ると約90分ほどでアクセスできる。

上里町のシンボルとなるゆるキャラは「こむぎっち」。その名前からも分かるように、まちの特産品は、種子小麦である。まちの中を巡回するコミュニティバスは「こむぎっち」のラッピングバス。晴れた日には富士山かと見間違えるほどに大きく浅間山が見える。冬には赤城おろしと呼ばれる冷たい空風が吹き付ける。

さて、なぜ私がこんなに上里町のことを知っているのか。それは、今回担当してくださったワープ上里の高橋さん、山下さん、移動車の運転やアクティビティ先への紹介・同行などでお世話になった岡村さんの3人による熱心な上里町の紹介があつてのことだ。

特に移動の車中では、まちで起こった些細な出来事や人の動き方、まちの生活スタイル、そしてアクティビティ先の様子や状況をお話してくださった。こうした上里町を知る時間の積み重ねによって、坂口さん、鶴見さんのお二人が丁寧に上里町と出会うこととなり、まちの人々の温度感に馴染むようなアクティビティとコンサートの内容に繋がっていったと思う。

▶上里町の中に音楽を〈置いてみる〉ーアクティビティとコンサート

小学校2校、保育園1校、上里町を拠点に活動する音楽団体「ピアノ＆ヴォイスクラブ」、計4回のアクティビティを行った。ここでは、保育園と「ピアノ＆ヴォイスクラブ」でのアクティビティの内容、そしてコンサート当日の様子を詳しく紹介したい。

1日目に行った「ピアノ＆ヴォイスクラブ」さんを対象にしたアクティビティは、より音響環境の良い場所で行いたいという理由からワープ上里の舞台上で行った。「ピアノ＆ヴォイスクラブ」さんは、その名前の通り、歌とピアノをグループ練習し、まちのイベントなどで活動している。舞台上で、坂口さん・鶴見さんと対面になる形で20名ほどのみなさんが舞台上に集まった。

このアクティビティの特徴は、クラブを主宰し、声楽家でもある堀内先生と坂口さん・鶴見さんの共演を、生徒のみなさんが聴くという場面にあつたと思う。生徒のみなさんにとって、先生が声楽家として歌う姿はこれまであまり見る事がなかったそうだ。坂口さん・鶴見さん、先生の真剣な音楽家としての表情とパフォーマンスに生徒のみなさんは強く引き込まれていたようだった。

また、事前の打ち合わせでのリクエストに坂口さんが応える形で、NHK大河ドラマ「真田丸」のテーマ曲が演奏された。「真田丸」は、大河ドラマによる知名度の高さではなく、隣町に真田丸にゆかりのある場所があり、馴染みがあるということからリクエストがあつた。間近で演奏されるヴァイオリンの音と坂口さんの立ち姿に圧倒された様子だった。

2日目の午前中に伺った萌美保育園は、日頃から太鼓や歌など音楽に接する機会が多い保育園だった。年少組から年長組までの約60人が通い、アクティビティにはその全員が参加した。当初は年中組と年長組のみを対象に行う予定だったが、下見の際、実際に園児のみなさんの様子に触れ、園児全員がアクティビティに参加できる可能性を感じたのだ。特に年少組は、非常に落ち着いた様子であつたことに加え、先生方とお話しの中で、ぜひ全員にアクティビティを経験させたいという希望が出ていた。その後、坂口さんとの打ち合わせで全員参加のアクティビティを実施することになり、全員が歌うことのできる「小

さな世界」を坂口さんと鶴見さんの演奏に合わせて歌うという共演の時間も設けられることになった。

実際のアクティビティでは、まさに子供たちが演奏に「引き込まれる」といった様子だった。じっと真剣な表情で聴き入る子、曲調に合わせて体を揺らす子、感想を隣の友達とヒソヒソと話し合う子、ひとりひとりが思い思いの態度で坂口さんと鶴見さんの演奏に触れていた。そして「小さな世界」の共演は、歌とピアノ、ヴァイオリンによる盛大な協奏となった。アクティビティが終わった後、移動の車中で坂口さんと鶴見さんが「感性がすごい。こちらが演奏に抑揚を付けて演奏すると、それに反応して歌が変化して良くなってた！」と言っていた通り、子供達の声と体の動きが2人の演奏によってどんどん豊かに行くような、そんな時間だった。そして、最後のまとめに先生が園児に語りかけた言葉が印象的だった。「みなさん、これが音楽なんですよ」と。

最終日に行ったコンサートでは、チケットを持ったお客様が開場前からロビーの外で列を作っていた。ロビー周りの案内やチケットもぎりなどは、ワープ上里のボランティアのみなさんが務めてくださった。また、アクティビティに参加した小学校の児童の顔も度々見かけることができた。

コンサートで、坂口さんがプログラムに盛り込んだのはベートーヴェン作曲のヴァイオリンソナタ第5番「春」だった。アクティビティでも毎回演奏されたが、コンサートではカットせず全曲を通して演奏された。この「春」の演奏を中心に、年が明け、次の春の訪れを予感させるような温かい気持ちになるコンサートになっていたと思う。

また、坂口さんが曲の合間に入れるMCは、アクティビティでの様子や上里町の印象など、上里町に滞在しているからこそ話せる内容も十分に盛り込まれていた。坂口さん自身の言葉で演奏する曲や自分自身のことを語ることで、聴いているお客様に何か安心感をもたらすような、そんな空気感を作り出していた。企画段階の時、高橋さんが見出したコンサートのコンセプトは「癒しとやすらぎ」だった。コンサートは、まさに、音楽と音楽家が作り出す「癒しとやすらぎ」が存分に前に出たものになったと思う。

▶おわりに

余談だが、私自身いわゆる都市生活の中に生まれ育ち、現在は比較的大きな規模の劇場や、大学・研究機関の劇場という枠組みの中で仕事をする機会が多い。そのため、まちに住む〈誰か〉について、具体的に顔を思い浮かべながら事業の内容を考えることが（恥ずかしながら）これまでほぼ皆無であった。

今回、高橋さんをはじめワープ上里や上里町役場の方々の方々の姿勢に触れる中で、まちの中の〈誰か〉を見だし、思いを馳せることができるのは、日々その地域と向き合い、活動している事業担当者にしかなれないことなのだと痛感した。一音楽を〈誰〉のために届けるのか、〈誰〉の何のために芸術文化を届けるのか。一ワープ上里を利用する人を、上里町に住む人を、常に見つめている高橋さんや山下さんの眼差しによって、こうした問いが真摯に応えられ、上里町おんかつが形作られていったと思う。

今後も、上里町に住む〈誰か〉と真摯に向き合いながら、ワープ上里がより多くの〈誰か〉にとっての大切な存在となっていくことを願ってやまない。

実施団体：文化創造南砺合同会社

実施時期：平成30年3月8日（木）～平成30年3月10日（土）

出演アーティスト：坂口 昌優（ヴァイオリン） 岩崎 洵奈（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：ヴァイオリン&ピアノ 交流ミニコンサート①

期 日：平成30年3月8日 11:25～12:10

会 場：南砺市立上平小学校 音楽室

参加者：4～6年生 40人

ホールからは高速を使っても30分以上かかる、世界遺産の合掌造り集落で有名な地域の小学校で実施しました。デュオ曲の他、ピアノ・ヴァイオリンそれぞれの楽器の説明とソロ曲も演奏しました。楽器の近くで聴いてもらうコーナーでは子供たちは興味津々で聴いていました。最後に卒業式の全校合唱で歌う「心の中にきらめいて」を共演しました。全校児童との給食交流では、児童からアーティストへのインタビューなど大変盛り上がりました。

タイトル：ヴァイオリン&ピアノ 交流ミニコンサート②

期 日：平成30年3月8日 15:00～16:00

会 場：円形劇場ヘリオス ステージ

参加者：南砺市旅川福祉交流館 利用者・職員 40人

南砺市旅川福祉交流館に入居している3つの障害者関係事業所（マーシ園 地域活動支援センター、福祉作業所メイプル福野、なんと共同作業所）の利用者と職員を対象に実施しました。施設にはピアノが無いのでホールでの実施となりました。フランクのヴァイオリンソナタを聴いた感想を聞くと、非常に想像力豊かな意見を出してくれた方がいました。最後は「花は咲く」メドレーを参加者一人がピアノでドを弾いて、他の方は持参した小打楽器と一緒に演奏しました。

タイトル：ヴァイオリン&ピアノ 交流ミニコンサート③

期 日：平成30年3月9日

会 場：南砺市立井口小学校 音楽室

参加者：1～6年生（全校児童） 43人

合併前は旧井口村という所の、全校児童43人という小規模校でのアクティビティでした。1～6年生と対象年齢が幅広いので、アーティストにとっては難しかったかもしれませんが、低学年は反応よく盛り上がり、高学年は控えめながらも興味深そうに、全員真剣に聴いていました。演奏だけでなく、将来の夢の話や、スプリングソナタが岩崎さんにとって初めてのアンサンブル曲だった話などトークも印象的でした。最後は地元民謡「こきりこ」を歌と演奏で共演しました。



タイトル：ヴァイオリン&ピアノ 交流ミニコンサート④

期 日：平成30年3月9日

会 場：南砺市立福光南部小学校 音楽室

参加者：5・6年生 39人

旧福光町の山際にある小学校で、高学年対象に実施しました。落ち着いている児童が多い印象でした。ピアノやヴァイオリンの近くで聴くコーナーでは控えめにあまり出てこない子もいれば、積極的にピアノにもぐって楽しんでいる子もいました。アーティストの夢の話に加えてベートーヴェンの苦悩の話も大変印象的でした。最後に卒業式の全校合唱で歌う「さよならと言おう」を共演し、とても美しい歌声を響かせてくれました。

コンサート

タイトル：坂口昌優&岩崎洵奈 春の訪れコンサート

～ヴァイオリンとピアノが奏でる、色あざやかな世界へようこそ！～

期 日：平成30年3月10日（土） 14：00開演

会 場：南砺市福野文化創造センター円形劇場ヘリオス（定員：613人）

入場者数：162人

3部構成のコンサートで、第1部はアクティビティでも演奏した親しみやすいプログラムを中心に演奏。第2部は地域やホールの特徴を活かし、絵本『ことりをすきになった山』の朗読と生演奏のコラボが実現しました。選本と朗読はホール併設の図書館司書の方にお願ひし、絵本をスクリーンに映して照明での演出も入れました。第3部はそれぞれのソロと、ベートーヴェンのスプリングソナタ全楽章で締めくくりました。アンケートは大変好評でしたが、集客が課題となりました。



① 応募の動機・事業のねらい

当館はクラシック音楽の自主事業が年に1回しかないので、市民の多様なニーズに応えるため、親しみやすくかつ本格的なクラシックコンサートを実施し、新しい客層も開拓したいと考え応募しました。同時にアウトリーチも行い、地域の子供たちやコンサートに行きたくても行けない人に本物の音楽を届けたいと思いました。また、ホール職員の経験も浅いため、事業の実施を通して企画制作のノウハウを得たいと考えました。

② 企画のポイント

アクティビティ：南砺市は8町村が合併した市で面積が広いので、小学校はなるべく旧町村でホールが無い地域を選びました。また、学校だけでなくコンサートになかなか足を運べない方にも音楽を届けたいと思い、福祉施設・作業所向けのアクティビティも実施しました。

コンサート：小学生が家族と一緒に来られるようなコンサートにしたいと考え、小学生料金は100円と低価格に設定しました。本格的な演奏を聴かせるのはもちろんのこと、このホールならではの、地域やホールの特性を活かしたプログラムを取り入れたいと思い、絵本の朗読とクラシックのコラボプログラムを企画しました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

「地域コラボプログラム」の企画内容について特に苦労しました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

周辺の創造的なコンサートに足を運び、どのような方法があるか、どうしたらより効果的で良いものになるか考え、まずは地域の影絵師の協力を得て影絵とクラシックのコラボで進めようと思いました。しかし、スケジュールの都合で実現できず、これまでに指定管理者企画で実施してきた、ホール併設図書館との共催事業「絵本ライブ」の経験を土台に、絵本の朗読とのコラボを考えました。選本は朗読を司書の方にお願ひし、こちらで絵本を読み込んで曲を入れる場所や曲のイメージをアーティストにお伝えしました。実際に合わせたのは現地入り後でしたが、少ないリハ時間にも関わらず、関係者の皆さんのおかげで一つの作品として完成することができました。

⑤ 事業を実施しての成果

アーティスト、コーディネーターの皆さんの協力を得て、3年間でやってきた指定管理者企画の公演としては一番クオリティの高い公演になったと思います。客層は、子供の割合がいつもより多く、アンケートを見るとクラシック初心者は絵本コラボで、クラシックファンは演奏でそれぞれ満足していただけたように感じました。

これまでの当館の自主事業は、ほとんどがホールのプロデューサーが決めたものをただやってきただけだったので、制作担当としては企画制作の経験も、やりがいや達成感も得ることができませんでした。今回のおんかつではアーティスト選定、事業の企画から担当し、他の職員の意見も取り入れ、それぞれが自分の役割を持って取り組むことができました。職員にとっても意義のある事業になったと思います。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

・集客には大変苦労しました。ラジオCMや新聞広告などは予算の関係上できませんでしたが、周辺コ

ンサートへの折込や市内小中学生全員へのチラシ配布など、予算内でできる限りのことはしました。もっとアーティストとコンサートの魅力を、知らない人にも伝える言葉を考えればよかったと思います。入り日にラジオ出演をさせていただいたり、連日新聞に掲載されたりして、直前で大きく伸びて当日券が50枚以上売れました。アクティビティ参加者には招待券や割引券を配りましたが、行事が重なったり、ホールが遠かったり、アクティビティで満足してしまった子もいたようで、アクティビティからコンサートへ来た方は少数でした。

- ・舞台を作り上げた経験がほとんど無く、コーディネーター、アシスタントの方に頼りきりになってしまいました。アーティストと地域の間を取り持つ役割の重要性を勉強させていただきました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

プロの奏でる生の音楽の素晴らしさを一人でも多くの方に届けることを目標に実施しましたが、改めて、一回きりで終わるものではなく継続することに意味がある事業だと感じました。今回弊社は次年度以降のホールの指定管理を更新することができず、関わった職員もホールを離れるため継続が困難となりました。継続することでアウトリーチの回数も重ねて集客も増やしていくことができたと思います。アンケート結果を見ると大変好評で、初めてホールに来られた方も多くいらっしゃいました。今後とも南砺市でアウトリーチ活動や地域を活かしたコンサート等が継続されることを願います。

富山県の南西部に位置し、東に富山市、西に石川県金沢市、南に岐阜県飛騨市や白川村、北に砺波市や小矢部市と隣接している南砺市。山間部には平成7年世界文化遺産に登録された「五箇山合掌造り集落」があり、平成28年12月には、城端神明宮に曳山祭が無形文化遺産に登録されるという、香り高い歴史や文化・伝統の技も豊かな街。今回のおんかつの舞台は、そんな南砺市の中心にある、展示ホール、各種学習室、図書館などを複合した芸術総合施設の中の「円形劇場ヘリオス」での実施となった。

担当の森田さんは、前年のアーティストプレゼンテーションにも足を運んでいらっしゃる、本事業に対し、非常に熱心に取り組んでいらした。コンセプトは「市民のためのホールづくり」。ホールと市民の垣根を越え、今までホールにほとんど足を運んだことのない方も楽しめるクラシックコンサートを目指し、その第一歩として、ヴァイオリニストの坂口昌優さん、ピアニストの岩崎洵奈さんを迎えての実施となった。

<アクティビティ>

アクティビティ先は、市内の小学校3校と福祉交流館の利用者さんをヘリオスに招いての実施となった。

まず、小学校3校はホール所在地から少し離れた場所にあり、その地域の方々はホールへ足を運ぶ機会が少ないということから選出された。これも森田さんのコンセプト通り、ホールをもっと市民の方に知ってほしい、という願いからである。

学年は3校ともバラバラであったが、アーティストという普段あまり関わることのない人に出会うことで、将来の夢を考えるきっかけになってほしいということから内容としては、高学年向けに行われた。アーティストのお二人もコンセプトを理解していた為、自分が何故音楽家として生きていこうと思ったのか等、演奏以外の部分でも丁寧に子供と向き合う姿が印象的であった。また質問コーナーでは、日々の練習についてや楽器のこと、音楽に関わる質問が多く出ていたことから、子供たちの中で彼女達の演奏や話が響いていたことも感じ取ることが出来た。

福祉交流館の利用者さんとは、全員で一緒に演奏する共演プログラムを用意しており、事前に楽器を準備してきて頂いていた。館の担当の方も、アーティストの方と一緒に演奏が出来る事に感動しており、岩崎さんとの連弾のシーンでは、涙を浮かべて喜んでいらした。昨今、参加型というプログラムに対して様々な意見があるが、目的が明確な参加型プログラムであれば、非常に双方にとって意味のある時間を共有出来る事を今回強く確信した。

<コンサート>

ステージと客席が近いという利点、更に照明等で凝った演出もできるというホールの長所を活かしたコンサートにしたいという森田さんの狙いから、様々な工夫が施されたコンサートになった。特に力を入れていたのが、ホールと併設されている図書館にて、普段読み聞かせを行なっているという中川さんとの絵本コラボである。主催公演として絵本の読み聞かせは度々行なっているということだったが、演奏とのコラボレーションははじめてということだったので、毎日綿密なりハーサルが行なわれた。本番は、照明の演出も加わり、幻想的な世界を演出することが出来たと感じた。照明、音楽、絵本の読み聞かせのバランスが絶妙にマッチしていたからであろう。終演後のお客さんのアンケートからも大変好評を頂けた。また、森田さんがコンサートに求めている事の一つに、アーティスト魂を見せる、音楽だけの真剣勝負プログラムというものがあったが、こちらも初めての共演とは思えない息のあった二人の演奏に、お客さんの集中力が非常に高くなっていく様子が舞台裏から感じられた。

<最後に>

今回のおんかつは、ひとえに森田さんの地域、ホール、音楽への情熱で成り立っていたと思う。先述したとおり、前年からアーティストプレゼンへ足を運び、満を持しての今回のおんかつだったわけだが、今後の南砺市の更なる文化・芸術の発展の起爆剤となってくれることを切に願う。また、ヘリオスならではのコンサートを作り上げることができたのも非常に大きい功績だと思う。一から考え作り上げることはたやすいことではないが、是非こちらも引き続き実施し続けて頂きたい。

実施団体：公益財団法人野々市市情報文化振興財団

実施時期：平成29年9月7日（木）～平成29年9月9日（土）

出演アーティスト：坂口 昌優（ヴァイオリン） 鶴見 彩（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：みんなの音楽会inほのみこども園

期 日：平成29年9月7日（木） 10：00～10：45

会 場：ほのみこども園 ホール

参 加 者：年長児19人＋併設高齢者施設入居者とデイサービス利用者約10人

全国的にも珍しい「幼老複合施設」の特徴を生かし、園児と高齢者向けに実施。誰もが耳にしたことのある名曲を演奏するほか、「ベートーヴェン ソナタ」では、坂口さんオリジナルの物語を先生に朗読していただいた。「ハンガリー舞曲」では子どもたちが音楽に合わせて行進、「ふるさと」では子供とお年寄りがお互いに歌を贈りあうよう向き合って合唱し、多彩な内容となった。音楽に合わせて足踏みをしたり手拍子をするお年寄りもいた。



タイトル：みんなの音楽会in石川県立明和特別支援学校

期 日：平成29年9月7日（木） 14：00～14：45

会 場：石川県立明和特別支援学校 音楽室

参 加 者：中学部の生徒23人

知的障害者の施設で、特に自閉症の生徒が多いという事で、見通しがつくよう事前にプログラムを通知した。MCでは落ち着きがない生徒も、演奏が始まると静まり、集中して鑑賞していた。「世界に一つだけの花」では、演奏に合わせて生徒たちが合唱。最終的に、MCが簡潔になり予定時刻より早く終了してしまったが、生徒たちにとっては充実の内容となったようだった。



タイトル：みんなの音楽会in北陸学院扇が丘幼稚園

期 日：平成29年9月8日（金） 10：00～10：45

会 場：北陸学院扇が丘幼稚園 ホール

参 加 者：年長児21人＋保護者約20人

年長児と保護者を対象に実施。前日のほのみこども園同様、誰もが耳にしたことのある名曲を演奏するほか、「ベートーヴェン ソナタ」では、坂口さんオリジナルの物語を先生に朗読していただいた。「ハンガリー舞曲」では子どもたちが音楽に合わせて行進したところ、自然と踊り出す児童もあり、その姿を見守る保護者の顔が印象的だった。体を動かした後の「サン＝サーンス ソナタ」では気迫の演奏に児童の集中力も一気に高まった。



タイトル：みんなの音楽会 in 情報交流館カメラア
期 日：平成29年9月8日（金） 17：45～18：30
会 場：野々市市情報交流館カメラア 交流サロン
参 加 者：市役所職員や市内教職員など 延べ60人

市職員・市内教職員を対象に事前申込み制とし、約30人程の申込みがあったが、当日立ち寄る職員や一般客もおり、延べ60人程が鑑賞した。インリーチという事で、他3か所でどのようなアウトリーチをしてきたかを、坂口さんにお話しいただいたほか、本格的なクラシックの名曲も演奏いただき、良く音の響く会場だったことも相まって、コンサートさながらのプログラムをお楽しみいただけた。

コンサート

タイトル：想いをつなげるコンサート みんなの音楽会
～坂口昌優ところに響くヴァイオリン～
期 日：平成29年9月9日（土） 14：00開演
会 場：野々市市文化会館 大ホール（定員682人）
入場者数：319人

子供も大人も「みんなが楽しめる」がテーマで、誰もが耳にしたことのある曲から、クラシック好きも満足する名曲まで、バラエティに富んだプログラムで構成した。「ベートーヴェン ソナタ」では、アウトリーチで朗読した物語のロングバージョンを地元劇団員が表情豊かに朗読し、子供も集中して聴き入っていた。アウトリーチの写真をステージ上のスクリーンに投影し「ロンドンデリーの歌」にのせ鑑賞いただく事で、活動を知っていただく良い機会にもなった。



① 応募の動機・事業のねらい

県庁所在地金沢市に隣接する本市は、子育て世代が増加し商業施設が整備され活気づいている一方、芸術文化の分野では遅れを取っており、コンサートは金沢市に行き鑑賞するという感覚が強い。地域に音楽を根付かせるべく、アウトリーチで直接子育て世代にアプローチし、本市の文化の殿堂である当館に足を運んでもらうきっかけを作り、また、地元から輩出された演奏家の素晴らしさを通し野々市に対する「想い」を深めてもらいたい。

② 企画のポイント

子育て世代に直接アプローチできるように、保育園や幼稚園（幼稚園は保護者も一緒に鑑賞）をアウトリーチ先に選んだ。また、コンサートも子連れでも気軽に来場できるよう3歳からホール客席に入場できるように設定し、3歳未満は「おやこ観覧席」で鑑賞できるようにした。料金設定もワンコインの500円とし、家族みんなで来場したくなるような条件を徹底した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

本市職員にこの事業を理解してもらい継続していくため、また、市内教職員・保育園幼稚園関係者にアウトリーチの良さを知っていただくためにインリーチを計画した。一定の集客を確保するため、事前申込み制としたが、締め切りを過ぎても申込人数が少なく、関心の薄さが垣間見れた。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

市職員に対しては直接声掛けを行い、来場を促した。その他、アウトリーチ先からの紹介で、一定数の申し込みを確保することが出来た。また、インリーチ開催時間を終業時間に合わせて設定したおかげで、当日ふらりと立ち寄ってくださる職員も多かった。

⑤ 事業を実施しての成果

アウトリーチは初めてだったが、どの施設にも好意的に迎えていただき、今後に生かせる良い関係を築けた。幼児対象のアウトリーチは集中力の面などで少し心配だったが、参加する部分・集中して聴く部分のメリハリがあるプログラムのおかげで、子供たちも終始演奏に引き込まれているようだった。生演奏と朗読のコラボレーションはアウトリーチ・コンサートともに好評だった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

おやこ観覧席がクラシック音楽を鑑賞するには適さない環境という事を把握できておらず、生音の良さを求めて来場されたお客様には、満足していただくことが出来なかった。コンサート直前が夏休み期間という事や市内中学校の運動会と重なってしまったこともあり、ギリギリまでチケット販売数が伸び悩んだ。告知期間を前もって計算し、事前に市内の行事を把握してから開催日を決定することが大切だと実感した。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アウトリーチでは、参加した年長児が気迫の演奏に静まり返って聴き入る場面があり、とても印象的だった。その後「コンサートにも行きたい」と言ってくれる園児も多く、幼児期からでも生演奏の良さを感じてもらえるのだと実感した。コンサートはワンコインだったので、普段会館に足を運ばないよう

な方も来場してくださり、子連れでクラシックを聴きくことに興味をもつ一定層の掘り起こしが出来た。
また、思った以上に音楽に対する意識が高い親子連れが多く、音楽鑑賞を市民に定着させていくことの
可能性を感じた。

金沢駅から車で30分ほどに位置する、石川県・野々市市。近年、移住者が年々増加しており、幼稚園やこども園の数が多く、行政サービスが充実していることから、特に子育て世代に人気があるという。

おんかつの拠点となる「野々市市文化会館フォルテ」は、800席あまりの大ホールと300席の小ホール、その他カルチャールーム等を有し、開催23回を超えるジャズフェスティバルや、市民劇団の公演、地元ブラスバンド団体の親子向けコンサートなど、主催・共催含めてさまざまな公演が行われている。しかし、クラシック音楽のコンサートとなると、金沢市とバッティングすることから、アーティストや企画の工夫が求められ、集客の面からも、なかなか多くは実施できないということが課題となっていた。

担当者の日裏さんも、地元で生まれ育ち、就職で県外に出た後に戻ってこられた子育て世代のおひとり。そんなご自身の体験から出てきたキーワードが“地元への想い”、“子どもからご年配の方まで幅広い世代で”というものだった。野々市で育つ子どもたちにも、昔から住む方たちにも、自分たちの街を誇りに思ってもらいたいということ、また、今回のおんかつが、地域にクラシック音楽を根付かせるためのステップとなればという、日裏さんの“想い”があった。

そこで選ばれたアーティストが、ヴァイオリンの坂口昌優さん。野々市出身であり、進学・留学を経て故郷に戻って来られ、野々市市を拠点に活動をされている。文化会館フォルテとも以前からご縁があり、今回のおんかつの趣旨にはぴったりであった。こうしてスタートした『想いをつなげるコンサート みんなの音楽会』は、日裏さんとスタッフのみなさん、坂口さんの想いあふれるおんかつとなった。

〈アクティビティ① ほのみこども園：年長児＋高齢者施設入居者＋デイサービス利用者〉

こども園と高齢者向け施設併設という全国でも珍しい形態で、園の行事に施設利用者が参加するなど、日ごろから両者の交流があるという。

オープニングの「威風堂々」を受けて、行進曲についてのお話を聞いた後、「おもちゃの兵隊の行進曲」を聴いて体感をする。続いては、今回のために坂口さんが考えられたオリジナルのお話と音楽。こども園の先生が語りを務められ、ベートーヴェンの「ヴァイオリンソナタ第2番 第1楽章」に合わせて物語が進んでいく。ヴァイオリンの音色と先生の語りに、子どもたちも大人もどんどん引き込まれ、それぞれが思い思いに想像をめぐらせている様子が伝わってきた。アクティビティではお話は途中まで、コンサートで全編を上演するので、それまでそれぞれ続きを想像してみてね、という坂口さんの呼びかけに、早くも子どもたちは、口々に自分の考えを言い始めていた。

五感をはたらかせた後は、「ハンガリー舞曲第5番」に合わせて動いたり、手拍子をしたりという、体を使って音楽を表すプログラム。そして、サン＝サーンス「ヴァイオリンソナタ 第4楽章」では坂口さんのテクニック、息のぴったり合った鶴見さんとのアンサンブルを目の当たりにし、プロの音楽家のパワーを感じた。最後にみんなで「ふるさと」を歌い、拍手あふれる中で終了。老若男女、笑顔あふれるアクティビティとなった。

子どもとご年配の方という全く異なる年代に向けて、子どもを飽きさせず、大人も楽しめるというプログラミングは、主軸をどこに置くかということが難しかったと思う。坂口さんはそれぞれのお客様に視線を合わせて問いかけたり、お話をしたり、曲目でメリハリをつけながら、オリジナルのアイデアを盛り込み、幅広い年代を惹きつける内容であった。

〈アクティビティ② 石川県立明和特別支援学校 中等部〉

みんな歌うことが大好きだが、学校の特性上、予測がつかない状況が苦手という生徒も多いため、例外的に、事前に曲目をお伝えしておくことになった。すると、曲目一覧を黒板に貼り、さらに飾り付け

までして下さっていて、坂口さんと鶴見さんの来訪を楽しみにしておられることが伝わってきた。

前半は“踊りの音楽”をテーマに、「ハンガリー舞曲第5番」、「踊る人形」を演奏し、楽器の仕組みの説明も挟みながら「バスク奇想曲」で技巧的な一面も見せるというもの。続く「世界にひとつだけの花」では、生徒たちに歌で参加してもらい、「ロンドンデリーの歌」でゆったりと音楽を楽しんだ後、最後は「ラデツキー行進曲」と皆さんの手拍子で、会場が一体となった。

坂口さんは、初めは距離感の取り方をうかがっているような様子であったが、曲が進むにつれて、音楽を通してコミュニケーションを取ることができるようになっていった。目の前で繰り返される生の音楽に、生徒たちも刺激を受け、先生方も一緒に楽しみながら、大変喜んでおられた。

〈アクティビティ③ 北陸学院 扇が丘幼稚園：年長児+保護者（希望者）〉

文化会館フォルテの目の前にある園ということで、会館にも馴染みがある幼稚園。数年前まではプロの音楽家を招いてミニコンサートを実施していたが、今回が久しぶりの行事ということであった。

内容としては、アクティビティ①とほぼ同様であったが、キリスト教主義の幼稚園ということで、普段歌っている讃美歌を演奏し、子どもたちにも一緒に歌ってもらった。2か所のアクティビティを経て、坂口さんの問いかけや見せ方、聴かせどころがさらに増えていたように思う。普段何気なく使っている言葉でも、さらにかみ砕いた表現にしなければならなかったり、子どもたちからは思わぬ反応があったりするので、子ども向けのアクティビティは臨機応変さが必要となる。もちろん、入念な事前準備があったものだが、回数を重ねていくうちに、少し大胆に、そして頼もしくなっていく坂口さんを見ることができた。

〈アクティビティ④ 野々市市情報交流館カメラ：市職員を中心とした事前申込制〉

情報交流館カメラは、野々市市役所併設の施設であり、お互いひとつづきのフロアとなっている。終業後の市役所職員をターゲットに、財団の取り組みやおんかつの様子を知ってもらい、理解者、応援者を増やしたいというねらいがあった。会場は、普段オープンスペースとして使用されている場所のレイアウトを変更し、着席をしてじっくり聴く、通りすがりに少し立ち寄るといったように、自由な聴き方ができるようセッティングをした。

おんかつの登録アーティストとしての活動紹介や、これまでのアクティビティの報告も交えながら「威風堂々」、「踊る人形」、「ハンガリー舞曲」とプログラムを進め、ベートーヴェン「ヴァイオリンソナタ第2番」では、子どもたちに体験してもらった内容を伝えた上で、朗読なしの演奏のみで、みなさんに風景を想像していただいた。「ロンドンデリーの歌」はしっかりと聴かせ、最後の「ツイゴイネルワイゼン」は、曲の背景と音楽が表現している苦悩を話すことで、音楽をより深く共有することができたのではないだろうか。

このアクティビティでは、3か所のアクティビティを通じて坂口さんが得たもの、考えたこと、そして音楽に対する想いをうかがい知ることができた。そして、坂口さんのお話と音を通して、会場の皆さんにもそれらが伝わっていたように思う。

〈コンサート〉

子どもから大人の方まで、幅広い世代の方にクラシックを楽しんでもらいたいという想いから名づけられた『想いをつなげるコンサート みんなの音楽会』。コンサート自体は3歳より入場可としたが、3歳未満の子どもと親御さん向けに、客席後方にある親子室に限定数で〈おやこ観覧席〉という席を設定

した。より小さなお客様にも生の音楽に接する機会をという担当者の想いから生まれたアイデアである。また、ハワイエでは、2日間のアクティビティの写真展示が行われた。会館のスタッフの方が、まるで密着取材のように記録写真の撮影を下さり、展示のレイアウトもみなさんで作業を行って下さったお陰で、アクティビティの様子がとてもよく伝わる展示であった。

コンサートは休憩を挟んだ2部制で、はじめに「威風堂々」、「おもちゃの兵隊の行進曲」、そして、この日は地元の劇団で活動する役者さんに、坂口さんが創作されたお話の朗読をお願いして、演奏とのコラボレーションが行われた。坂口さんの奏でるベートーヴェンと、登場人物になりきった役者さんの声の相乗効果で、どんどん情景が広がっていく。舞台後方に絵が浮かんでくるようであった。物語の創作という今回の試みは、到達点が未知数であったため心配な面もあったが、坂口さんの創意工夫と、朗読をお引き受け下さったみなさんのご協力、そしてお互いの熱意により、とても素晴らしい仕上がりとなった。

前半の最後を「ツイゴイネルワイゼン」で締めくくり、休憩を挟んで後半へ。クライスラーの「シンコペーション」の後、続いては「ロンドンデリーの歌」。この曲は、コンサートのタイトルにもなっている、“想いをつなげる”ということ伝えるために選ばれた曲であった。坂口さんの音楽への想い、故郷の野々市への想い、さまざまな想いを込めて演奏され、その背景には、2日間のアクティビティの様子がスライドショーで投影された。会館スタッフの方が、前日夜から開演間際まで、記録写真を音楽のスピードに合わせて編集し、なんとか本番に間に合わせて下さった力作である。坂口さんの想い、日裏さんをはじめとした会館スタッフのみなさんの想いがあふれるロンドンデリー。会場のお客様にもしっかりと伝わっていたことが、演奏後の拍手からうかがい知ることができた。コンサートのラストを飾るのは、サン＝サーンス「ヴァイオリンソナタ 第3・4楽章」。圧巻のテクニックとアンサンブルで、聴く人を圧倒させる演奏であった。

〈全体を通して〉

今年度トップバッターであった野々市市おんかつは、実施期間が9月最初ということで、とにかく準備期間が短かった。そんな限られた時間の中でも、担当者の日裏さんは、ありとあらゆる場面で妥協することなく、できることは全て実行されたと思う。全てを書ききれないのが残念だが、宣伝広報ひとつにしても、印刷物の文章案から校正まで何度となく書き直しを行い、できあがったチラシやポスターは、地域にくまなく持参、掲示のお願いをし、さらに会館のFacebookで【おんかつ通信】という連載を始められ、その記事数は約1か月でNo.16までに達した。また今回は、坂口さんが野々市市在住という強みを活かして、地元のラジオにご出演いただいたり、日裏さんと対面で打ち合わせをしていただくことも可能であったため、準備段階からアーティストと共に作り上げるおんかつとなった。そして、どんな些細なことでも、コーディネーター、アシスタントにご連絡を下さったお陰で、コミュニケーションを密にすることができたと思う。

今回のおんかつを通して感じたことは、“常に自分を疑う”、“ふと立ち止まる余裕を持つ”ことの大切さだ。日裏さんはいつも、「これで大丈夫ですかね…」と言いながら、迷ったり行き詰まったりしたときには、時間がない中でも、きちんと考える時間を取っておられたと思う。そして、悩んだとき、立ち止まったときに、相談できる仲間、上司が周りにいるという環境。日裏さんと会館スタッフのみなさんがまさしくこのような関係性であり、担当者だけでなく、みなさんがこのおんかつに対する“想い”を持っておられるということが、ひしひしと伝わってきた。

さまざまな試みの検証や、今後の継続においてはもちろん課題があると思うが、おんかつに取り組んだことで芽生えた“想い”を、是非とも今後に“つなげて”いっていただければ嬉しい。

実施団体：一般財団法人 塩尻市文化振興事業団

実施時期：平成29年11月30日（木）～平成29年12月2日（土）

出演アーティスト：ヴィタリ・ユシュマノフ（バリトン） 山田 剛史（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：世界の歌と日本の歌

期 日：平成29年11月30日（木）10：45～11：30

会 場：塩尻市立木曾榎川小学校 ランチルーム

参加者：木曾榎川小学校4、5、6年生38人 教員8人

ヴィタリさんの迫力のある「九十九里浜」から始まり、初めてバリトンに触れた子供たちを圧倒。その後、「プリヴェート・スパシーバ」というロシア語に触れる歌をみんなで一緒に歌唱したり、良い発声をするための体操や呼吸法を全員で体験した。また声の振動を視覚的に感じるための実験を実施。子供たちの小さな声ではうまく振動しないこともあり、ヴィタリさんの声の使い方がいかなものか、子供たちも驚いていた。プログラムの最後、シューベルトの「菩提樹」からどういった情景を思い浮かべるかを投げかけ、皆思い思いのイメージを抱いて演奏に聞き入っていた。おわりに、サプライズで子供たちによるお礼の歌「スマイル・アゲイン」で締めくくった。

タイトル：本と音楽

期 日：平成29年11月30日（木）18：00～19：00

会 場：塩尻市立図書館 森のコート

参加者：事前予約、当日参加50人

図書館でのコンサートということで、塩尻市読書推進アドバイザー・松本美幸さんの朗読と歌のコラボレーションを行った。本の選定はヴィタリさんに依頼し、ロシアの大家・プーシキン著「エブゲーニイ・オネーギン」に決定した。会場となった図書館のど真ん中、吹き抜けの空間は普段とは違う空間に変容した。夜の図書館に松本さんの声が朗々と響き、ヴィタリさんの歌うオペラと絶妙なコラボレーションを成し遂げていた。今回のアクティビティで唯一大人向けに設定されたコンサートには、50人が集い、贅沢な一夜に酔いしれた。



タイトル：世代を超えて、みんなで一緒に歌をうたおう！

期 日：平成29年12月1日（金） 10：00～10：45

会 場：サンサンこども園 多目的ホール

参 加 者：サンサンこども園年長25人 老人福祉施設高齢者15人
職員8人

入場後、そわそわしていた子供たちはヴィタリさんの「九十九里浜」で一気に歌の世界へと引き込まれた。初めて耳にする大音声にびっくりして、思わず笑ってしまう子もいた。その後、簡単なロシア語の歌をみんなで歌ったり、クラシック曲を聴きながら情景を想像したりした。高齢者も招待したこともあり、最後は美空ひばりさんの「津軽のふるさと」も披露。一緒に口ずさんでいる方も見えた。また、プログラムにあった「紅葉」は、子供たちがまだ歌えないということで、普段歌っている楽譜を拝借し、全員で「三百六十五歩のマーチ」を熱唱した。プロのヴィタリさんすら圧倒する元気いっばいな子供たちの声、そしてそれを見守る高齢者たちがとても温かな空間を作り出し、この子供と老人の交わる施設で行った醍醐味を感じた。



タイトル：世界の歌と日本の歌

期 日：平成29年12月1日（金） 13：30～14：15

会 場：塩尻幼稚園 ほーる

参 加 者：塩尻幼稚園年長21人 職員2人

他の会場と同じく「九十九里浜」から入ると、子供たちはやはり目を丸くして聴いていた。初めて聴く生のバリトンに驚きと興味を隠せずにいたのが印象的だった。ここの子供たちは、日頃から歌に親しんでいたため、ヴィタリさんの発案で日常的に歌う曲の楽譜を借り、即興でプログラムに組み込んだ。とても楽しそうに大きな声で、その歌声を披露。ヴィタリさんの声を掻き消す程、元気な歌声が響いた。



コンサート

タイトル：ヴィタリ・ユシュマノフ バリトンコンサート

期 日：平成29年12月2日（土） 14：00開演

会 場：塩尻市文化会館 レザンホール（定員：409人）

入場者数：113人

大人向けのプログラムではあるが、子供も入場できるコンサートというコンセプトで実施。オペラの曲、ロシア民謡はもちろん、ヴィタリさんの持ち味である日本歌曲も披露。合間合間にトークを挟みながら、プログラムを進行。途中、山田さんのピアノソロも2曲演奏され、塩尻では珍しいバリトンコンサートが実現。前半では、シューベルト4曲が演奏されたが、ヴィタリさん曰く「関係のない4つの曲だが、私の中でストーリーに仕立てた。そう思って聞いてほしい」とのこと。ここでしか聞けない、おもしろいプログラムとなった。



① 応募の動機・事業のねらい

クラシック音楽は敷居が高いという意識があり、興味や造詣が無いとなかなか足を運びにくい。

また、現代ではインターネットの普及により家に居ながら動画サイト等で気軽に楽しめてしまう。だが、公共ホールで行うそれは、迫力や感動があり、そこで過ごす時間は他には代えがたいものである。生演奏のすばらしさを知ってもらい、少しでもクラシック音楽や鑑賞に興味を持つ子供たちを増やし、地域人口の裾野を広げ、気軽に公共ホールに足を運んでもらいたいと考え、事業に取り組んだ。

② 企画のポイント

次世代を担う子供たちに音楽の素晴らしさを知ってもらうべく「ホンモノ」の音楽家の歌を間近で聞き、一緒に体験することにより、興味を持ってもらうことを主体とした。また、音楽家と直接話しができるよう、木曾檜川小学校のアクティビティでは、一緒に学校給食を食べた。いつもはステージの上にいるだけのアーティストと話し、彼らの人間性を知ってもらうことにより、より身近に音楽とそれを扱うヒトを感じてもらうことを目的とした。図書館でのコンサートはパブリックプレイスで行うことにより、たまたま通りかかった人でも気軽に音楽を楽しめるように工夫した。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

当初は、図書館のアクティビティは子供向けとして行う予定であったが、平日の午後に当たる為、集客が難しいのではないかと様々な方面から苦い声が聞こえた。だが、塩尻市でも重要な位置づけにある図書館にてコンサートを行いたいとの思いがあったため、図書館で開催するための課題を何とかクリアしようと悩んだ。また、図書館でのコンサートなので、本を絡めたコンサートにするにはどうすればいいのか思い悩んだ。付随して、本番の時まで出演者と直接打ち合わせ等が出来ず、マネージャーを通してメールや電話でのやり取りのみであった為、こちらのやりたい事がうまく伝えられず苦勞した。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

図書館でのアクティビティを大人向けで予約制にし、来場者数を把握出来るように設定した。

⑤ 事業を実施しての成果

当ホールへ来ることが困難な人たちを対象として行ったが、アクティビティを行った施設から興味を持って親子でホールコンサートに来場してくれた方もいた。また、たまたま図書館に来館していた方からの集客もあった。クラシック音楽の地域住民に対する興味も向上していると感じた。中にはコンサートのことを知らず、たまたま近くを通りかかった木曾檜川小学校の2年生の児童と一緒に給食を食べたことを覚えており、親と立ち寄ってくれた。身近に音楽家を感じてもらうことも成功したように思う。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

幼稚園、保育園でのアクティビティを行い、子供たちは初めて聞いたプロの歌声にとっても驚いていた。本格的なコンサートとなると、未就学児が入場できるケースは少ない。今後も継続していかなくてはならない事業ではないかと改めて感じた。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

・当市のホールでは、クラシックコンサートはホールのキャパシティに比べて、なかなか人が集まらな

い。それは、近隣市におけるクラシックコンサートの競合によるものもあると思うが、それ以前にクラシック事業を実施している認知度であると感じた。

- ・音楽の敷居が高いと感じさせる原因は、きらびやかなステージ衣装で素晴らしい演奏をする音楽家がステージに立ってスポットを浴びていることにも一因があると考え。音楽家もヒトだということは、ホールに勤務し、彼らと直接話をしたことのある我々ならばわかる。しかし、ただ客としてホールへ足を運んだ人にはわからない。親しみを感じてもらうにはどうしたらいいのだろうか。親しみを感じてもらうとはイコールファンになってもらうことである。ファンになって、その音楽家と彼らの奏でる音楽を市民に愛してもらうには、こうしたアウトリーチで給食を一緒に食べる、コンサート後にお話をするなど人間性を知ってもらうのが一番の近道ではないか。この「町」で、これから音楽を根付かせるために、音楽家と地域住民を繋げる役目を持つのが「ホール」としての役割ではないだろうか。

<はじめに>

長野県のほぼ中央、北アルプスの麓にある豊かな自然に恵まれた塩尻市。ぶどうが名産で、塩尻駅のホームでは大きなワイン樽とぶどう棚が迎えてくれる。

「隣の松本市は多彩な芸術文化事業を行っているが、比べて塩尻市は積極的とは言えず、音楽に関心のある市民もいるのに外へ流れてしまっている」と話す担当の神戸（ごうど）さん。今回のおんかつで音楽のファンを増やし、レザンホールの事業や活動への理解を深めてほしい、また学校や市内各施設との繋がりを強固なものにしたいという思いがあった。個別研修では、ヴィタリさんが塩尻に来てくれることを如何に話題にするかのアイデアを出し合い、各アクティビティのイメージやその目的、本公演の方向性などを皆で確認・共有した。バリトンの魅力、ヴィタリさんの魅力を前面にアピールできるようなプログラムを練ると同時に、SNS等を活用しコンサートを楽しみに待てる工夫を凝らした広報を行った。

<アクティビティ①>

木曾檜川小学校は市の中心部から車で30分ほどの山間にあり、自力ではホールへ足を運べない子供たちに生の音楽を届けたいという思いからの企画。印象的なピアノ前奏から始まる九十九里浜、広大な自然と厳しい寒さを想像させるロシア民謡のふるさと。子供たちは一瞬にして曲とヴィタリさんに圧倒され、惹きこまれ、真剣な面持ちで聴き入っていた。歌の響きをイメージしやすくするため、ラップを張った器の上に砂糖をのせその近くで出した声の振動を可視化すると、子供たちは興味津々で覗き込む。そしてオペラで歌うための発声体操をレクチャーした後、一緒にふるさとを合唱した。「いつもより声が出た」「歌いやすい感じがした」という声があがった。

図書室にはロシアの物語や絵本を集めたコーナーが設けられ、給食はビーフストロガノフやりんごのシャルロットカといったロシアメニュー。帰り際には子供たちからサプライズで手紙や手作りのプレゼントをいただいた。学校全体で歓迎していただき、あたたかい気持ちを胸に学校を後にした。

<アクティビティ②>

“えんぱーく”という複合型の市民交流センター内にある塩尻市図書館は、その多機能性を活かしたイベントをこれまで数多く行っている。昼間は親子連れや小中学生で賑やかな図書館も、日が落ちると仕事帰りの大人が多く訪れ、心地よい静けさと書架を照らす照明が美しい。この夕方から夜にかけての時間帯に図書館を利用される20代～50代の方々をターゲットにミニコンサート形式のアクティビティを実施した。事前予約を募り、当日は30名程の方にお集まりいただいた。

吹き抜けの空間を会場にいくつかの小品を演奏後、プーシキンのエフゲニー・オネーギンからタチアナの手紙を朗読。切なく紡がれる恋慕の言葉にピアノの音色が重なり、続くヴィタリさんの歌。朗読によって浮かんだ情景に、音楽で彩色されるような感覚だった。広い図書館のその場所だけが他とは違う特別な空間になり、お客さまからも大変好評をいただいた。本の新たな楽しみ方を音楽で知る体験になったのではないだろうか。

<アクティビティ③>

塩尻駅の目の前、市内で一番高いビル内にある保育園、サンサンこども園。この園には特別養護老人ホームをはじめとした介護施設が併設されており、子供たちとグループホームの利用者さんは普段から交流があるという。ここでは歌で多世代交流を主軸にアクティビティを企画、プログラム中に子供たち

へ向けた歌（アイスクリームのうた）、利用者さんへ向けた歌（津軽のふるさと）、皆で一緒に歌える歌（まっかな秋）を入れた構成で臨んだ。子供たちは元気よく歌い、曲に耳を傾ける。その後方では利用者さんが子供たちの反応に時に笑いながら一緒に音楽を味わっている。今聴いている曲が知らない曲だとしても、「子供たちが／おじいちゃんおばあちゃんが楽しそうにしている」とお互いが思い合い、同じ曲を歌い、聴き、感情を共有する。一緒に何かをするだけの交流ではなく、こういった心の部分に焦点を当てた時間を重ねていくことには大きな価値がある。今後の塩尻でのアウトリーチの可能性を感じさせた。

<アクティビティ④>

ホールからほど近い塩尻幼稚園。この園に通う子供たちは小学校高学年で歌うような合唱曲をレパートリーにしており、日頃から歌に親しんでいる。プログラムの大筋はサンサンこども園と同じだが、同じ年齢の子供でも反応や歌い方は全く違う。ロシア語のこんにちはとありがとうを歌にした「プライベート&スパシーバ」を紹介すると、ヴィタリさんを真似てすぐに楽しそうに歌い出す。小さな声や大きな声で変化をつけながら上手に歌い切り、ヴィタリさんから大きな拍手をもらって嬉しそうに笑う子供たちの表情はとてもいきいきとしていた。元気で明るい子供たちはヴィタリさんの問いかけに活発に答えるだけでなく、こう思ったと自ら発言してくれる場面も多く見られた。集中して聴き、曲の解説に相槌をうち、一緒に歌い、50分の間に子供たちはヴィタリさんにどんどん感化されていく。一回で終わらせるのはもったいないと思うほどに、このアウトリーチで蒔かれた音楽の種がこれからどのように育ち花開くのか興味深い。

<コンサート>

ぼどうの蔓を思わせる照明が下がるレザンホールの中ホールは、まるでヨーロッパの教会のような石壁に囲まれているシューボックス型。音響は素晴らしく、バリトンとピアノの響きが円やかに客席に広がるという印象。プログラム一部ではジョルダノーやチャイコフスキー、シューベルトの歌曲といった重厚さや物語性のある曲を、二部は日本歌曲、ロシア民謡など親しみやすい曲をメインに構成した。雰囲気のある照明演出によってそれぞれの曲の持つ世界観が効果的に創り出され、バリトンの魅力を最大限に引き出した内容となった。演奏はもちろんのこと、ヴィタリさんと山田さんのお人柄に心を掴まれたお客さまから終演後たくさん嬉しい感想をいただいた。

<最後に>

アクティビティをひとつ終える度に誰よりも安堵の表情を浮かべていたのは、もうひとりの担当者井岡さん。企画の段階から心配事は尽きず、うまくいくだろうかと気が気でなかったという。実際にアーティストが滞在する時間は短く、現場に入ってから変更になったり新たに決まったりすることは往々にしてあり、どれだけ綿密に計画しても本番に何が起こるかは誰にも分からない。アーティストを信じ、聞き手に委ね、良い意味でその空間や流れに任せるという気持ちもある程度必要なのかもしれない。

神戸さん、井岡さんはじめホールの方々のあたたかい心遣い、細やかな気配りがおんかつの現場を整え、支えてくださった。ヴィタリさんは塩尻のファンになって、多くの方は次回を楽しみに待っている。アクティビティを無事にこなしコンサートを終えることだけが成功ではない、それ以上の達成感や充足感が得られたのではないだろうか。今後も神戸さんと井岡さんが発信源となって、レザンホールの魅力を地域に広め続けてほしい。

実施団体：高浜市やきものの里かわら美術館

実施時期：平成29年12月10日（日）～平成29年12月12日（火）

出演アーティスト：ヴィタリ・ユシュマノフ（バリトン） 喜名 雅（チューバ） 山田 剛史（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：いちごプラザで音楽会

期 日：平成29年12月10日（日） 11：00～11：45

会 場：愛知県高浜市子育て支援施設いちごプラザ 学びぽーと

参加者：乳幼児（就業前のお子さん）とその親 20組約50人

音楽を聞き、参加するプログラムと、楽器に触れたり、体を動かしたりするプログラムを実施した。子どもたちは、初めて見る楽器や聞く音に、一つひとつ反応しながら音楽を楽しんでいる様子だった。バリトンの声の大きさや、チューバの響きに驚いて泣いてしまう子もいたが、全体的に集中して音楽を楽しんでいた。子どもと一緒に本格的なクラシック音楽を聞いたことで、大人の満足度も高かった。

タイトル：音楽の奥深さを知る

期 日：平成29年12月10日（日） 15：30～16：20

会 場：かわら美術館 1階ホール

参加者：高浜高等学校 吹奏楽部

バリトンとチューバの持つ音や演奏家の力量を堪能できる曲目に加え、発声方法などを体験することで、音楽をより楽しめる構成であった。モーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』をバリトンとチューバで二重唱するプログラムなど、高校生は演奏家の圧倒的な表現力に魅了されたようで、真剣に音楽に聞き入っていた。ただ、(高校ではなく)かわら美術館が会場だったせいも、演奏家からの問いかけなどには高校生たちがやや消極的であった。

タイトル：音の楽しさを体験する

期 日：平成29年12月11日（月） 10：50～11：35

会 場：高浜市立翼小学校 音楽室2

参加者：翼小学校5年生 1組・4組

子どもたちに優しく・楽しく語りかけるように、演奏家から曲目紹介や楽器解説をしていただいた。さらに、ロシア語を覚えながら一緒に歌える曲や雷に見立てて手を叩く曲、チューバの構造や響きを体感できるプログラムがあり、子どもたちは楽しみながら参加していた。多彩なプログラムに感動している様子だった。最後に、演奏家に直接感想を伝える際は積極的に手が挙がり、子どもたちの言葉で感じたままの素直な感想を述べていた。



タイトル：音の楽しさを体験する

期 日：平成29年12月11日（月） 13：55～14：40

会 場：高浜市立翼小学校 音楽室2

参加者：翼小学校5年生 2組・3組、特別支援学級

午前のクラスよりも、やや落ち着かない様子の子どもたちだったが、演奏家の問いかけには元気に答え、参加型プログラムでは元気いっぱい楽しんでいた。演奏家の声の出し方や肺の動き、唇の震え、ピアノ演奏の際の手の動きなど、初めて見る・感じる様子に関心を高めていた。音楽の鑑賞の際もしっかりと集中していた。



コンサート

タイトル：夜空にキラめく みんなのオリオン座コンサート

期 日：平成29年12月12日（火） 18：30開演

会 場：かわら美術館 1階ホール（定員：150人）

入場者数：183人（特別ゲスト・高浜高校吹奏楽部含む）

バリトンとチューバの共演曲から始まった前半は、チューバの幅広い音を堪能できる曲、バリトンで楽しむ日本歌曲、愛知の歌として選んでいただいた曲（椰子の実）が演奏され、会場では本格的な音楽を楽しむ一体感が感じられた。後半は、広報に協力してくれた中学生の絵を投影したり、演奏家それぞれの出身地の曲を演奏したり、高校吹奏楽部と「ふるさと」を共演するなど、地域の持つ魅力を音楽で楽しむプログラムで、好評を得た。



① 応募の動機・事業のねらい

当館1階にあるホールは、講演会や市民が演奏する音楽発表会の他、貸館スペースとして活用している。しかし、本格的なクラシックコンサートを（有料で）開催するには、集客に課題があると考え、これまで実施できなかった。有料のコンサートの運営方法を教えて頂きたいと考え、応募した。また、音楽や芸術の発信拠点となる地域の美術館として、市民、特に学校関係者と一緒に素晴らしいコンサートをつくりたいと考え、事業を工夫した。

② 企画のポイント

研修で演奏家のレベルの高さ・素晴らしさは実感していたが、素晴らしい演奏家に来ていただくだけでは集客に課題があると考え、学校関係者を巻き込んだ内容（中学校美術部にポスターを描いてもらう・コンサートで高校吹奏楽部と共演する）を企画した。さらに、子育てや介護など、コンサートに足を運びにくい人に音楽を届けたいという思いから、アクティビティ先を選考した。また、地域創造からのアドバイスを受け、地域の特色をコンサートに反映するため、瓦のチケットを作成した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

1. かわら美術館らしいコンサートにするためには、演奏家は誰がいいか、またテーマはどのようにすべきかを迷った。
2. 中学生美術部員41人に、コンサートのポスターに使用する絵を描いてもらう際、なぜ中学生と協働し、どのような効果があると思うか、地域（美術館内や学校関係者）に協力を得るのが難しかった。
3. 高校生との共演という企画が、おんかつ事業の趣旨に沿うかどうか判断が難しかった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

1. かわら美術館は、ユニークでどこか安心感がある場所だと感じている。演奏家を選ぶ際、演奏だけではなく、話し方やご本人がもつ雰囲気などをトータルで考え、あまり他にないユニークな共演を目的として選ばせていただいた。
2. クラシックコンサートという既成概念に捉われないポスターを、中学生の自由な発想でかたちにしたいと考えた。まず、高浜市出身の広告デザイナーを講師として招き、中学生に「広報の力を知る」「曲から得た心象風景を自由に絵にする」ための講義をしていただき、ポスター制作を行った。当初は1、2種類のポスターを作成する予定だったが、生徒の個性を感じるポスター全種類を街中に掲示することで、地域一体となったコンサートになると考えた。コーディネーターからのアドバイスで、中学生の絵をコンサート中にスライドで投影することになり、美術館内や学校関係者からよりよい事業になったと言って頂いた。
3. 企画当初からコーディネーターやスタッフの方々に意見をいただき、共演をアンコールでの演奏にすること、プログラムや会場内の配席を工夫することで実現できた。

⑤ 事業を実施しての成果

有料でのコンサートは難しいと考えていたが、広報やチケットにおける工夫に加えて、素晴らしい演奏家とコーディネーター、スタッフの方々のおかげで、チケットの売れ行きがよく、コンサートの満足度も非常に高かった。

またアクティビティ先の候補が多く、広報協力をしてくれた中学生やコンサートに参加してくれた高

校生など、地域資源に恵まれていることを再認識した。さらに、ホールやピアノなどの施設が充実していることをコーディネーターや演奏家の意見で気付くことができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

- ・企画書を提出する際に、アクティビティ先をほぼ決定して提出していた。その後、アクティビティ先やスケジュールを変更する必要があり、企画書を提出する前にアクティビティ先を打診していたことが悔やまれた。
- ・小学校にアクティビティを打診する際、教育的指導はなく、音楽を楽しむ機会としてご協力いただくことになっていた。そのため、共演があったり、それによって授業時間を割く可能性があることを小学校側に伝えておらず、事前の調整に苦労した。
- ・アクティビティ先のピアノを動かすだけで3回、調律を含めて5回現地に行った。人的・時間的余裕がない組織なので、一つひとつの準備が大変であった。アクティビティの難しさを痛感した。
- ・コンサートでの舞台転換などをスタッフの方々にお任せしてしまい、組織の人員不足を実感した。また、企画当初からコンサート開催経験の少ない点で、コーディネーターやスタッフの方に迷惑を掛けてしまい、勉強不足を痛感した。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

音楽や芸術を楽しむ素地はある。だからこそ、リピーターを大切にしながら、より多くの人に音楽・芸術を届ける新しい取り組みが必要であると感じた。

ホールは音の響きが良く、素晴らしいピアノも備えているが、それに加えて今回のコンサート会場は美しかった。席の配置の仕方や舞台の作り方次第で、既存の施設・設備を十分に生かすことができ、当館でも本格的なコンサートが実施できると勉強になった。

名古屋から電車で1時間ほどに位置する愛知県高浜市。高浜市は古くより良質の粘土が取れることからやきもの生産が盛んな地域であり、特に名産の「三州瓦」は国内で作られる瓦の約半数以上を占めると言われている。最寄り駅から美術館までの10分程度の道すがら、装飾が施された立派な鬼瓦を構える家々が立ち並び、文化的で風情のある町並みも魅力的だった。今回の事業担当者の市原さんもこの街並みに惹かれて高浜市に移住された一人。街の好きなおとろや「かわら美術館」を熱心にご説明くださったことが印象に残っている。そう、今回のおんかつの拠点となったのは、瓦をテーマにした日本で唯一の美術館「かわら美術館」であり、コンサートの会場は美術館内のホール。普段は展示室としても使用し、ステージは昇降式、最大200席ほどをイベントに合わせて配置できる比較的自由度の高いホールだった。

かわら美術館では、平成28年から「みんなで美術館」というキャッチフレーズのもと、「かわら美術館を市民が集い楽しめる場所にしよう」と、美術だけでなく、パントマイム、音楽、美術館前の広場を利用したマルシェなど美術館の枠を超えたイベントを企画しており、ホールの活用の第一歩としておんかつに応募されたそう。ピアノ教室の発表会で使用したことはあるものの、プロの音楽家を招いての演奏会は初挑戦となる。「演奏ももちろんだけど、何よりも交流会でお話して、素朴で純粋なご様子が高浜市のお客様には合うと思った」と市原さん・殿貝さんが選んだアーティストは、バリトンのヴィタリさん、チューバ奏者の喜名さんの低音コンビ。そして、共演ピアニストとして山田剛史さんが加わった3人のアーティストによるアウトリーチとコンサートを企画することになった。

企画を考えた当初からコーディネーターとの打ち合わせを経て、いくつもの課題や問題点を共有することになる。アウトリーチやコンサートを円滑に行うために、スケジュールの組み換えやそれに伴うアウトリーチ先の変更や調整、コンサートでの吹奏楽部との共演の位置づけの変更など、思うように企画を進められない場面もあったが、ブラッシュアップしていく過程で、高浜らしさやこの事業の意図が更に明確になっていった。

そうしてできた企画は、アウトリーチとして、子育て支援をするNPOいちごプラザ（3歳以下の子どもを持つ親子）、市内の唯一の高校でコンサートでも共演する高浜高校吹奏楽部、翼小学校（5年生）が選ばれ、柱となるコンサートは「夜空にキラめく みんなのオリオン座コンサート」と題し、12月の年の瀬に夜空を見上げて1年の思い出や来年に想いを馳せる時間を提供したいと願いが込められた。広報では、市内の中学校美術部の皆様に描いていただいた絵を使いポスターとチラシを作成し、チケットは瓦職人の皆様にご協力いただき、瓦で星型のオーナメントを作りタグを付けた職員お手製の「瓦チケット」を用意した。

初共演のヴィタリさんと喜名さんのアウトリーチは、音楽もさることながら、2人のあたたかい人柄が表れる内容だった。小学校のアウトリーチを例に挙げると、ヴィタリさんは、白石光隆「プリヴェット スパシーバ」を使い、ロシア語のこんにちは（プリヴェット）、ありがとう（スパシーバ）を紹介しつつ、簡単なメロディに合わせて共に歌う。「いいですね〜」「すばらしい！」と声をかけながら子ども達の歌声に耳を傾けるヴィタリさんの優しい眼差しや表情で、子どもたちの緊張も次第にほぐれていった。続く喜名さんは、チューバと同じ長さのゴムホースにジョウゴをつけた簡易チューバを用意し、子どもたちには順番にホースに触れてもらいながら、音の出る仕組み・響く仕組みを披露した。遠慮して、ホースに手を伸ばせない子どもがいたり、すぐに「大丈夫？届く？」と声をかけて、仲間に入れるように促していた。2人のごくごく自然な表情や声かけが、子どもたちの心を開かせ、それぞれの本格的なオリジナル作品「チューバ協奏曲」やオペラ・アリアをも親しみやすく感じられた。

直前まで集客に悩んだコンサートは、公演数日前に新聞で「瓦チケット」とともに紹介されると瞬く

間に券売が伸び、当日券も完売に迫る超満員のコンサートとなった。コンサートの内容は、アーティストがホール企画内容と想いを受け止め、「夕星の歌」（歌劇「タンホイザー」より）や、リクエストがあった「星に願いを」といった星にちなんだ曲、愛知県出身の作曲家・大中寅二「椰子の実」など高浜市のためのプログラムで答えていた。全体の構成においても、前半に本格的なものを、後半はなじみがある曲目を配置したメリハリの利いたプログラムによって会場の集中力も高まったと思う。間近に聴くヴィタリさんの迫力あるドラマチックな歌声、喜名さんの包み込むような豊かな響きと自在な表現力を持つチューバの音色、そして曲の合間の朗らかなトークによって、アーティスト3人の魅力はお客様にも存分に伝わった。そして、小ホール規模の会場で超満員となったコンサートは、お客様同士の一体感やアーティストの息遣いを間近に感じられ、さながらアウトリーチのような特別な集中力・高揚感にも包まれた。終演後には、老若男女問わずあちこちでお客様の満足げな笑顔が見られことも合わせて、この美術館内でのホール・コンサートの良い成功例ができたと言えるだろう。

担当の市原さん・殿貝さんをはじめ、かわら美術館の皆様には、音楽事業特有の流動的な進行やアウトリーチ先とアーティストとの認識を調整することなど、大変な苦勞があったと思う。また、限られた人員でコンサートを運営することも、思った以上の労力がかかったのではないだろうか。高浜おんかつを振り返ると、担当者にとって、企画を考える楽しみも公演を作り上げて行く苦勞も、どちらも大いに味わい、奮闘した現場だったと思う。そのため、今回のおんかつ事業を通して感じた反省や改善点を冷静に見つめ、今の「かわら美術館」が肩肘張らずにゆとりを持って運営できる方法を模索していただきたい。そして、次年度以降のかわら美術館を彩る音楽企画の1つとなることを楽しみにしたい。

実施団体：公益財団法人舞鶴市文化事業団

実施時期：平成29年9月22日（金）～平成29年9月24日（日）

出演アーティスト：塚越 慎子（マリンバ） 志村 和音（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：わくわくマリンバコンサート

期 日：平成29年9月22日 9：45～10：30

会 場：さくら保育園 遊戯室

参加者：年長 さくら組 24人 年中 うめ組 18人 計42人

突然、木琴と鍵盤ハーモニカの演奏が聞こえ、木琴を演奏しながらの登場に子ども達は驚いた様子でしたが、ジブリの曲などの演奏が始まると曲名を言い合ったり、塚越さんの問いかけに合わせ歩いたり止まったりとアクティビティを楽しんでいました。曲を聴いて感じたように自由に動いてみようというリズム表現は慣れていないようで少しとまどっている様子がみられました。

タイトル：おでかけマリンバコンサート

期 日：平成29年9月22日 14：00～14：45

会 場：京都府立舞鶴支援学校行永分校 プレイルーム

参加者：小学部 6人 中学部 5人 高等部 2人 13人

木琴と鍵盤ハーモニカの演奏による登場で最初は音にびっくりした児童もいましたが、事前に皆さんの様子をDVDで見せて頂いていたので塚越さんがアクティビティ用にアイテムをいろいろと用意してくださり、皆が体験できたり演奏に参加できるよう工夫されていて、子ども達の楽しそうな表情がとても印象的でした。

タイトル：0才からのニコニコクラシック 魔法のマリンバ①

期 日：平成29年9月23日 10：30～11：00

会 場：舞鶴市中総合会館ホール

参加者：0歳～3歳の子どもと保護者 20組 40人

舞鶴市の子育て支援基幹センターにもご協力いただき子どもの年齢を分けて2回のアクティビティを開催。生の音楽に触れる機会の少ない未就学の子どもたちと保護者の方を対象に募集しましたが定員を越えての申込みがありました。

タイトル：0才からのニコニコクラシック 魔法のマリンバ②

期 日：平成29年9月23日 11：15～12：00

会 場：舞鶴市中総合会館ホール

参加者：3歳～未就学の子どもと保護者 20組 51人

未就学の子どもと母親を主な対象で考えていましたが、祝日だったので父親や祖父母も一緒にご家族で参加し生の音楽を聴いていただくこともできました。



コンサート

タイトル：安らぎの音色 魔法のマリンバコンサート

期 日：平成29年9月24日（日） 14：00開演

会 場：舞鶴市総合文化会館 小ホール（定員：300人）

入場者数：183人

ご家族で生演奏の音楽を楽しんでいただきたいと考えコンサートも、3歳以上入場可能で開催しました。休憩後最初の曲ボレロはお二人が装いも替えて、塚越さんは身近なキッチン用品を打楽器としてマリンバと共に演奏し、志村さんが観客の間を鍵盤ハーモニカを弾きながら巡るという演出と、お二人の迫力ある演奏は、子どもから大人まで観客全体を感動の渦に巻き込みました。



① 応募の動機・事業のねらい

2度目のおんかつ応募ですが、今後も事業を継続していくためにもう一度初心にかえり学びたいと考えました。

② 企画のポイント

音楽が大好きな子ども達に生の音楽に触れる機会を届けたい。また保護者である子育て世代にも音楽のすばらしさや、子どもが成長していく上でも音楽が一助になることも考え、子どもと一緒に生の音楽を聴きたいと思って貰える機会になればという思いから幼児と子育て世代へのアクティビティを考えました。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

最初はアウトリーチの1つに会館から遠く会館へ足を運んでもらいにくい地域で、学校の統合で廃校になった学校を会場にアクティビティを考えていましたが、コーディネーターの方々との研修の中で目的の曖昧さや、地域との繋がりがないため集客の不安等が浮き彫りになりました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

今回のアクティビティは、生の演奏に触れる機会の少ない子どもと子育て世代に音楽を届けることを目的として、中総合会館でのアクティビティを年齢別に分けて2回行えばどうかとコーディネーターの方より助言をいただきました。子育て世代対象の催しは祝日で家族がおられる日の集客が難しいのではないかと心配しましたが、父親や祖父母も一緒に家族で参加された方もおられ、2回とも定員を越えた応募があり、2回開催できたことが良い結果となりました。

⑤ 事業を実施しての成果

京都府立舞鶴支援学校行永分校でのアクティビティは子ども達が自由に動けない状態であることを考えて塚越さんが楽器を手作りして下さる等、皆が参加できるプログラムを考えていただき、子ども達が大変嬉しそうに参加して、充実した内容でとても良かったと先生から感想をいただきました。コンサートも子どもから大人まで楽しめるよう趣向を凝らしたプログラムで、大変よいコンサートだった、もう一度聴きたいと言う感想が多くありました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

事業決定から実施日まで期間が短かったこともあり、コーディネーターの方々やアーティストの方とコミュニケーション不足で、アクティビティやコンサートの内容をお任せするような形になってしまいました。コミュニケーションの重要性を改めて感じました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アクティビティ先での子ども達の楽しそうな笑顔を見ると、今後も子ども達に生の音楽に触れる機会を届けて行けるよう、地域や施設、団体とホールとのつながりを強め、また一人でも多くの人にホールへ足を運んでいただけるようこれからもいろいろ広報に工夫していきたいと考えます。

<はじめに>

舞鶴市総合文化会館では約10年前に第1回目のおんかつを実施。2回目となる今回は「子供」をコンセプトの中心に置いたアクティビティにしたいと考えた担当の吉岡さん。日本海を臨む市には海上自衛隊基地があり、若い家族連れが多い。会館周辺には子育て支援関連の施設が充実しており、数多くのイベントが開催されているが、会館では子供向け事業の客足は芳しくないという。今回のおんかつは「若い子育て世代がホールへ足を運ぶきっかけになれば」という狙い、そして後述するが担当吉岡さんの「初心に戻っておんかつに取り組みたい」という思いから始まった。

<アクティビティ①>

元気いっぱいの子供たちに迎えられてスタートしたさくら幼稚園でのアクティビティ。塚越さんはマーチング木琴、志村さんは鍵盤ハーモニカを手に道化師のギャロップを演奏しながらサプライズ入場。子供たちの座っているすぐ傍まで近づいて行くふたり、間近で見て聞く音楽に会場のあちこちから歓声があがる。ディズニーやジブリといった馴染みのある音楽のメドレーを耳にして「これ知ってる!」と口々に教えてくれる子供たちは、タイプライターでは興味津々に塚越さんの手元を見つめ、白鳥では低音の振動を感じ床を触ったり体を揺らしたり、星野源の恋が流れるとはにかみながらもダンスをする。ひとりひとりが音楽を聴いて自由に楽しんでいる印象で、子供らしいエネルギーに満ち溢れた45分間だった。

<アクティビティ②>

初日2コマ目は支援学校行永分校へのアウトリーチ。この学校には隣接する医療センター、療育センターに入院または入所している病弱、肢体不自由、知的障害等のある児童生徒がともに学んでいる。

個別研修の際、副校長先生の熱い思いを伺った。「ここで学ぶ子供たちが学校や病院の外に出る機会は本当に少ない。だからこそ本物にふれる、体験する機会を大事にしたい。それを生きる希望にしてほしい」。そんな先生の思いをかたちにすべく、プログラムはアクティビティを中心に構成し、表現することの喜びや楽しさを感じてもらえるような内容となった。学校の音楽準備室からバスドラムやシンバル等運び出し、音が出るときの振動、その振動を止めると音も止まる仕組みを楽器に直に触れて体験。塚越さんは子供たちの傍まで行って話しかけ、その手を取り楽器に触れて音を感じさせ、「どうだった?」「どんな感じ?」と声をかける。言葉でのやりとりや反応はなくとも、ひとりひとりと丁寧に向き合い、楽器を使って会話をしているような時間だった。もっと近くに、と急遽子供たちの目の前までマリimbaを移動させ、その深い響きを体感してもらったり、マレットを手持てる子供たちは実際に鍵盤を叩いたり…塚越さんと志村さんのつくり出す明るくあたたかい雰囲気と機転の利いた対応力から生まれるライブ感を、子供たちも先生も楽しんでいたように感じる。このアクティビティはひとりひとりに寄り添った体験であるよう工夫を凝らし、同時に会場全体の様子を見ながら臨機応変に進行されていた。塚越さんと子供たちの距離は物理的なものだけでない近さになっていた。

<アクティビティ③④>

舞鶴市全体から小さな子供を連れた親が訪れる、子育てをサポートする役割を持つ支援基幹センターでのアウトリーチは2コマ。1コマ目(30分間)は0~3歳児対象、お母さんへ向けた演奏を主にしながら子供と一緒に楽しめるプログラム。2コマ目(45分間)は3歳~未就学児を対象に、子供たちがからだを動かしながら楽しめるアクティビティと演奏という、緩急のある内容となった。両時間とも事前

予約制とし、会館、基幹センターの両広報で参加を募ったところ早々に枠が埋まった。会場にはクッション素材のマットを敷き、靴を脱ぎ座って聴いていただけるようセッティング。会場の隅に設けた託児スペースはいつしか動きたくなくなったり泣き出したりした子供たちの避難場所のような存在になり、演奏中も親御さんが安心できる大きなポイントであったといえる。

2コマとも音楽を通して、子供を通してのお母さん同士の交流の場にしたいという思いがあった。支援基幹センターではお母さんを孤立させないための支援を積極的にされていると事前に伺っていたので、その目的や思いに少しでも沿うようなアクティビティが何かできないかと塚越さんはかなり悩まれた。だが当日その時になってみると、自分の子供だけでなくまわりの子供にも笑いかけ、声をかけ拍手を送るお母さん方が多く見られ、会場全体があたたかく和やかな雰囲気に包まれていた。帰り際に子供を介して挨拶をされる方もいらっしやり、ここで一緒に音楽を聴き同じ時間を共有したからこそその繋がりが生まれたのであれば、この場所でアクティビティを実施できたことは大きな成果だろう。今後の継続を願ってやまない。

<コンサート>

今回のコンサートでは新たな客層へアプローチしたいという思いがあった。会館の広報はもちろん、学校への呼びかけを積極的に行い、当日は親子で来場される方も多く席を大幅に増やすほどの盛況となった。プログラムはよく知られているクラシック音楽がある一方で、ピアニスト志村さん作曲のマリンバオリジナル曲やジャズ、J-POPなど聴き易くもメリハリがあり、お客様の反応もとても良いものであった。また志村さん編曲のボレロはまな板や泡だて器などのキッチン用品、クーラーボックスなどを打楽器にしての演奏で大変好評をいただいた。帰り際お客さまからは口々に「ボレロがとてもすてきだった」「見ていても楽しかった、大好きになった」と感想をいただいた。

<最後に>

今回の舞鶴市のおんかつは“原点回帰のおんかつ”。会館独自のアウトリーチは多く実施されているが、吉岡さんが今年度応募されたのは「初心を忘れてはいけない」という思いがあったからだという。「いくつもアウトリーチを行っているとなら慣れてきてしまう。普段は内容についてもアーティストに頼りきりになっている部分が多いので、ホールとして積極的に関わるようにしたい。市内の学校ともより密にコミュニケーションを図り、新たな繋がりも築きたい」。そんな思いと共に臨んだという。

アクティビティで出会った子供たち、生徒さん、赤ちゃんを抱っこするお母さんたち。そしてその人たちを見守り、育て、サポートする先生や職員の方々。決して少なくない人数が関わるおんかつだからこそ、見えない心の部分を想像し、未来へ繋がる企画を楽しんで練ることが重要だと感じた。おんかつを一度きりのイベントとして終わらせないためにも、今後も情熱を持って地域に発信し、影響し合い、市民に必要とされるホールとして愛され続けてほしい。

実施団体：豊中市市民ホール指定管理者

実施時期：平成29年10月11日（水）～平成29年10月13日（金）

出演アーティスト：坂口 昌優（ヴァイオリン） 鶴見 彩（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：まちのおと #01

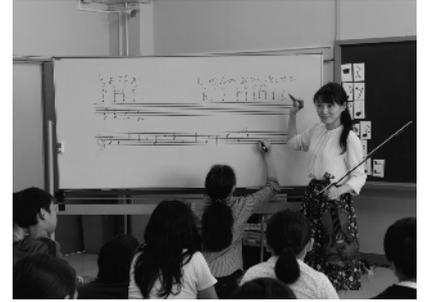
～坂口昌優さんといっしょ in 庄内南小学校～

期 日：平成29年10月11日（水） 10：30～11：30

会 場：豊中市立庄内南小学校 第1音楽室

参加者：4年生 38人

最初のアクティビティ先は、好奇心も高く、音楽と特別な事が大好きな庄内南小学校の4年生。初めて見る本物のヴァイオリンにも興味津々で、坂口さんの演奏に真剣なまなざしで聴き入る姿が非常に印象的なクラスでした。ドヴォルジャークのソナチネなど全5作品の演奏と併せて、短いフレーズを作るワークショップを実施。はじめは少し緊張していた印象でしたが、次第に自分たちのフレーズづくりに積極的に取り組んでいました。



タイトル：まちのおと #02

～坂口昌優さんといっしょ in 北丘小学校～

期 日：平成29年10月11日（水） 13：20～14：20

会 場：豊中市北丘小学校 音楽室

参加者：4年生 34人

北丘小学校はとても元気な子が多いクラスでしたが、ヴァイオリンの音色の特徴を堪能できるポルディーニの《踊る人形》などの演奏が始まると、楽器から溢れ出る多彩な音に聴き惚れていました。まちのおとづくりでは、色んな意見が飛び交い「関西っぼく」演奏して欲しいなど、クラスの特徴が溢れる作品ができあがりました。また、最後の質問コーナーでも楽器についての質問が多く、ヴァイオリンへの興味関心の高さがうかがえました。



タイトル：まちのおと #03

～坂口昌優さんといっしょ in 庄内西小学校～

期 日：平成29年10月12日（木） 10：40～11：40

会 場：豊中市立庄内西小学校 第2音楽室

参加者：3年生 41人

今回、実施校の中で唯一の3年生クラス。坂口さんの演奏には身を乗り出して聴く子供もいたり、ヴァイオリンを演奏する坂口さんに非常に興味をもった印象。和気あいあいとした雰囲気の中、全5曲の演奏がおこなわれました。各校で実施しているおとづくりワークショップでは「宇宙人っぼく」演奏して欲しいなど子供らしい様々な意見が飛び交いましたが、最終的には「えいごっぼく」をキーワードにフレーズは作られていくこととなりました。非常に盛り上がったアクティビティとなりました。



タイトル：まちのおと #04
～坂口昌優さんといっしょ in 高川小学校～
期 日：平成29年10月12日（木） 13：45～14：45
会 場：豊中市立高川小学校 第1音楽室
参加者：6年生 37人

最後のアクティビティは6年生。これまでとは違い、全体的に緊張した雰囲気の中でのアクティビティとなりました。プログラムは、サン＝サーンスのヴァイオリンソナタ第1番の第4楽章など全5作品。中でもドヴォルジャークの作品は、担任の先生が滞在されていたチェコがキーワードとなって、坂口さんと生徒の距離が一気に近づきました。おとづくりワークショップでは、坂口さんと一緒に作っていく様子が印象的で、まとまりの良いフレーズがつけられました。

コンサート

タイトル：坂口昌優ヴァイオリンリサイタル
～はじける、うまれる、まちのおと～
期 日：平成29年10月13日（金） 18：30開演
会 場：豊中市立文化芸術センター 小ホール（定員：202人）
入場者数：58人

アクティビティで来校した小学校の生徒たちも来やすい平日の時間として、18:30開演の90分プログラムで実施。「まちのおと」をテーマに、様々な国の音楽が堪能できる全7作品が演奏されました。また、各アクティビティ先で作成したフレーズに伴奏をつけ一つの作品として仕上げて発表。木々に囲まれ、客席と舞台とが非常に近い作りの小ホールならではの、アットホームなコンサートとなりました。



① 応募の動機・事業のねらい

平成29年1月、豊中市に新たに誕生した文化拠点として、当初よりアウトリーチ活動は必要な要素であるという認識がありました。施設近辺エリアだけではなく、市内に広く芸術を届け、これからの芸術文化を担う若い世代、ひいては子どもたちが音楽に触れる環境を整えていくことが、センターがこれから歩んでいくうえで重要であると考えています。その第一歩を踏み出すにあたり、経験とノウハウを会得し、これからのホール運営につなげていきたいという思いから応募いたしました。

② 企画のポイント

- ・本物の楽器による生の演奏を、間近で体感できる時間・空間をつくりだす。
- ・自分たち（一部でも）がコンサートに参加したという認識が持てる。
- ・文化芸術センターは「自分たちのホール」といったような親しみを持つきっかけをつくる。
- ・音楽を聴く・創るという両側面から、面白さを体感してもらおう。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

最初に提案したアクティビティの内容が、あまりにも“創る”という側面に重点が置かれすぎていたため、アーティスト自身もつ特性・やりたい事・できる事を度外視した状態であった。そのため、内容を固めるのに坂口さんを含め、アイデア出しなどかなりなご尽力と時間をいただく形となってしまった。また、公演日周辺にクラシックコンサートが林立し、さらに広報的にも後手に回ってしまったため、チケット販売に苦慮した。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティ内容に関しては、皆様からアイデア、アドバイスを受けた。

チケットの券売については、アクティビティ先の子どもたちがよりコンサートに来やすくなるような、団体割引の提案、SNSの広告を利用したメッセージ動画の普及等、これまで扱った事のない手法を広報手段として取り入れた。

⑤ 事業を実施しての成果

最も大きな成果は、アウトリーチ活動の必要性・可能性が多くの関係者に伝わった点。これからも継続して実施してく上で、この第一歩からさらに歩んでいける道を拓く事ができた。また、アウトリーチを通してのコンサートが、普段と違った層をホールに呼ぶことが出来るとわかった点も、これから事業をしていくうえで大きな収穫となった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

③と同じであるが、自分が実現したい事・やりたい事が先行しすぎてアーティストとの最初の対話が全くできていなかったことは、大いに反省すべき点である。坂口さんのご尽力もあり結果実現はできたものの、もっとアーティストと自身もつ魅力を引き出すことの出来る内容を考えていくことが必要であると痛感した。また、広報については、かねてからの課題ではあるが、もっと真正面から課題として取り組んでいかななくてはいけない。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

やはり、豊中市は南北に大きな街であり、エリアによってその特色が違う事を改めて感じた。その中で文化芸術センターがどれだけの人に認識されているのか…。今回は小学校へのアクティビティだけではあったものの、まだまだ「センターが新しくできた」という事への認知度は低く、広報とそれに付随する形での事業を多角的に実施していかないといけないと実感した。

そして、アーティストと市民をつなげていくことで、新たな感動が生まれ、さらに愛着のもてるホール運営につながっていく。そのためには本事業継続していく必要があると再確認。

平成29年1月にオープンしたばかりの豊中市立文化芸術センター。これからのまちの文化発信の拠点として、どういった事業を仕掛けていくか。そんなことを黙々と企んでいるスタッフ達の、勢いのある空気を感じた現場だった。担当の井上さんは、若手ながら広報プロデューサーとして会館情報誌の作成を担当するほか、映画、レクチャー等の主催事業も担当。作曲を学んでいた専門性もあって、「鑑賞」するだけではない音楽の魅力について、とても視点を広く持った方だった。淡々としていて一見熱のないように見えるのだが、今回、彼が発想したことイメージしていたことを、坂口さんと共にどう実現していくか、ぐるぐると悩みながらも、ついには成し遂げてしまったこと、私は敬意と賞賛を覚えずにはいられない。

豊中のまちを巡ってみると、地域によってだいぶ雰囲気が異なることがよくわかる。大阪にほど近い南のエリアは、小さな商店が多く残っていたり地域の伝統的なお祭りがあつたりと下町の雰囲気だ。一方北のエリアは、緑豊かな丘陵に開発されたニュータウンが広がる。どちらも空港や大阪へのアクセスが良く、住みやすい便利なまちがアピールされている。地理的にちょうど豊中の中央あたりに位置する文芸センターにとっては、地区によって文化が異なる、あるいは文化芸術への興味の差があるまちの人々に、どんな共有財産として親しみを持ってもらえるホールにしていくか。そこが目下取り組もうとしている課題だ。

今回そのために井上さんがイメージしたのは、まちの人たちがコンサートに間接的であれ“携わった”と思えるプログラムにすること。次年度以降も展開していく学校へのアウトリーチの足がかりとして、アクティビティ先は全て小学校とし、アクティビティのなかで子どもたちと共に「豊中のまちの音」をつくり、それをコンサートで披露するというアイデアだった。とは言え、豊中の何をどう音にしていくか。45分という限られた時間のなかで、子どもたちの想いをどこまで音で伝えられ、坂口さんの演奏とかみ合うまでもっていけるか…。五線譜から離れて、イメージを図形にしてもらおうか。子どもたちの豊中の好きなところを絵や文章に書いてもらって、そこからイメージした曲を坂口さんに選曲してもらおうか。それとも、演奏家が曲に表情をつける際にイメージを持って色付けしていくように、「豊中のこんなイメージ」をもとに曲に表情をつけていくことを一緒にやってもらおうか、などなどさまざまな方法を検討した。

坂口さんとも試行錯誤をし、リズムやメロディにその地域の言葉やイントネーション、雰囲気が出てくる面白さを感じてもらい、豊中の音づくりに繋げられたらと、チェコ民謡やお祭りのエッサホイサという雰囲気のあるドヴォルザークの楽曲を紹介し、言葉からリズムを、それに音程を、と一節の歌をつくるように子どもたちと創作をしてみることにした。事前に「豊中ってどんなまちなん？」というアンケートを子どもたちに実施し、書いてもらった言葉のなかからいくつかを選び、「かっつーばせー」を「タン・タッタ・ター」と変換するような要領で、「自然が多いとこやで～」といった言葉をリズムに、音を選んでメロディに…と、子どもたちとやり取りをしながら音づくりをしていった。実際に坂口さんがヴァイオリンで弾いてみると、「ああ～、いい感じ!」「ちょっと違うなあ～」などみな口々に感想を漏らしていて、みんなで創作する過程の面白みを、味わっているようだった。

さて、そんな小作品が4つの学校でできあがった訳だが、その4つを組み合わせて、コンサートで演奏する一作品に編曲してしまったのが、担当の井上さんだった。まちの人が“携わった”プログラムを文芸センターから発信する。そのアイデアを実際に具体化させてしまったことに、とにかく感服。説得力のある坂口さんの演奏とあいまって、これから豊中の「文化の創造」をどう文芸センターが担っていくとしているのか、その姿勢が強く感じられるコンサートだったように思う。平日夜のコンサートということで、集客面での反省点などもあったが、各担当がイイと思うものをとにかくやってみる、まず

はそれで行こうぜ、というスタッフの皆さんの雰囲気が頼もしく感じられた。今回のおんかつ、文芸センターにとってこれはあくまでも「手始め」の域なのだろうという予感がする。豊中独自の「音楽や芸術家との出会い方」が創造されていくことを楽しみにしたい。

(余談になるが、先日、私が企画・モデレーターを務めた横浜でのトークイベント「横浜市芸術文化教育プラットフォーム・トークシリーズ～アート×教育 共有しあう役割を考える～」に、わざわざ豊中より井上さんがお見えになってくださり、豊中でもこういうことを考えたいんですと言葉をくださった。試行錯誤やチャレンジの経験を、互いに共有して共に考えることができる仲間ができ、私自身とても嬉しかった。新しいホールで新しい仕組みを立ち上げていこうとする、勢いのある豊中市立文化芸術センターの皆さんの姿に触れ、わが身を振り返るばかりである。)

実施団体：公益財団法人箕面市メイプル文化財団

実施時期：平成30年1月8日（月祝）／1月19日（金）～平成30年1月21日（日）

出演アーティスト：福川 伸陽（ホルン） 星野 紗月（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：福川伸陽と青少年吹奏楽団

期 日：平成30年1月8日（月祝） 14：00～14：40

会 場：グリーンホールホワイエ

参加者：箕面市青少年吹奏楽団所属の高校生・大学生等 38人

高校生・大学生の団員を対象に、コンサートでも演奏するプーランク作曲「エレジー」のアナリーゼに基づき、音楽を表現することについて、ディスカッションを行いました。「生涯の友となるお気に入り入りの曲を見つけて演奏してほしい」というメッセージが参加者の心に届いたと思います。

タイトル：福川伸陽と青少年吹奏楽団の共演

期 日：平成30年1月8日（月祝） 15：00～17：00

会 場：グリーンホール

参加者：箕面市青少年吹奏楽団 49人

コンサートに向けたリハーサルを通して、舞台上でアーティストの息遣いを間近に感じながら、合奏する喜びを共有しました。「合奏はコミュニケーション」であるということを実践するよい機会となりました。

タイトル：福川伸陽とシニア劇団

期 日：平成30年1月19日（金） 17：00～18：00

会 場：グリーンホールホワイエ

参加者：シニア劇団「すずしろ」団員等 22人

シニア劇団の団員を対象に、演劇も音楽も同じ表現者という立場から、創作ワークショップに挑戦しました。「愛の小径」(原詩 ジャン・アヌイ 作曲 フランシス・プーランク)を題材に、詩と旋律の関係、その表現方法について意見交換を行い、その場で生まれた解釈に基づく、音楽づくりに取り組みました。

タイトル：彩り会 いきいき音楽会

期 日：平成30年1月20日（土） 13：30～14：30

会 場：グリーンホールホワイエ

参加者：地域のシニア層のサークル「彩り会」のメンバー等 86人

当財団が市から受託する「箕面シニア塾」のOBOGの集まりであり、地域の元気なシニア層「彩り会」の皆さんに、お話付きのコンサート（ふれあいコンサート）の形でホルンの魅力をお届けしました。「高校三年生」のメロディーに乗せて、彩り会の歌を会場全体で合唱しました。



コンサート

タイトル：NHK交響楽団首席ホルン奏者福川伸陽×箕面市青少年吹奏楽団

期 日：平成30年1月21日（日） 14：00開演

会 場：グリーンホール（定員：986人）

入場者数：491人

「喜怒哀楽（PASSION）」をテーマにしたプログラミングで、前半はホルン・リサイタル、後半は箕面市青少年吹奏楽団との共演という構成でのコンサートを開催しました。



① 応募の動機・事業のねらい

日本を代表するホルン奏者である福川伸陽氏と箕面市民から愛される箕面市青少年吹奏楽団の共演をとおして、地域を元気にしたいと考えています。あわせて、アクティビティをとおして、地域における文化的なつながりを形成・拡大していきたいと考えています。

② 企画のポイント

市民から愛される地域の青少年吹奏楽団とアーティストの共演（交流）。地域における音楽をとおした文化的なつながりの醸成（シニア劇団や生涯学習活動に取り組むシニアグループとのより一層の関係構築）。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

- ・アーティストと地元の青少年吹奏楽団との共演について
コンサートの構成、選曲、リハーサル時間の確保、舞台転換など

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・事業のねらいをアーティスト（コーディネーター、マネジメント）にしっかりとお伝えすることで、アーティストにポジティブな形で課題に向き合っていただくことができました。あわせて、箕面市青少年吹奏楽団についても本事業の意義をご理解いただき、柔軟かつ前向きに取り組んでいただきました。リサイタルと共演からなる構成、テーマをもった選曲、事前リハーサルの開催、舞台転換中のトークなど、課題をクリアすることができました。

⑤ 事業を実施しての成果

福川伸陽、星野紗月、両氏との共演を通して、箕面市青少年吹奏楽団のメンバーをはじめ、来場者（聴衆）の皆さまも含めて、地域が一体となるような、感動を共有することができました。特に青少年吹奏楽団の高校生・大学生のメンバーにとっては、生涯忘れ得ぬ体験となったと思います。今後の楽団の地域活動にとってもよい刺激となりました。あわせて、アクティビティをとおして、より一層、顔の見える関係を築き、地域における文化的なつながりを醸成することができました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

本事業に限らず、自主事業における集客が課題です。ホール情報紙やチラシ・ポスターでの広報活動に加えて、アクティビティの参加者の方にコンサートへお越しいただくよう働きかけるなど、個別のご案内を積極的に行いました。事業の魅力を地道にお伝えする個別営業の大切さを感じています。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

青少年吹奏楽団をはじめ、シニア劇団「すずしろ」や「彩り会」など、「町」における文化的つながりの存在を再確認することができました。こうしたつながりを、「ホール」を拠点として、財団のコーディネートにより、さらに広がりをもたらしよう働きかけていくことができれば、箕面ならではの文化の創造がより一層、活発なものとなると、手応えを掴むことができました。

〈企画概要〉

箕面市おんかつは、ご担当の和田さんの「箕面市青少年吹奏楽団と福川さんの共演コンサートを実現したい」という熱い想いからスタートした。選ばれたアーティストはもちろんホルンの福川伸陽さん。そして、コンサートは箕面市を代表する音楽団体・箕面市青少年吹奏楽団との共演を踏まえて企画を進めることとなった。コンサートは、前半がホルン・リサイタル（共演ピアニスト：星野紗月さん）、後半は箕面市青少年吹奏楽団との共演の2部で構成され、テーマは「喜怒哀楽」。後半のメインの曲目は福川さんのご提案で、4楽章から成る福島弘和「ホルン協奏曲」（約20分程度）に決まった。

今回のおんかつの拠点となったのは、箕面市青少年吹奏楽団の練習拠点でもある昭和41年開館のグリーンホール（986席）。聞くとところによると、グリーンホールは建替え移設が決定しており、移設後の運営は他の団体に決まっている。そのため、移設後のことも考慮し、財団が管理運営するもうひとつの文化施設・メイプルホールとも連携してアウトリーチの企画を進めた。メイプルホールは、生涯学習センターが併設されており、今後は年齢問わず市民が楽しめる生涯学習の強化や、市民団体の皆様と顔が見える付き合いをし、協力体制を強固にしたいと希望されていた。

そういった背景も踏まえて、アクティビティ先には、コンサートで共演する箕面市青少年吹奏楽団に2回（高校・大学生向け、コンサート出演者向け）、シニアサークル団体・彩り会、シニア劇団・すずしろが選ばれ、いずれも会場はグリーンホールのホワイエとなった。

〈アクティビティ〉

打ち合わせを経て、福川さんが考えたアクティビティは、音楽と向き合い考える力をつける、能動的で可能性を感じるものだった。

箕面市青少年吹奏楽団の高校・大学生向けには、交通事故で他界した友人の追悼のために作曲されたプーランク「エレジー」を題材に、楽曲分析を解説しつつ、参加者も自由に意見を出し合いながら、音楽に込められた作曲家の想いを探る内容だった。

劇団すずしろは、オフブロードウェイ公演も成し遂げた全国でも有名なシニア劇団。演劇で舞台を作り上げ、感情表現をされる方を対象に福川さんは、プーランクの「愛の小径」を取り上げ、1曲を通して音楽にどのような表情をつけるのがよいかを創造するワークショップのような内容を用意した。「愛の小径」の原曲はピアノと歌の曲であるため、当日は歌詞を配布して、数小節で区切り、メロディと歌詞を対応させながら進行した。

どちらのアクティビティでも、福川さんは「このフォルテはどんな意味があると思う？」「この部分の歌詞とメロディは、どんなイメージですか？」「このメロディから、どんな道と感じましたか？広い道？細い道？」と幾度も対象者に投げかけ対話を重ねた。意見が出にくい場面では、「僕はこう考えるんだけど」と話しながら、対象者の表情をよく見守り、出てきた意見には大きく頷くなど、優しくあたたかな対応が印象的だった。

緊張し遠慮がちな箕面市青少年吹奏楽団と劇団すずしろの皆様ではあったが、音楽を聴いていただくだけでなく、少しずつメロディを取り出し、感じたことや思い浮かんだ情景を言葉にして行く過程で、福川さんとの信頼感も深まり、子ども・大人関わらず音楽を聴きとる耳が育ち、想像・表現する力が培われていくアクティビティだったと思う。

〈コンサート〉

前述のとおりコンサートのテーマは「喜怒哀楽」。前半、喜はロッシェニ「前奏曲、主題と変奏」、怒

は池辺晋一郎「ホルンは怒り、しかし歌う」、哀はアクティビティでも取り上げたプーランク「エレジー」そして、後半、喜は箕面市青少年吹奏楽団との共演でバリー・ミルナー「ホルンとバンドのためのセレナーデ」、福川さん自身の委嘱作品である福島弘和「ホルン協奏曲」で表現された。各曲では、ホルンの魅力と多彩な表現力が披露され、特に「ホルン協奏曲」では、福川さんの超絶技巧のホルンの演奏と、リハーサルを重ねてきた箕面市青少年吹奏楽団の熱意ある演奏で、会場は大いに盛り上がった。ホルンを抱えた学生の姿、地域の方々、遠方より駆けつけた音楽ファンが集まり、終演後のサイン会では福川さんを囲み笑顔が溢れる時間となった。

〈さいごに〉

今回のおんかつを振り返ると、アクティビティ対象の皆様や、箕面市のお客様に支えられたおんかつであったと思う。活発に活動する劇団すずしろ、彩り会の皆様は、打ち合わせで伺ったときから、アクティビティを快く受け入れ、更にはどのような運営が望ましいかを共に検討してくださった。そして、特に共にコンサートを盛り上げてくれた箕面市青少年吹奏楽団の皆様は、限られた練習時間をこのコンサートに多く費やしてくださり、コンサートでも素晴らしい演奏を魅せてくれた。今回ご協力いただいた団体の皆様が、箕面市の音楽シーンや文化シーンを盛り上げてゆくことを心から楽しみにしたい。

箕面市青少年吹奏楽団の皆様のように、福川さんの素晴らしい音楽とあたたかい人柄を前に瞳を輝かせて聴き入っていたアクティビティ対象者・お客様の姿を見るにつけ、ひとつひとつのアクティビティとコンサートは素晴らしい交流の機会となったことは間違いない。しかしながら、共演コンサートを軸に企画を進めたゆえに、このおんかつを通してホールがミッションと向き合い、ホールが抱える課題を解決する機会になったのかが最後まで疑問に残っている。今回の事業が、箕面市にとって、メイプル文化財団の皆様にとって、地域の中でのホールの役割や、アーティストと市民が交流する意味、音楽（芸術）の持つ力の本質を、再考する機会となって欲しいと思う。是非、一度のイベントで終わらせることなく、この盛り上がり起爆剤として、アウトリーチ事業を地道に培っていくことを期待したい。

実施団体：広島県 坂町

実施時期：平成30年3月15日（木）～平成30年3月17日（土）

出演アーティスト：岩崎 洵奈（ピアノ） 喜名 雅（チューバ）

アクティビティ

タイトル：クラシックの世界へようこそin坂小学校
期 日：平成30年3月15日（木） 10：40～11：25
会 場：坂小学校 音楽室
参加者：5年生 54人

アーティストが登場してすぐ演奏が始まった。担当の先生の話では、あまり音楽に興味がない子が多いという風に聞いていたが、みんな静かに聴き入っていた。その後、ピアノ、チューバの順番で楽器紹介があり、ピアノの弦を引っ張る強さや響板の上で鳴らすオルゴールの響き、チューバの代わりにゴムホースを使った振動体験に子ども達はとても驚いた様子だった。岩崎さんとの連弾では、普段はおとなしい子が一番早く手を挙げてくれたということで、先生もすごく喜んでいた。

タイトル：クラシックの世界へようこそin横浜小学校
期 日：平成30年3月15日（木） 14：45～15：30
会 場：横浜小学校 音楽室
参加者：4年生 65人

この学校では、5年生になる時にマリーンズバンドという金管バンドに入ることができる。しかし、担当の先生によると、チューバは伴奏というイメージがあり、希望する子がほとんどいないということであった。アウトリーチの内容は同じものであったが、子どもから「チューバのイメージが変わった。」という声が出ていた。この学校は楽器に親しみがあるため、他の学校よりたくさんの質問が出たが、その中の一つに「どうしたらいい音がでますか？」というものが、「漠然と練習するのではなく、目指す音を明確にした方がいい。」と答え、喜名さんが、普段子どもが使っているチューバを使って実際に音を出し、子どもたちに目指す音を実演していた。

タイトル：クラシックの世界へようこそin小屋浦小学校
期 日：平成30年3月16日（金） 10：40～11：25
会 場：小屋浦小学校 音楽室
参加者：3～5年生 31人

この学校は人数が少ないため3学年で行った。アウトリーチの内容はほぼ同じであるが、人数が少なかったため、岩崎さんの演奏の時に、子ども達がピアノの周りに集まったり、下にもぐったりして演奏を聴くことができた。間近で聴くピアノの音の迫力や岩崎さんの指使いに、子ども達はとても驚いた様子であった。人数は31人と少数であったが、とても元気がよい学校で、アーティスト達の演奏、問いかけに対し、他校に負けないくらいの反応があった。



タイトル：岩崎洵奈・喜名雅ミニコンサート

期 日：平成30年3月16日（金） 16：30～17：15

会 場：坂中学校 音楽室

参加者：吹奏楽部 21人

内容は、小学校とほぼ同じだが、吹奏楽部ということで、急ぎょ全員と共演しようということになり、順番を変更して行った。最初は、中学生の子も緊張していたのか、表情が硬く、反応が薄かった。しかし、進行するにつれて、生徒達の笑顔も見られるようになった。共演の時には、全員で演奏をした。質問の時間には、恥ずかしがっていたのかなかなか手が挙がらなかったが、先生が指名をすると、みんな質問を用意をされていて、「ピアノでトリルを早く弾く方法」や「チューバで高い音を出す方法」などが挙がった。最後に、喜名さんが生徒のチューバで音を出し、生徒たちにエールを送っていた。



コンサート

タイトル：岩崎洵奈・喜名雅デュオコンサート

～クラシックの世界へようこそ～

期 日：平成30年3月17日（土） 14：00開演

会 場：Sunstar Hall アリーナ（定員：1010人）

入場者数：150人

クラシック音楽初心者でも楽しめることをポイントとして、急ぎょお願いをして、アクティビティと同じように楽器紹介の時間を設けていただいた。さらに、前半の部では、アウトリーチと同じ構成で、チューバの振動体験、ピアノの連弾なども組み込んでいただいた。全体的な内容としては、曲紹介を交えながら本格的なコンサートをしていただいた。岩崎さん、喜名さんの素晴らしい演奏に、観客全員聴き入っていた。



① 応募の動機・事業のねらい

坂町では町民が心豊かな生活を送るための施策として、文化芸術活動の推進や優れた文化芸術の鑑賞機会の充実を掲げている。そこで、地域住民や地元の小中学校児童生徒にも、生で本物のクラシック音楽を鑑賞していただければ、将来にわたり、記憶に残る思い出を作ることができるため。また、本事業に応募することで、ホール職員が、今後もアウトリーチ・コンサートを継続していくためのノウハウを身につけるきっかけになるため。

② 企画のポイント

音楽に興味を持ってもらうことと、クラシック音楽が身近なものだと感じてもらうために、子どもたちが一番見慣れていて、身近にある楽器のピアノと、横浜小学校にあるマリーンズバンドで敬遠されがちなチューバのイメージを変えたいと思い、岩崎さん、喜名さんに来ていただいた。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

今までクラシックコンサートの実績がなく、企画・集客・運営のすべてが手探り状態であり苦労した。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

分からないことは、些細なことだと思っても軽く考えず、コーディネーターの方たちに意見を伺うようにした。

⑤ 事業を実施しての成果

1番大きな成果は、普段おとなしい子が連弾をする時に積極的に手を挙げてくれたり、「チューバのイメージが変わった。」という意見があったりと、アクティビティをする前と後で子どもたちの心境に変化があったことだと思う。また、音楽に興味がない子も、演奏中は真剣に聴いていて、岩崎さんや喜名さんのトークの時には、元気よく反応していて、とても楽しんでくれていると感ずることができた。

ホールの職員としては、企画から運営までたくさんのごことを勉強させてもらうことができたことや、近隣のホール職員等と新しく繋がりができたことも成果であった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今回の反省点の1つ目は、コンサートの集客である。今回は、サブタイトルにもあるように、クラシック音楽初心者でも来てみたいと思うようなコンサートを企画していたために、チラシにプログラムを載せたり、クラシックの魅力をアピールするための工夫が必要であった。とても素晴らしい演奏だったため、力不足で集客が上手くできなかったことは最も大きな反省点である。

2つ目は、アクティビティとの繋がりを上手く持たせられなかったことである。中学生以下を無料にしていたにも関わらず、中学生しかコンサートに誘致できなかった。アクティビティ先に対する広報の仕方を検討して、小学生にも興味を持ってもらうよう、工夫していく必要がある。

3つ目は、実施時期である。年度末は学校行事や新生活の準備などで忙しく、アクティビティの調整・集客ともに苦労した。広報をした人の中にも「忙しくて行けない」という声があったため、今後は実施時期を検討していきたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今まで、クラシック音楽の事業実績がほとんどなく、コンサート・アクティビティについて不安要素が多かった。しかし、いざアクティビティを行ってみると、子ども達がとても楽しそうにしていたのが分かった。また、コンサートについても、アンケートに「わくわくしてクラシックに興味を湧いた。」「次回もぜひ来たい。」等の言葉が多数あり、クラシック音楽に興味を持っている人が多くいることが分かった。今回の事業がなければ、クラシック音楽に対するニーズに気付けなかったのではないと思う。しかし、このようなニーズを汲み取っていくことがホールの大切な役割であるのではないかと感じた。

アシスタントレポート

井尾 祥子

広島県安芸郡坂町は人口約13,000人で、海と山に囲まれたとても自然豊かな町です。おんかつの拠点となったのは、防災とスポーツ・文化活動の新しい拠点として平成29年に開館した坂町立町民交流センター「Sunster Hall」。これまで自主事業の開催実績はほとんどなく、実行委員会形式で数公演を実施しておられました。この事業を通してホールを広く周知するとともに、難しいと思われがちなクラシック音楽に興味を持っていただける契機にすること、また、スタインウェイピアノを活用した企画ができるよう繋げていきたいということでおんかつ事業に応募されました。アーティストはピアノの岩崎洵奈さんと、チューバの喜名雅さん。

アウトリーチは、1回目：坂小学校5年生60名、2回目：横浜小学校4年生66名、3回目：小屋浦小学校3～5年生28名、4回目：坂中学校吹奏楽部23名で会場はいずれも音楽室でした。

小学校での流れは、まず、クライスラーの「愛の喜び」に続き岩崎さんからピアノの説明があり、弦の引っ張り合う力を3択クイズにして子ども達に参加してもらい正解を発表し、ゾウが両方から引っ張り合っているほどの力だと話すと、「ええーっ！」と歓声があがりました。その後、ピアノの魅力を知って欲しいということで、「Happy Birthday」のオルゴールが登場し、響板に乗せて響きを感じてもらい、今年お誕生日があるみんなへプレゼントということで岩崎さんアレンジのメドレーを演奏しました。最後に「Happy Birthday」が始まると子ども達の表情が少し変わり、曲が終わると華やかな演奏、身近にある曲が岩崎さんの演奏によってとても豪華なメドレーになったことに子ども達はとても感激した様子で表情がきらきらしていました。岩崎さんの、明るさの中にも落ち着きのある話し方が子ども達を引きつけていました。続いて喜名さんが登場しチューバの説明。いつできた楽器なのか、重さ、管の長さなどをクイズ形式にしたり、坂本龍馬と同年と話すと、年代だけ聞くとピンと来なくても、「ああ！それならわかる」といった感じで興味を引き出せていました。その後、ピアノとチューバの音域について触れ、どちらが低い音が出せるのかを実験したり、ゴムホースと漏斗を使って音が鳴る仕組みを再現し全員に振動を感じてもらいました。チューバのイメージと言えば、「重い」、「大きい」、「顔が見えない」、「伴奏ばかり」。その後演奏されたポーターの「リーダー オブ ザ ビッグタイム バンド」では、チューバのイメージを180度変えるような高い音から低い音、フラッターなどの奏法、チューバのパワーや魅力が最大限に感じてもらえる演奏で、喜名さんの出す *f*（フォルテ）の音量にもとても驚いていました。続いては岩崎さんとの連弾共演。どの学校でも積極的にたくさん手が挙がりました。体験した児童に感想を尋ねると、どの子も大げさな感情表現ではありませんが至近距離で岩崎さんの演奏を体中に感じ、聴くだけでなく演奏することの楽しさも感じてくれたのではないかと思います。その後、岩崎さんが3才からピアノを始めたこと、飛行機も大好きで、将来ピアニストになるかキャビンアテンダントになるか迷っていたけど、忙しい時、悲しい時に音楽に助けもらった、だから音楽の仕事が続けたいと思ったことなどを話し、続いてショパンコンクールにチャレンジした時に弾いた「黒鍵のエチュード」が演奏されました。再び喜名さんが登場し、翌月コンクールに挑戦しようと思っているから、みんなに応援して欲しい、みんなもいろんなことにあきらめないうでチャレンジして欲しいと話し、シューマンの「アダージョとアレグロ」が演奏されプログラムは終了しました。

横浜小学校では、マリーンズバンドという金管バンドがあることから今回の対象は翌年からバンドを始める4年生でしたが、現在の5年生のチューバ・ユーホパートの子ども達にも少しでもいいから音を聴かせてもらえないかという要望があり、喜名さんも岩崎さんも快く引き受け、リハーサル時間を使って少しではありますが音を聴かせてあげることができました。その後始まった4年生のアウトリーチでは、最後の曲をチューバの最も有名な曲、ウィリアムズ「チューバ協奏曲」の「第1楽章」に変更され

ました。とても元気な子ども達ですごく積極的で、最後に設けられた時間で出た感想や質問は約20にもおよびました。担当の先生からの要望として、チューバは主役のイメージを持たない子が多く希望する子が少ないので、魅力や重要性を伝えてもらい、チューバを選んでよかったと思ってもらいたいとのことでしたのでその思いが十分満たされるアウトリーチだったと思います。

今回唯一の中学校だった坂中学校吹奏楽部。小学校では岩崎さんと子どもさんの連弾共演をやってきましたが、このアウトリーチに向かう前の昼休みの時に、岩崎さんから「次は吹奏楽部のみんなだから喜名さんも含めて全員で共演できないかな。」という提案があり、急遽岩崎さんが喜名さん用の楽譜を書いてすぐに合わせをされました。吹奏楽部の管楽器の皆さんはユニゾンで、2人のパーカッションの子たちは1人がグロッケン、1人は岩崎さんとピアノを弾くという形で挑戦し素敵なお共演になりました。元々おとなしい皆さんということもありましたが、やはり中学生は思った以上になかなか反応が表に出づらいつつも、コミュニケーションをとるのにお二人とも少し苦労されたようでしたが、終了後の感想や質問を聞くと、心でしっかりお二人の音楽を受け止めていたことがわかりました。どの学校の子ども達もとても集中していて時間が進むと同時に表情が和らいで楽しんでくれている様子でした。担当の先生方の表情もとても明るくなったのが印象的でした。

ホールでは、会場が元々アリーナという事で反響板がないため少々不安でしたが、小澤コーディネーターの提案でピアノの後ろに演台を設置し、数や距離などを微調整しながら響きを確認していきコンサートのためのベストな状態を作ることができました。コンサートは「岩崎洵奈・喜名雅デュオコンサート〜クラシックの世界へようこそ〜と題され、ピアノとチューバの魅力を余すところなく感じていただけるプログラムでした。本格的なクラシックコンサートは初めての方も多くいらっしゃり、アウトリーチ先の子もたくさんお越しいただきました。

今回はダブルアーティストということでアウトリーチもコンサートも盛沢山でした。横浜小学校では人数が気持ち多いかと感じましたが全体的にコミュニケーションをしっかりと取り、飽きさせない運び方で45分間があつという間に過ぎてしまうといった感じでした。また、岩崎さんと喜名さんのチームワークと言いますか空気感がとてもよく、お二人ともサービス精神が旺盛で、子ども達をはじめ先生方やホールの皆さんにいかに楽しい時間を過ごしてもらおうかということを常に考えられていました。

担当者の松田さんは、まだ経験が浅く事業の企画運営にほとんど立ち会ったことがないとのことでしたが、そんな風には思えないきめ細かな配慮とサポートがなされたこと、アーティストお二人のお人柄に支えられたことで全体的にとっても円滑に事業が進みました。

今後も今回のホールの皆さんの想い、努力や情熱が引き継がれ、スポーツ・防災に加え文化活動の拠点としての役割、地域のホールとして根付いていける運営を目指していただければ幸いです。

実施団体：公益財団法人 太宰府市文化スポーツ振興財団

実施時期：平成30年1月25日（木）～平成30年1月27日（土）

出演アーティスト：坂口 昌優（ヴァイオリン） 喜名 雅（チューバ） 鶴見 彩（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：「見て・聴いて・想像しよう～将来の自分～」

期 日：平成30年1月25日（木） 10：45～11：30

会 場：水城小学校 ランチルーム

参加者：4年生 27人

1回目のアクティビティ。少し緊張感が漂う始まりだったが、子どもたちは事前にDVDレターを見ていたこともあり、アーティストからの問い掛け等に自然に反応していた。ゴムホースを使った振動体験は盛り上がっていた。リコーダーと「エーデルワイス」を合奏したが、どこかぎこちなさが残った。開始と終わりのタイミングが合わず、拍手でアーティストが先に退場する予定が、子どもたちを送り出す形になった。



タイトル：「見て・聴いて・想像しよう～将来の自分～」

期 日：平成30年1月25日（木） 14：05～14：50

会 場：水城小学校 ランチルーム

参加者：4年生 29人

給食交流後で、児童が笑顔で会場に入ってきた。休憩時間に改善点等を話しあい、(入場時の動き、トークの内容・投げかけのタイミング、合奏への導入方法等)全体的な流れが良くなった。音域比べはジェスチャーを大きくすると、反応も大きかった。はじめに児童の演奏を聴き、アーティストが「教科書に載っているお花を想像しながら吹いてみて」等のアドバイスで合奏をはじめると、全体的にまとまりができた内容になった。



タイトル：「見て・聴いて・想像しよう～将来の自分～」

期 日：平成30年1月26日（金） 10：45～11：30

会 場：水城小学校 ランチルーム

参加者：4年生 28人

先生の注意から始まるハプニングがあり、会場にくもり気味の空気が漂うスタート。「ロミオとジュリエット」を演奏しながらアーティストが入場すると空気は一変。「チャールダーシュ」のときには、自然に身体を動かしながら聴いていたり、「ホルン三重奏曲より第二楽章」では、集中して音に聴き入っていた様子。ヴァイオリンの紹介時に弓を2本使って説明することを取りいれ、児童の目を引き付けていた。児童から感想や質問も多くでていた。



タイトル：「見て・聴いて・想像しよう～将来の自分～」

期 日：平成30年1月26日（金） 14：15～15：00

会 場：水城小学校 ランチルーム

参加者：4年生 29人

内容を一部変更（チャールダーシュからピアノ三重奏曲25番「ジプシートリオ」）し、アーティストが演奏中に、チューバに触れたり、ピアノの下で音を聴いたり、ヴァイオリンの動きを間近で見たりと児童が自由に動き、興味津々で楽器に近寄っていた。アーティストと児童の距離間が前回より近く感じられ、合奏もトライアングルが入ったりと短時間で一体感が出ていた感覚があった。座ったままで参加するより、遠慮しながらも近寄っていく子ども達の姿が新鮮に見えた。

コンサート

タイトル：聴きに来んね！～本格だけど、気軽なクラシック～

期 日：平成30年1月27日（土） 13：30開演

会 場：プラム・カルコア太宰府 市民ホール（定員：600人）

入場者数：196人

第1部は、アクティビティのような気軽な雰囲気をお願いし、ハイドン「ジプシー風」で始まりモンティ「チャールダーシュ」で終わる全5曲。出演者が退場時に天満宮参拝のイメージで、拍手（かしわで）を打つと太宰府という土地柄なのか、来場者も一緒になって拍手を打つ笑顔溢れる会場になった。

第2部は、誰もが聴いたことがある、メリハリ（喜怒哀楽）、それぞれの楽器の特徴を活かした演奏曲、シューマン「アダージョとアレグロ」で始まり、ブラームス「ホルン三重奏曲より第1,2,4楽章」で終わる全3曲。来場者と一体になれるような舞台をアンコールでJ.シュトラウス「ラデツキー行進曲」で会場を盛り上げて終了した。来場者は少なかったが、「クラシック＝堅苦しい・敷居が高いイメージを、史跡のまちの音楽隊＝音楽は本物、クラシックコンサートは気軽に行ける・楽しい」ことを印象づけられたのではないかと思う。



① 応募の動機・事業のねらい

文化芸術に馴染みの薄い太宰府で文化芸術を推進していく市の方針を鑑み、本物の芸術を鑑賞・体感できる場を市民に提供していくため、そのノウハウを学ぶことができる本事業に応募するに至った。市民に積極的な文化的アプローチを行い、当財団独自の事業として継続展開でき、来場者は勿論、アーティストさんにも「また来たい、ここでやりたい（聴きたい）！」と感じてもらえる事業を目指す。

② 企画のポイント

ただ演奏を届けに行くのではなく、アーティストを中心にアクティビティ対象者もスタッフも一緒に楽しみ、お互いが高めあっていけるよう、会場の状況に合わせて臨機応変に対応できるをアーティストさんを希望。文化芸術に馴染みの薄い太宰府に、本物のクラシックを届けてもらえるアーティストさんに来ていただく。普段接することのない、本物のクラシックアーティストさんが伝える、音と言葉を生で感じてもらう。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・アクティビティの対象は決まっていたが、受け入れ側の小学校の先生方との打ち合せ時間が限られているため、手短に分かりやすく説明することが問題となった。
- ・学校側とのやりとりで音楽室に設置しているピアノが電子ピアノであることが判明し、会場・訪問施設変更等の問題が浮上した。また、開催時期が真冬のため控室から教室までのルート等で温度差による楽器の音色の心配もでてきた。
- ・市民に馴染みの薄いクラシックコンサートであり、ヴァイオリン・チューバ・ピアノという稀な組合せだったため、PRをどのようにしていくか、アクティビティ先が小学校のみのため、集客がどうなるのか予想がつかなかった。
- ・当日配布のプログラムをどのようにするか。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・短時間で分かりやすい資料を作成し、資料をみながら説明をした結果、受け入れられやすくなった。
- ・学校側がランチルーム（空き教室）を開放してくれることとなり、レンタルのグランドピアノを搬入した。また、学校側のご配慮で1階の教室を使用させてもらい、隣のPTA会議室を控室にさせていただき、移動時間を短くできた。
- ・コーディネーターを中心に担当者の方々、おんかつ実施ホール担当者からたくさんの助言をいただきながら進めていけたので、心強かった。
- ・坂口さん、喜名さん、鶴見さんにご協力いただき、曲の説明（解説）とメッセージ（聴き所など）を書いていただいたもので作成し配布した。来場者から「わかりやすい」と大変好評だった。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティ先では、先生方やPTA役員の方（数人）も参加し「おんかつ」の活動PRはできたと思う。

坂口さん、喜名さん、鶴見さんの人柄と演奏の素晴らしさやコミュニケーション力で、コンサートにはアクティビティで訪問した小学校の児童が自主的に来てくれた（ホールが校区内だったので）。学校とは違うホールでのクラシックコンサート鑑賞は貴重な経験になったのではないと思う。学校側から

も「コンサートが楽しかったことを日記に書いている」「楽器に興味をもつようになり、合奏を楽しんでいる」「給食の放送音楽が、演奏会で聞いた曲だ！と反応してた」等の感想をいただいた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

- ・当財団が毎月発行している機関紙や、新聞への掲載、地元ケーブルTV出演（映像）等で告知はできたと思うが、もっとアピールが必要だった。（市長選期間中であつたことも影響した）
- ・学校の場合、開始の合図を担当者で行った方が児童がもっと力を抜いて参加できたかもしれない。
- ・ホール定員とチケット販売状況や来場予想者数を考慮する必要があつたかもしれない。全席自由、来場者数がホールの3分の1程度だったため、両端の席を封鎖する等をしてよかったと思う。また、アクティビティ会場とホールが校区内ということもあり、児童（招待券配布）が単独で来ていたため、落ち着いて聴くことができないと感じた一般客もいたようだ。
- ・終了後のサイン会会場配置や導線をもっとスムーズにできればと思う。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今年度から本格的な事業をスタートするようになったが、集客ではどの事業も苦戦を強いられる。（市・市教育委員会が共催ということもあり、市政に混乱があるとダイレクトに影響されることも実感した。）また、市直営のホールのため、ホールの日程調整に苦慮した。ポスター・チラシの配架に合わせチケット販売日を早めに設定したが、「予定がわからないので、近くになって購入する」、「当日予定がなければ来る」という購入者が多かった。コンサートは初めて来ていただいた方からも「こんなに素晴らしいコンサートなのに、もったいない。」とのご意見・ご感想が多いことから、アクティビティのバリエーションを増やし、もっと地域に広めていくようにしていこうと思う。

福岡県太宰府市は、福岡県中西部の筑紫地域に位置し、現在でもその歴史をしのばせる史跡が数多く存在しており、毎年700万余りもの観光客が訪れる観光都市でもある。

土地柄、歴史に関しての関心が非常に高いが、音楽に対しても振興を深め、市の文化芸術基盤をつくることを目的として3年間、太宰府市が音楽のアウトリーチに取り組んでいたが、昨年、太宰府市文化スポーツ財団にアウトリーチ事業が委託された。委託された初年度は、「ホールに来られない層にアプローチする」という目標のもと、福祉施設にアウトリーチを実施。今年度、「生の音楽」を届けることを通し、地域住民と密に接する機会を増やすことで、継続的なファンを増やし、文化を根付かせることを目的とし、ノウハウ獲得の為に、今回のおんかつに応募された。

アーティストは、ヴァイオリン坂口昌優さんとチューバの喜名雅さん。初めての組み合わせの楽器だったが、高音を得意とするヴァイオリン・低音を響かせるチューバ・それを支えるピアノと、アーティストの高い技術力と相性の良さもあわさり、とても素晴らしいハーモニーとなった。

今回のアクティビティは、太宰府市の全ての小学校にアウトリーチを届ける為の第一歩として水城小学校4年生1組～4組にアウトリーチを行った。ランチルームにグランドピアノを搬入し、より本格的な演奏を届ける環境で行ったこのアウトリーチのテーマは「将来の夢」。プロのアーティストが間近で行う演奏を聞いたり、楽器をはじめたきっかけや思いなどを話してもらったりすることで、子ども達が、今の自分と重ね合せ、将来の自分を考えるきっかけとなるよう、何度も改善を重ね、充実したプログラムとなった。

まず初めに、先生からのご紹介の後、演奏をしながら登場したアーティストに、迫力ある音にびっくりし、なにがはじまるのか胸を躍らせる子ども達が印象的だった。ヴァイオリン・チューバ・ピアノの「どこまで音を出せるか？」比べや、個々の楽器の音を出すしくみなど、楽器の特徴をわかりやすく解説し、チューバコーナーではゴムホースを使った音を出す実演では、生徒全員で喜名さんが吹くホースを手にとり、音の振動に思わず声をあげる場面も。お互いのソロ曲はもちろんのこと、テクニックの間われるチャールダーシュや、(このヴァイオリン・チューバ・ピアノのトリオでの作品がないために)ホルンパートをチューバパートにかえた重厚な響きのホルン三重奏曲など、ここでしか聴けない組み合わせの演奏を真剣に聞き入っていた。アンコールでは、子どもたちのリコーダーとの「エーデルワイス」の共演を行い、普段体験できない演奏を楽しんだ。

学校にとっても、アーティストがアウトリーチに赴く機会は初めてだったそうだが、控室の提供や心配りなど、細やかな部分も非常に協力的だった。アウトリーチを見学した教頭先生から、「こんなに迫力ある体験を子ども達に届けられるとは。説明は受けていたが、普段の教室で少人数での体験の重要性がわかった」とのお言葉を頂き、今後の太宰府市の活動を後押しする重要な一歩となったように思う。子どもたちが間近に聞く演奏に感動し、音楽に対する興味を刺激したこと、そして、時間をかけて、言葉につまりながら、アーティストにその感動を伝えているのを拝見し、言葉にできない思いを言葉にすること、そのどれもがかけがえのない体験であったように感じた。

コンサートの日。開場と同時に、最前列にはアウトリーチを受けた水城小学校の子ども達が座っていた。事務局長を筆頭に、当日ギリギリまで、広報をしていただいたおかげもあり、当日の集客は子ども達だけでなく、幅広い世代の方々が集まり、前日までの集客想定人数を大幅に上回った。アウトリーチとはまた違った、本格的なクラシックを皆様にお届けした後、太宰府天満宮での参拝で行う「二拝二拍手一拝」をお客様と行う、地域ならではの心温まる場面もあり、コンサートのタイトル通り、「本格だけど、気軽なクラシック」コンサートとなった。

現地に入り、小柳さんは、「担当として、みんなに楽しんでもらえるためにベストを尽くす」と言わ

れた。その言葉通り、「アウトリーチでの注意点」「位置決めをするポイント」「音の聞き分けかた」等、次回からの事業に生かせるコーディネーターからのアドバイス・考え方を、自分のノウハウとしての的確に吸収されていた。事業サブの江島さんをはじめとする太宰府おんかつを支える太宰府市文化振興財団の方々には、細やかなご配慮を頂いた。今回のおんかつを経験したひとりひとりが地域のコーディネーターとして、これからの太宰府を担う人材となっていられるだろうと信じている。

実施団体：嬉野市文化振興事業実行委員会

実施時期：平成29年10月12日（木）～平成29年10月14日（土）

出演アーティスト：ヴィタリ・ユシュマノフ（バリトン） 加藤 文枝（チェロ） 山田 剛史（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：うたとチェロによる音楽アウトリーチ
～めぐるめくる音の世界～

期 日：平成29年10月12日（木）10：40～11：25

会 場：吉田小学校 音楽室

参加者：3・4年生 43人

ヴィタリさんが海外出身のオペラ歌手というところで声の大きさに子どもたちは圧倒されていました。また、加藤さんのチェロの技巧や音色にも子どもたちは釘付けになっており、ピアノ伴奏の山田さんのソロももれなく聴くことができるという大変贅沢なアウトリーチでした。それぞれの楽器の音（声・チェロ）やプロの演奏を間近で感じながら、曲の説明を聞いて表現すること（参加すること）、色彩、絵画で感じたことや思ったことを人前で恥ずかしながらも子どもたちが言葉に置き換えて発表することができたことは、想像性（創造性）の育成にも繋がる大変良い機会でした。また、クイズ形式で楽しみながら互いに共感し、子どもたちの答えが全て正解であり、感じ方も人それぞれであることを互いに知り、音楽の素晴らしさや魅力を色々な角度・視点から考え、伝えることができたと思います。校長先生の要望だった校歌も最後に一緒に演奏できました。



タイトル：うたとチェロによる音楽アウトリーチ
～めぐるめくる音の世界～

期 日：平成29年10月12日（木）14：10～14：55

会 場：吉田小学校 音楽室

参加者：5・6年生 38人

1コマ目と演奏の順番を少し変えて上記同様に進めていきましたが、高学年ということもあり、3年生のように積極的に発言をすることには控えめでした。思っていること感じたことを言葉で伝えるということ、人前で発表することは思春期の子どもたちには少々恥ずかしかったようです。最後の校歌は一緒に元気に演奏する（歌う）ことができたことは6年生最後の素敵な思い出にもなりました。



タイトル：うたとチェロによる音楽アウトリーチ
～めぐるめくる音の世界～

期 日：平成29年10月13日（金）10：35～11：20

会 場：大草野小学校 音楽室

参加者：6年生 27人

より良く子どもたちが演奏に集中し楽しみやすいように、演奏順番の再検討とわかりやすい解説、絵画の並びにも気を付けて進めていきました。会場（学校）も変わり高学年のクラスでしたが、担任の先生のフォローもありどうにか子どもたちの感想やイメージを聞くことができました。各アーティストの演奏、特にチェロとピアノの演奏は食い入るように見ていたのが印象的でした。



タイトル：うたとチェロによる音楽アウトリーチ
～めぐるめくる音の世界～

期 日：平成29年10月13日（金）14：05～14：50

会 場：塩田小学校 音楽室

参加者：6年生 22人

アクティヴィティ4コマ目ということもあり、子どもたちへのアプローチも良く、想像力を最大限に引き出すことができたような気がします。当会場の生徒たちは、生徒も先生も共に話しやすい校風で、間近でプロのアーティストの演奏などに触れたことが刺激になり、イメージや意見・感想、思ったことを発表しお互いの意見を聞きあうことができました。最後には各アーティストにサインをもらうなどのサイン会の列ができていました。

コンサート

タイトル：音楽をもっと身近に！“うたとチェロによる秋の夕べ”

期 日：平成29年10月14日（土）18：30開演（18：00開場）

会 場：リバティ [嬉野市社会文化会館]文化ホール（定員：463人）

入場者数：218人（合唱団含む）

2部構成。1部は歌とチェロそれぞれの演奏、歌・チェロ・ピアノのトリオ演奏、最後は地元合唱団との共演あり。2部はピアノソロから始まり、一部同様にそれぞれの演奏、トリオ演奏。アンコールには再度、地元合唱団との共演あり。

演奏曲目としては、クラシック曲だけではなく、日本歌曲、童謡など、それぞれの楽器の特色・良さが伝わる曲を演奏していただきました。また、曲と曲の間や演奏前に解説や聞き方をアーティストが説明し、来場者の想像力(創造力)の育成、音楽の楽しさを心と体で感じ、音楽の魅力や素晴らしさを身近に感じることができるアットホームなコンサートとなりました。来場者アンケートにおいても「3名のアーティストの個性や空気感が伝わるコンサート」「素晴らしいコンサートを遠くに足を運ばなくても聴くことができ有難い」など集客には少し繋がりにくかったですが、地元合唱団との共演も出来た一流アーティストが奏でる心温まる秋の夕べでした。



① 応募の動機・事業のねらい

当館が開館し3年が経ち、ホールや市内の会場でのコンサート等に限らず、学校や施設でのアウトリーチ・ワークショップも行ってきました。今回音活に応募した動機としては、事業企画担当が一人しかいないことで外からの視点で当課スタッフとの意見交換や事業の進め方についても助言をいただきたいかったことと、継続してアウトリーチ・ワークショップを行っていくうえで、担当者が変わっても進めていくことができるようにしておきたいというねらいがありました。また、学校や施設へ出かけ、子どもたちに生の芸術・文化に触れる機会を作り、音楽を通して様々な事を学んでほしいという想いがありました。

② 企画のポイント

なんとなく演奏家の音楽を聴いたり見たりすることはあっても、そこから色や絵画、物語を想像したりすることはあまりないだろうと思い、アウトリーチでは参加すること（色んな視点から考えることができるという全てが正解とする考え方）と想像する（創造する）ことにポイントを置きました。コンサートでは、「音楽をもっと身近に！」というタイトル通り、演奏家に曲の解説等のMCを曲間にいれていただくことでアットホームでお客様に伝わりやすく判りやすい内容になったと思います。また、それぞれの楽器を活かした選曲で、お客様に音色等の新たな発見をしていただくことができました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

特に問題となった点はありません。ただ、アーティストさんお二人（+伴奏者）の窓口やコーディネーター・アシスタント・事務局と多くの方にご協力いただいたことは有難かったのですが、進め方としてはやり取りに混乱してしまったりすることもありました。通常（私自身が）、間に代理店やコーディネーターを挟むことが少ない為感じたことだと思えます。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

コーディネーターの方が当方主導にいただいた部分が多かったことが上手く進めることができたのではないかと思います。ポイントのみ助言をしていただいたり打合せをすることで、ぶつかりあうこともほとんど無かったです。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティでは、「想像し創造すること」をテーマに音楽を通してさまざまなことを学び、それぞれの楽器の特色（声・チェロ・ピアノ）や一流アーティストの演奏や曲について間近で感じる事ができました。また、感じたことを言葉や色彩を使って表現する（発表する）ことができたのは、子どもたちにとっても貴重な経験となり、聴く楽しみができたのではないかと思います。また、互いに共感し、子どもたちの答えが全て正解であり、感じ方も人それぞれであることを互いに知り、音楽の素晴らしさや魅力を色々な角度・視点から考え、伝えていくことにも繋がりました。会場によってはアーティストと一緒に演奏することもでき、思い出になりました。コンサートに関しても、地元合唱団との共演やアーティストのどのような想いや曲目解説等の時間もあり、クラシックに馴染みが無く初心者でもとてもわかりやすい内容で、「次回開催希望」という有難いお言葉もいただくことができました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

アクティビティの部分では、参加者を公募するという形ではなく小学校に伺ったことで生徒にアウトリーチ事業として参加してもらいました。また、コンサートでは「低料金」「歌とチェロの珍しい組み合わせによるコンサート」「海外出身のオペラ歌手」「地元合唱団の参加」に特に注目していただけるようにラジオや新聞広告掲載も行いましたが、やはり地方ならではの名が知れている演奏家以外の公演には低料金でも足を運ぶ方が少ないと感じました。ご来場いただいたお客様からは、このような素晴らしいコンサートはもっと多くの方に聴いてほしいとのご意見が多くあり、少しでも足を運んでいただけるように公演内容や地元団体（個人）の協力体制についても再度検討していくことが必要だと感じました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

人口3万人に満たない過疎地域にもなり得る本市には“お茶・温泉・大自然”という地域の魅力もあり、観光地としても有名で、インバウンドやスポーツ誘致としては盛んなまちですが、文化・芸術が根付いていないまちでもあります。その中で文化振興の拠点として当館を利活用した事業企画・運営を行い、市内においても様々な会場で文化だけではなく本市が観光地ということからも両方からみた誘致事業も開催してきました。また、子どもたちには幼少期から一流アーティストの演奏やパフォーマンス、技法等にも間近で体感し参加してほしいという想いでアウトリーチやワークショップを行ってきたこともあり、今後も本事業のようなアクティビティ・コンサートを行い、幼少からご年配の方までがいつまでも夢や希望を持ち、音楽を通して様々な事を自発的に楽しみながら学び、想像性（創造性）豊かな人材を育成する“きっかけづくり”を当館や当課スタッフが人と人、地域と人の懸け橋となり、集客には中々繋がらない小さいまちながらも“継続は力なり”という言葉を信じ、人の繋がりを大切にしたい地方の魅力を発信し続けていきたいと思えます。

アシスタントレポート

千葉 真弓

佐賀県嬉野市は県の西部に位置する。「日本三大美肌の湯」と称される嬉野温泉が所在し、九州でも有数の大温泉地として古くから人々の交流が盛んな土地である。人口は約2万7千人。嬉野市のおんかつ事業の拠点は、嬉野市社会文化会館（愛称:リバティ）。担当者は文化振興専門員、中島知佳さん。アーティストはチェリストの加藤文枝さんとバリトンのヴィタリ・ユシュマノフさんを迎えて実施された。

【アクティビティ】 嬉野市内の小学校を対象に2日間で4回、いずれも共通の内容で実施された。ヴィタリさんと加藤さんが共演する場面と、それぞれが演奏する場面に分けての構成であった。担当の中島さんには、子ども達が音楽から様々なことを想像し、それを友達や先生と共有することで、感じ方が人それぞれであること、互いに共感することを学んで欲しいという考えがあった。そこで、子ども達との双方向のコミュニケーションが巧みな2組のアーティストが選ばれ、中島さんのねらいどおり、想像力があふれる音楽ならではの時間となった。

ブルーの瞳のヴィタリさんが登場すると、瞬間、音楽室になんともいえない緊張感が漂う。ところが、親しみやすい表情と軽妙な日本語で子ども達をすぐに虜にしてしまう。日本歌曲『九十九里浜』ではピアノが表現する海の景色を想像してもらい、楽劇『ラインの黄金』よりドンナー（雷神）の aria では参加型の仕掛けを用意。一発の雷を、息をあわせた一発の拍手で表現してもらった。ヴィタリさんがイタズラな表情を浮かべながら合図のために右手を高々と上げると、子ども達の期待やドキドキ感が大きく膨らんで、全員が集中した大きな『パチン』という音で表現された。ここまでの時間で子ども達の緊張と音楽を聴く耳がほぐされて、チェロの加藤さんのプログラムへとつながってゆく。「音楽を聴いてイメージで遊みましょう」という加藤さんのアプローチから、想像力を膨らませるプログラムが始まる。曲を聴いて「赤」「黒」のどちらを感じるか、という問いには「力強いイメージが黒だと思う」「迫力があって最初の音で赤を感じた」などの意見が出される。次の曲は「昼」「夜」、さらには3枚の絵画を見て、曲のイメージに近い物を探す。子ども達は想像力を働かせるために初めて聴く（であろう）クラシック音楽に夢中になる。加藤さんの問い掛けには間違った答えは無く、安心して想像を楽しみ、自分のイメージを自分の言葉で伝え、その場にいる全員で共有することができた。小学校でのアクティビティは、音楽を紹介することの他にも、演奏家と交流したり、自分と向き合ったり、多様性を学んだり、子ども達に多彩な体験をもたらすと実感した。

【コンサート】 嬉野中学校吹奏楽部員と地元の合唱団「嬉野讃歌エコーズ」と、嬉野市曲『ふるさとの空よ』を共演する場面を織り交ぜながら、アーティストの本格的な演奏を楽しんでいただく内容となった。客席には幅広い年齢の多くのお客様が来場し、あたたかな雰囲気を感じられた。コンサートのために中島さんがこだわったチラシは、オレンジ色と深い茶色で秋を表現し、印象的なフォントを使って一目で楽しい雰囲気のコンサートと分かるデザインだった。多くの人に「手に取りたい」と思わせるデザインはチラシにとって重要であり、一人でも多くの方にコンサートを聴いてもらいたいという熱意を感じた。

【最後に】 今回のおんかつ事業は担当の中島さんを中心に、文化・スポーツ振興課で運営された。ジャージを着たスポーツ担当の屈強なスタッフも多く、準備物の多いアウトリーチでは力強い存在となった。嬉野市の様に、既にアウトリーチ事業に取り組んでいるホールであっても、チームワークを再認識する機会や他分野のスタッフがクラシック音楽を知る機会、住民との新たな回路をつくる機会としておんかつ事業を活用することは有意義であると思う。この後もアウトリーチ事業が継続されることを願っている。

実施団体：熊本県 菊陽町

実施時期：平成30年1月18日（木）～平成30年1月20日（土）

出演アーティスト：喜名 雅（チューバ） 鈴村 真貴子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：菊陽北小学校 アウトリーチ

期 日：平成30年1月18日（木） 10：45～11：30

会 場：菊陽北小学校 音楽室

参加者：5年生 38人

喜名氏と鈴村氏が入場して演奏。

当館の館長のユーフォニウムとの共演で、チューバとユーフォニウムの違いを説明。

ゴムホースにマウスピースを付けた疑似チューバを吹いて、生徒たちにホースが振動しているのを体験させて、希望者に実際に吹いてもらう。

鈴村氏によるピアノの解説があり、実際にピアノの下に潜ってもらい、振動と響きの体験。

最後に喜名氏から生徒たちへコンサートの招待券を手渡しする。



タイトル：菊陽南小学校 アウトリーチ

期 日：平成30年1月18日（木） 14：15～15：00

会 場：菊陽南小学校 音楽室

参加者：4～6年生 43人

喜名氏と鈴村氏が入場して演奏。

当館の館長のユーフォニウムとの共演で、チューバとユーフォニウムの違いを説明。

ゴムホースにマウスピースを付けた疑似チューバを吹いて、生徒たちにホースが振動しているのを体験させて、希望者に実際に吹いてもらう。

鈴村氏によるピアノの解説があり、実際にピアノの下に潜ってもらい、振動と響きの体験。

最後に喜名氏から生徒たちへコンサートの招待券を手渡しする。アクティビティ前に給食交流。



タイトル：武蔵ヶ丘小学校 アウトリーチ

期 日：平成30年1月19日（金） 10：50～11：35

会 場：武蔵ヶ丘小学校 音楽室

参加者：5年2組 28人

喜名氏と鈴村氏が入場して演奏。

当館の館長のユーフォニウムとの共演で、チューバとユーフォニウムの違いを説明。

ゴムホースにマウスピースを付けた疑似チューバを吹いて、生徒たちにホースが振動しているのを体験させて、希望者に実際に吹いてもらう。

鈴村氏によるピアノの解説があり、実際にピアノの下に潜ってもらい、振動と響きの体験。

最後に喜名氏から生徒たちへコンサートの招待券を手渡しする。



タイトル：武蔵ヶ丘北小学校 アウトリーチ
期 日：平成30年1月19日（金） 14：20～15：05
会 場：武蔵ヶ丘北小学校 音楽室
参加者：6年生 50人

給食交流後にアクティビティ。喜名氏と鈴木氏は板付きでスタンバイ。

給食交流を行っていたため、初めからリラックスした和やか雰囲気であった。

他の学校と同じ流れの後に、先生からの希望で、合唱コンクールで歌う曲を、喜名氏、鈴木氏の伴奏で合唱。先生、生徒たちが感涙する場面が見られた。

最後に喜名氏から生徒たちへコンサートの招待券を手渡しする。

コンサート

タイトル：第7回みんなできくようコンサート～チューバで奏でる“ふるさとの息吹”～
期 日：平成30年1月20日（土） 14：30開演
会 場：菊陽町図書館ホール菊陽町図書館ホール（定員：500人）
入場者数：250人

喜名氏と鈴木氏が入場して演奏。

1曲演奏が終わるごとにMCを入れる。第一部終了後休憩あり。後半は喜名氏、鈴木氏それぞれのソロ演奏。

最後に菊陽中学校合唱部とふるさとを共演。バックに菊陽町の風景の写真を流しながら演奏。

アンコールで、菊陽中学校合唱部と花は咲くを共演。バックに菊陽町の花の写真を流しながら演奏。



① 応募の動機・事業のねらい

当館では、平成23年度「おんかつ」事業を活用し、初の自主文化事業「みんなできくよう♪コンサート」を実施した。以後、当館自主文化事業として定着している。今後の事業及び当館の将来ビジョンを見つめなおし、新たな「みんなできくよう♪コンサート」の可能性を見出すため、おんかつ事業を活用した。

② 企画のポイント

コンサートのサブタイトルが、「チューバで奏でるふるさとの息吹」であり、地元の風景写真をバックに流したり、地元中学校の合唱部と共演した。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

入場券の売れ行きが思わしくなく、集客に苦勞した。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティの生徒たちや町内の小中学校の合唱部や吹奏楽部、当館がお世話になっている音楽関係者に招待券を配布した。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティでは、先生・生徒が感極まって涙を流す場面があった。

今までもアクティビティで盛り上がることはあったが、感涙が見られたのは初めてだった。

また、給食交流の際、従来はアクティビティ→給食交流の順番で行っていたが、小澤コーディネーターからの提案で、今回初めて給食交流→アクティビティの順番で実施した。

給食交流を先に行ったので、生徒たちも緊張がなくリラックスした様子で、アクティビティに入っていくことができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

チケットの販売は毎年苦戦を強いられる。

次年度は小学校以外でもアウトリーチを行い、別の層へもアプローチしていきたい。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

「みんなできくよう♪コンサート」は、ふるさとへの愛着をテーマに行っており、徐々にその効果も出てきている。

今までホールへ来なかった層へアプローチすることで、さらにその効果を町全体に波及させていきたい。

〈概要〉

熊本県菊陽町は、空港や駅からのアクセスが良く、住環境が整備されているなどの理由で、全国有数の人口増加率を誇る町である。

菊陽町図書館ホールの川端慎一館長は平成23年度に実施したおんかつ事業をきっかけに、音楽事業「みんなできくよう♪コンサート」を始めた。また、熊本県立劇場と連携して、町内小学校へのアウトリーチ事業を現在も継続している。今回は、今後の運営体制づくりを目指し、担当を若手に引き継いで実施。これまでの事業の結果、ホールと町や町内小学校との間には密な関係が出来ているため、今回の事業もスムーズに行われた。

今回のおんかつのテーマは「ふるさとへの愛着」「人と人との絆」づくり。アクティビティは小学校以外での実施も検討されたが、最終的には4小学校での実施となった。

プレゼンテーションで喜納雅さんが演奏する喜納昌吉の「花」を聴き、喜納さんの温かい人柄と、チューバの温かい音色に惹かれ、「ふるさと」というテーマにもぴったりだと喜納さんに依頼。ピアニストは鈴木真貴子さん。

4小学校でのアクティビティは総じて大成功だった。その中でも特に印象的だったことをレポートしたい。

アクティビティ1) 〈会場〉 菊陽北小学校

アクティビティ2) 〈会場〉 菊陽南小学校

アクティビティ3) 〈会場〉 武蔵ヶ丘小学校

アクティビティ4) 〈会場〉 武蔵ヶ丘北小学校

小学校でのアクティビティの際に、アーティストと児童が給食の時間を共に過ごす給食交流を実施することがある。菊陽町ではアクティビティ後に給食交流を実施することが多かったが今回はアクティビティ前に実施。それは給食交流をアクティビティの成功に向けた一つのステップと捉えてのことだった。今回、給食交流後にアクティビティを実施した菊陽南小学校、武蔵ヶ丘北小学校でのアクティビティではその効果が現れた。アーティストと児童は初対面なので打ち解けるのに時間がかかることが多いが、1曲目からアーティストと児童の間で良いコミュニケーションが取れていて、児童達の反応に川端館長も驚いていた。

武蔵ヶ丘北小学校でのアクティビティは特に印象的だった。アーティストが給食交流から中々帰って来ないことを不思議に思っていたら、突然教室からギターのと大合唱が聴こえてきた。それは先生と児童からのアーティストへの歌のプレゼントだった。先生と児童の絆はからいにアーティストも音楽で応えた。対象の児童が6年生だったため、その日のプログラムの最後に卒業式で歌う合唱曲「変わらないもの」を共演することになっていた。その合唱を「先生へのサプライズプレゼントにしよう」と児童に提案。いつもは指揮に立つ先生を特等席に案内し合唱をプレゼントした。アーティストと児童の思惑通り、先生は前奏を聴くやいなや号泣。児童の中には感極まり涙を流しながら歌う児童もいた。間近に迫る卒業式のことを思いながら、その場に立ち会った全員の胸が熱くなるアクティビティとなった。

〈コンサート〉

「ふるさと」をテーマに、喜納昌吉の「花」や「ケンタッキー組曲」など、故郷、家、家族などを感じられるプログラムに多くの観客はふるさとに想いを馳せながら豊かな時間を過ごすことが出来たようだった。「ふるさと」とアンコール曲の「花は咲く」では、菊陽中部中学校合唱部と共演し、菊陽町の町内の風景や花の写真をスライドで投影しての演奏だった。中学生達の素敵な歌声を包むチューバとピアノの演奏で会場全体が温かい気持ちになり楽しんでいる様子だった。

〈総括〉

コンサート、アクティビティ共に大成功に終わったが、成功を通して、課題も浮き彫りになったようだった。それは全国のホールが頭を抱える集客の課題である。川端さんは長年町や学校と丁寧な関係づくりをしてきたため、実施前から小学校アクティビティでの成功は予想されていた。おんかつ事業以外のホール事業などを総合的に検討した結果、今年度は小学校での実施としたが、次のステップとして集客に繋げるためのアクティビティに取り組むことを計画している。来年度はおんかつ発展継続事業を予定しており、8つのアクティビティを通して集客につながる取り組みを考えている。地域創造の事業の成果でアウトリーチ事業に取り組む劇場は全国でかなり増加したが、アウトリーチをコンサート集客に結びつけられている劇場は数少ない。菊陽町の来年度の取り組みは同様の課題に取り組む全国の劇場にとっても試金石になる可能性を持っている。

実施団体：大分県 玖珠町

実施時期：平成29年9月28日（木）～平成29年9月30日（土）

出演アーティスト：塚越 慎子（マリンバ） 志村 和音（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：ミニコンサート♪玖珠町に響くマリンバのリズム♪
～議場編～

期 日：平成29年9月28日（木） 10：15～11：00

会 場：玖珠町議場

参 加 者：町議会議員・中学1年生・町職員 86人

議場で行うアクティビティには、議長の提案による、議場体験を兼ねたミニコンサートということで町内の中学1年生が議員席、町議会議員、町長、副町長、教育長、職員が傍聴席という形でのアクティビティとなった。裏打ちを体験するワークショップでは、会場がとても盛り上がった。アクティビティの最後には、中学生にコンサートへの集客の期待を含めて招待券を塚越さん、志村さんから学校の代表の生徒に手渡していただいた。



タイトル：ミニコンサート♪玖珠町に響くマリンバのリズム♪
～商工会編～

期 日：平成29年9月28日（木） 16：00～16：45

会 場：玖珠自治会館

参 加 者：商工会関係者・玖珠地区コミュニティ 30人

日頃、公民館主催事業で、ポスターやチラシの掲示や配布、チケット販売を協力してくれている商店街の方々にアクティビティに参加してもらおうことで、事業の内容を理解してもらおうという思いで企画した。最初の登場で、塚越さんは、後ろの収納庫から、志村さんは観客になりすましての登場にみなさんびっくり！したり、タイプライターの曲ではジャケットを着て、メガネをかけてOLに変身したりと楽しい演出に参加者は大喜びだった。



タイトル：ミニコンサート♪玖珠町に響くマリンバのリズム♪
～コミュニティ編～

期 日：平成29年9月29日（金） 10：00～10：45

会 場：森自治会館

参 加 者：森地区コミュニティ 25人

自治会館役員や専門部委員、地域住民を対象としたアクティビティ。自治会館の呼びかけなどによる周知だったため、参加人数を予想することができず開始前、どれくらい集まってくれるか心配した。しかし、自治会館職員や近所の住民も集まった。意表を突いた登場の仕方や初めて聴くマリンバの音色に聴き入っていた。最後にはアンコールの拍手が鳴りやまないくらい感動している様子が見られた。



タイトル：心が弾む♪体も弾む♪マリンバのリズム
期 日：平成29年9月29日（金） 16：00～17：00
会 場：杉の子こども園
参加者：杉の子ダンスチーム 71人

マリンバの演奏を聴く1部と杉の子ダンスチームとのコンサートコラボ練習の2部構成でのアクティビティ。1部には杉の子こども園も子どもたちも参加してのミニコンサート。第2部は杉の子ダンスチームが2曲ダンスを披露した後、コラボ曲『恋』をマリンバの演奏で踊り、曲の終盤はダンスチームの小学生組はダンス、中学生組はいろいろな打楽器を持ち、裏打ちで演奏に参加するコラボでコンサートに臨むことになった。いろいろな種類の打楽器の説明を聞きながら、それぞれ選んだ楽器を叩く姿があった。

コンサート

タイトル：～心が弾む・心に響く～塚越慎子マリンバコンサート
期 日：平成29年9月30日（土） 18：00開演
会 場：くすまちメルサンホール町民ホール（定員：716人）
入場者数：437人

チケットの売れ行きから集客を心配したが、コンサート当日は、アクティビティに来られた方や招待券をもらった中学生の家族など、当日券がよく出て、予想以上にお客さんが入った。コンサートでは、塚越さんと志村さんの多彩な演出やマリンバの音色に観客は魅了され、杉の子ダンスチームとのコラボもあり、盛り上がったコンサートになった。コンサート後、とても満足感を感じ、また来年もして欲しいとの要望もたくさんあり、玖珠町にファンがたくさんできたコンサートになった。



① 応募の動機・事業のねらい

玖珠町は、過疎化・少子高齢化で人口減少が進むとともに、町の財政も厳しく予算・人員共に削減も進んでいる。メルサンホールも人員が減り、施設自体も今後どうなっていくのか過渡期となっている。生涯学習活動の拠点施設、文化ホールの機能をもっている施設なので、そういった文化の発信基地であることをアピールしたい。公共ホールだからできること、今後も活動を理解してもらえる人、応援してくれる人を作っていきたい。

② 企画のポイント

アクティビティは、議会、商工会、コミュニティと今回のおんかつの協力者になってもらえる大人向けのアクティビティとして企画した。玖珠町初の議場でのコンサートや杉の子ダンスチームとのコンサートでのコラボなど、話題性やコンサート集客をも考えた。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・私自身、3年前に幼稚園教諭からの異動で、初めて担当する事業だったので、事業のノウハウもわからず、知識もないので、実施できるかとても不安であった。
- ・議場でのアクティビティを考えたが、玖珠町では議場コンサートをしたことがなく、議員の実施の理解、議場利用の手続きなど。
- ・コンサートの集客問題。運営人員の不足。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・わからないことはコーディネーター・アシスタント・地域創造担当者の方々に電話やメールで頻繁に相談した。丁寧に詳しく教えていただいたことで安心しておんかつに臨むことができた。また、実際に実施の場面でどう動いたらいいか、配慮すべきことは何か、勉強になった。議場でのコンサートは、議長がとても企画に賛同してくれ、実現に向けいろんな場面で協力者となって動いてくれた。コンサートの集客に向けて、いろんな場に宣伝に足を運んだり、アーティストの魅力を伝えるチラシを追加で作成した。運営人員の不足は他の系の業務支援や多くのバックアップがあった。

⑤ 事業を実施しての成果

議場コンサートやダンスチームとのコラボなど新しいことに挑んだり、商工会やコミュニティでの地域に向けたアクティビティをしたことによって、公民館の事業、おんかつのことなどを理解してもらうとともに、多くの協力者ができた。また、玖珠町にはアクティビティ・コンサートを喜んでくれる町民・お客さんがいること、この事業を手伝ってくれ、支えてくれる仲間がいることが実感できた。事業の企画や実施のノウハウが勉強できたこと。次回への自分自身の意欲や課題が見えたこと。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

初めてのことで、わからないこと、自信がないことばかりでスタートしたので、聞いたり、教えてもらったりすることが多かった。また、他の事業との開催日が近く、コンサートの集客が難しかったことから、開催日程を考慮したり、早めにホール予約をしたりと見通しを持った計画を立てること。当館の人員が少ないことからアクティビティ・コンサートの業務支援を行い、とても協力的に支援していただいたが、担当者として十分な配置ができず、コンサートでは、舞台転換の人員の手配や観客のマナーの

周知に行き届かないところがあった。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回のようなクラシック音楽など文化的要素のものには、最初、なかなか足を運ぼうとしないところがある。しかし、今回来ていただいてホールから出てくるお客さんの顔を見ると、とても満足し、「よかった！！」と感想を言って帰られる姿がとても印象的であった。こういう機会をこれからも作っていききたい。1度来ていただくとその良さを感じてもらえる！と感じました。来ていただくためには企画力・宣伝力そして、多方面との連携の大切さを感じた。これからは足が向かう文化の発信基地のホールになっていけるよう努力していきたいと思う。

〈概要〉

大分県玖珠町は、玖珠盆地と言われ、盆地を取り囲むように山々、滝や湧水池が随所に見られる自然豊かな町である。また、大男が大きな木を切り倒したという伝説のある切株山や、九州唯一の扇形機関庫・旧豊後森機関庫などが有名である。また、日本のアンデルセンと呼ばれた久留島武彦が生まれた町で、昨年4月に久留島武彦記念館をオープンするなど、「童話の町」をキーワードに数年前から町おこしに取り組んでいる。

おんかつに参加したくすまちメルサンホールは2001年に開館した町民ホール（716席）、中央公民館、保健センターの機能を併せ持つ複合施設である。玖珠町は平成22年、24年、25年と過去に3度おんかつ事業、おんかつ支援事業を実施した経験がある。今回の担当者である岳尾かおりさんは保育士の経験を持ち、「小さな町で生の音楽を聴く機会がないため、生の音楽の楽しさや響きを届けたい。」「玖珠町の人にホール事業について知ってもらい、もっとホールを応援してもらいたい」という思いでコンサートとアクティビティの内容を考え、小学校ではなく、町民をターゲットにしたアクティビティを計画。町議会の議場、町に2カ所ある自治会館、杉の子こども園の4カ所でアウトリーチを実施した。

当初は、クラシックのオーソドックスな楽器奏者での実施を考えていたが、プレゼンテーションを聴き、普段触れる機会が少ないマリンバの音の暖かさや面白さ、身の回りのもの全てを楽器に変えるパーカッションの力に魅かれ、塚越慎子さんに決定。ペアは志村和音さん。

アクティビティ、コンサートは塚越さん、志村さんの遊び心が詰まった心も身体も踊るような内容となった。岳尾さんの狙い通り、玖珠町の皆さんは塚越さんと志村さんの演奏と人柄に魅了され、各所でアクティビティは大好評。口コミで評判が広がり、コンサートの大成功に繋がった。

アクティビティ1) 〈会場〉玖珠町役場内議場

当初は役場職員を対象に実施する予定だったが、議長から、中学生に議会を身近に感じてもらえるような議会体験を兼ねた企画に出来ないか？という逆提案があり、町内の中学生代表1年生約50人が議員席で、町長・副町長・議長、教育委員会職員や役場の幹部職員が傍聴席で鑑賞するという町総出のアクティビティが実現した。中学生の議場体験と関係者へのインリーチを兼ねた一石二鳥の企画だったが、特に「銀河鉄道999」は世代を越えて愛される曲で役場職員と中学生と一緒に楽しみ交流できるプログラムとなった。

アクティビティ2) 〈会場〉玖珠自治会館

普段、ホール事業の宣伝を協力してくれている商工会の人たちを対象にしたプログラム。仕事をしている人たちにも参加してもらえるように夕方に実施。子ども連れのお母さんも参加していたり、幅広い世代の人が集まった。リズムの裏打ちを体験するワークショップ(2人1組になり交互に手拍子をする)では間違っペアの人の手を打ってしまったたり、思わず真剣になりヒートアップしたりと、そここで笑い声が溢れていた。

アクティビティ3) 〈会場〉森自治会館

森地区の住民向けのプログラム。間近でのマリンバ演奏に圧倒され驚きの声を漏らしていた。玖珠自治会館、森自治会館共に、マリンバの音に魅了され、アウトリーチ後にチケットを買い求めるお客さんもいた。

アクティビティ4)〈会場〉杉の子こども園

杉の子こども園は岳尾さんが以前に保育士として勤めていた園。コンサートでの共演を予定していた杉の子ダンスチームメンバー（小・中学生の女子で結成）の他、急遽、近所の北山田幼稚園の園児達も参加した。園児達も楽しめる曲を組み込むなどの工夫もあり、園児達も最後まで集中して聴いていた。

〈コンサート〉

初めてのマリンバ・コンサートでもあり、集客が課題になっていたが、町じゅうにコンサートのポスターが貼られ、関係者全員が塚越さんのCDを購入するなど町をあげてコンサート集客に尽力された結果、約500人もの人々が本番のコンサートに来場。これにはホールの職員達もびっくりしたと驚きの声をあげていた。岳尾さんはアクティビティ参加者や多くの関係者が来場しているのを目にして感無量の様子で、「これからも続けていきたい」と、今回の事業が自信に繋がったようだった。

実施団体：一般財団法人滑川市文化・スポーツ振興財団

実施時期：平成29年9月21日（木）、9月22日（金）、10月19日（木）～10月21日（土）

出演アーティスト：早稲田桜子（ヴァイオリン） 大熊理律子（マリンバ） 早稲田眞理（ピアノ） 藤岡 弘子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：わくわくヴァイオリン

出演者：早稲田 桜子

伴奏共演者：早稲田 眞理

期 日：平成29年9月21日（木） 14：00～14：20

会 場：寺家小学校 音楽室

参加者：4年1組 22人

ヴァイオリンの音が出る仕組みや材質、演奏時の注意点を楽しく説明しエルガーの「愛の挨拶」「中国の太鼓」など様々なテンポの曲を演奏。また、クラス全員がヴァイオリン体験で弾き方を教わった。学校からの要望で、市小学校音楽会での合唱曲「すてきな友達」「宝島」の2曲をヴァイオリンの演奏に合わせて合唱した。



タイトル：わくわくヴァイオリン

出演者：早稲田 桜子

伴奏共演者：早稲田 眞理

期 日：平成29年9月21日（木） 14：50～15：30

会 場：寺家小学校 音楽室

参加者：4年2組 23人

ヴァイオリンの音が出る仕組みや材質、演奏時の注意点を楽しく説明等内容は同じ。このクラスには、心を閉ざしている子や、やる気のない子がいる教室とのことでしたが、先生方が驚くほど、周りの子と遜色なく積極的に発言したり、生き生きとした表情で楽しんでいました。



タイトル：わくわくヴァイオリン

出演者：早稲田 桜子

伴奏共演者：早稲田 眞理

期 日：平成29年9月22日（金） 11：35～12：20

会 場：田中小学校 音楽室

参加者：4年生 29人

ヴァイオリンの音が出る仕組みや材質、演奏時の注意点を楽しく説明等内容は同じ。演奏しながら子どもたちの席の間を歩いていくと目を輝かせて覗き込んでいた。最後に校歌を演奏し合唱した。終了後給食交流していただいた。



タイトル：わくわくヴァイオリン

出演者：早稲田 桜子

伴奏共演者：早稲田 眞理

期 日：平成29年9月22日（金） 13：45～14：30

会 場：南部小学校 音楽室

参加者：4年生 29人

ヴァイオリンの音が出る仕組みや材質、演奏時の注意点を楽しく説明等内容は同じ。この学校は、4年生から全員「マンドリン」の練習をするため、弦楽器には興味深く積極的に参加していた。学校から、音楽の授業の鑑賞曲「美しきロスマリン」を生演奏で聴きたいとのリクエストを叶えていただいた。



タイトル：わくわくマリンバ

出演者：大熊 理津子

伴奏共演者：藤岡 弘子

期 日：平成29年10月19日（木） 11：25～12：10

会 場：北加積小学校 音楽室

参加者：4年生 25人

マリンバのマレットや鍵盤の特徴を説明し道化師のギャロップほか4曲を演奏し、二人羽織のようにしてのマリンバ体験。叩いて音の出る楽器＝打楽器ということで、曲に合わせてボディパーカッションとして手で参加したり、学校からのリクエストで、授業で習った「聖者の行進」をリコーダーとマリンバで合奏した。最後にマリンバの解体を行い構造を知ってもらう。



タイトル：わくわくマリンバ

出演者：大熊 理津子

伴奏共演者：藤岡 弘子

期 日：平成29年10月19日（木） 13：50～14：35

会 場：東加積小学校 音楽室

参加者：4年生 12人

マリンバのマレットや鍵盤の特徴を説明ほかマリンバの解体など内容は同じ。市内で一番小人数の学校で、4年生は12人でした。ただし、子どもたちは真剣な眼差しであったり、にこにこ素直に表現したり、体でリズムを取ったりと反応はとても良かった。



タイトル：わくわくマリンバ

出演者：大熊 理津子

伴奏共演者：藤岡 弘子

期 日：平成29年10月20日（金）11：30～12：15

会 場：東部小学校 音楽室

参加者：4年2組 30人

マリンバのマレットや鍵盤の特徴を説明ほかマリンバの解体など内容は同じ。このほか子どもたちがタイプライター、壊れかけた時計、Plink、Plank Plunk！の曲に参加し、ギロ、ウッドブロック、トライアングルを使って音や速さを体で表現した。終了後は給食交流をしていただいた。



タイトル：わくわくマリンバ

出演者：大熊 理津子

伴奏共演者：藤岡 弘子

期 日：平成29年10月20日（金）13：55～14：40

会 場：東部小学校 音楽室

参加者：4年1組 29人

マリンバのマレットや鍵盤の特徴の説明他マリンバの解体、楽器を使っでの参加など内容は同じ。特別支援級の男の子は、大きな音以外は体で楽しさを表現していた。この学校は、マリンバの超絶技法が見たい！との希望を叶えていただいた。



コンサート

タイトル：ヴァイオリン&マリンバ ときめきコンサート

出演者：早稲田 桜子・大熊 理津子

伴奏共演者：早稲田 眞理・藤岡 弘子

期 日：平成29年10月21日（土）14：00開演

会 場：滑川西地区コミュニティホール（定員：330人）

入場者数：116人

2部構成で開催。1部は、ヴァイオリンの早稲田桜子さんで「愛の挨拶」など4曲と、おはなしと音楽「3びきのくま」をステージに絵本をスライドで映し、読み聞かせしながらの演奏。2部は、マリンバの大熊理津子さんでテーマ曲の「全速力ウーマン」など6曲を演奏。その中の「秋メドレー～もみじ、村まつり、赤とんぼ～」は今回の事業で訪れたアクティビティ先の様子をスライドで映しながら演奏。最後に早稲田さんと大熊さんの共演で当市出身の作曲家高階哲夫さんの「時計台の鐘」を演奏していただいた。



① 応募の動機・事業のねらい

市内の全小学4年生に「生の音楽」を届け、音楽の力による感動を体感することにより、音楽の楽しさや音楽に興味を持ってもらえる機会を提供するとともに、公共ホールの活性化と地域の皆さんにクラシック音楽の素晴らしさを知ってもらう。

② 企画のポイント

アクティビティ先の各学校の先生方と、事前に何度も打ち合わせを行ったことで、学校（クラス）からの要望をアーティストの方々に伝え実現していただいた。また、校歌をアーティストの方々に演奏していただき合唱したことが、子どもたちはアーティストとの一体感を味わうことができたと思う。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

音楽の拠点となるコンサートホールが無く、文化芸術に対する関心もあまり高くなく、特にクラシック音楽に敷居が高いと感じているのでコンサートの集客に苦勞する。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

コンサートへの集客や、クラシック音楽への関心を持ってもらうことはまだまだクリアできていないので、応募の動機でもあるクラシック音楽の素晴らしさを知っていただけるよう、今後も事業を継続し市民にアピールし続け、ホールへの来場者を増やしたい。

⑤ 事業を実施しての成果

子どもたちの表情や反応に先生方も感動され、全てのアクティビティ先の小学校で事業の取り組みに共感を得れたことで、今後の継続に向けても受け入れが全面協力的になった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

コンサートに関しては、舞台を創っていくスタッフ不足と、アクティビティ先の学校の希望により、9月と10月の2回に分散しての実施となり、コンサートが10月になったことで、9月実施のヴァイオリンの感動が薄れてコンサートの集客に影響がでってしまったことが残念でした。今後、1人でも多くの子供たちがホールに足を運んでくれるよう仕掛けることが課題です。昨年からお世話になっているコーディネーターの方から学んだ「もっとできることがあるはず」の視点で取り組んだつもりでしたが、まだまだ足りませんでした。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アクティビティ先での子どもたちの表情や反応をみて、一流の音楽を体感することの意義を実感した。継続することによりクラシックをはじめその他の芸術にも若い世代の世界観が広がっていくことを願いつつ、音楽ホールではない当館の設備の不利をも楽しみながら、市民の皆さんが「本物」の演奏の魅力に引き込まれ感動し、文化芸術を身近なものとしてホールに足を運んでいただけるよう、アーティストと市民の橋渡しとなれるよう努力していきたい。

ほたるいかのほろ苦さ

コーディネーター 山本 若子

滑川市でのおんかつは、平成27年に実施された市町村長向けの文化政策セミナーへの滑川市長のご参加から始まった。

市長はセミナー内で行われた、おんかつの登録アーティストによるコンサートとおんかつについての事業内容の説明に耳をかたむけてくださり、同27年度に市独自でアウトリーチ事業を行われ、翌28年度におんかつ実施、29年度におんかつ発展継続事業を実施、30年度にはおんかつ発展継続支援事業を迎えることとなる。

滑川市では子どもの医療費、第2子の保育料、子どもが利用する際の体育館使用料、プラスバンド部のホール使用料等々に対する支援など、もともと子どもたちの育成に関する取り組みが多くあり、おんかつをはじめとする音楽でのアウトリーチ事業はその文化的側面を子どもたちに提供する位置付けで取り組まれることとなる。

27年度でのアウトリーチ事業については独自で行われたこともあり詳細については伝聞の情報になるのだが、アーティストが小学校の歴史について調べたり子どもたちと一緒にできることを考えたりと、音楽的側面のみではなく、子どもたちとつながろうとする心意気が伝わる内容であったとのことである。

翌28年度におんかつを実施した際は、通常のおんかつの枠内（4つのアクティビティと本コンサート）での規模で行われ、市内2小学校計4クラスで実施した。同年の報告書に所感として「(滑川市の人々は)心の交流の土台が形成されており、互いの距離感を探り合う時間が不要」と書かせて頂いたことが記憶に新しい。

また、実施当時よりおんかつ支援事業（おんかつ実施後、2年間の助成を受けられるといもの）を視野に入れ、その際には市内すべての小学4年生に対しての実施を考えておられ、着実に市の継続事業として定着させていく流れを作られていた。

そしておんかつ発展継続事業である。29年度が初年度となる新たな事業であり、28年度の実施団体よりモデルケースとなり得る自治体を思い巡らせたとき、上記のような理想的な環境が整いつつあることから滑川市を挙げさせて頂いた。

29年度発展継続事業実施時には、計画通り7小学校10クラス、市内全4年生を対象にアウトリーチが展開された。事業の枠組みとしては8つのアクティビティと本コンサートのため、枠外2つのアクティビティの実施にかかる経費は市で予算化されている。アーティストは小学校のご希望をふまえつつ2組を選ばれ、それぞれ別日程での実施とされた。事業最終日には2組のアーティスト合同でのコンサートを開催されたのであるが、その前々夜、市長、教育長、そして市内全小学校の校長先生もしくは音楽の先生方が集まってくださり、大々的な懇親会を催してくださった。市として子どもたちに対する思い、学校現場のお声などを伺うことが出来、また10月という時期にもかかわらず、特別な技術で冷凍保存を施されたほたるいかのお刺身をご用意くださり、ほろ苦さとともに気を引き締めた宴であった。

そして30年度は本年度同様に全4年生を対象にアウトリーチ事業が繰り広げられるそうである。「継続」の土壌は確実に耕されている。

さて、事業名「発展継続」の「発展」は「継続」と両輪となってはじめて実現されるものであると考える。まさに1日にしてならずであり、単年度の実施では霞のようなもの。この先の未来を見据えつつ、この事業で何をもたらせるのかということのビジョンを描いて取組んでいくことが霞を実体に変えていける方法のひとつであると思われる。

先述したとおり、滑川市はおんかつの目的のひとつである「人と人とのつながり」というミッションをすでに土着のものとして達成されている地域である。舞台芸術を存分に鑑賞できる文化ホールがないというハード面に対する欲求は存在しているものの、それを埋め合わせることでできる人間力と包容力

とがある。この環境のもと、全4年生に一流アーティストとの接点を持つことを通して何をもたらせるのか、十年後二十年後、二十歳、三十歳となった子どもたちがどのような大人になり、社会を形成していくのか。たった1時間弱の出会いではあるが、その時間をどれだけ意義のあるものにするかは、現在の大人たちのビジョンにかかっている。アウトリーチに内包されている「人と人がつながるということ」「本気の大人に至近距離で接するということ」等々を通して、子どもたちが感じてくれるであろう事を子どもたちの未来にどう生かすことができるのか。

あの時味わったほたるいかのほろ苦さが、十年後二十年後に真の味わいとなるよう、発展継続の過程を見守り続けたい。

実施団体：岐阜県関市

実施時期：平成29年9月26日（火）～9月30日（土）

出演アーティスト：BLACK BOTTOM BRASS BAND（ブラスバンド）

アクティビティ

タイトル：音楽は楽しい！武儀やまゆり保育園アウトリーチ

出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND

期日：平成29年9月26日（火） 10：30～11：15

会場：武儀やまゆり保育園 ゆうぎしつ

参加者：年中・年長児 30人

アクティビティ実施について保育園の先生から事前に園児へ周知がされ、開催日を楽しみに待ってました。園児たちは今まで楽器を間近で見ること聴くことも初めての体験でしたが、演奏しながらの入場に目を輝かせ、メンバー紹介とともに各楽器（高音・低音）の音の感じ方、リズムに合わせて手拍子や体全体で再現する、音楽の楽しみ方を遊びながら学び、体全体で感じていました。運動会のために練習した「さんぽ」（和太鼓）をBBBBと合奏（合唱）できたことは園児たちにとって自信につながるプログラムでした。

タイトル：音楽は楽しい！富野保育園アウトリーチ

出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND

期日：平成29年9月26日（火） 14：00～14：50

会場：富野保育園 ゆうぎしつ

参加者：年中・年長児 29人

会場入りして、楽器の音が聴こえてくると園児たちは、窓のカーテン越しに覗き込み興味深々。演奏しながらの入場で間近に見る楽器と音の大きさに驚いていました。メンバー紹介とともに各楽器（高音・低音）の音の感じ方、リズムに合わせて手拍子や体全体で再現する音楽の楽しみ方を遊びながら学び、体全体で感じていました。最初、落ち着かない園児もいましたが、体を使って参加することで音楽を楽しむ姿を見ることができました。園児たちが大好きな「かえるのみどりちゃん」を演奏に合わせ歌を歌いながら踊る楽しいプログラムでした。

タイトル：音の喜びを体で感じよう 関特別支援学校アウトリーチ

出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND

期日：平成29年9月27日（水） 13：30～14：15

会場：関特別支援学校 体育館

参加者：小中高全生徒 61人

肢体不自由、病弱の児童生徒のため、車いすやベッドのままの参加となり、体育館での開催となりました。普段、コンサート会場などに気軽に出かけられる子どもたちばかりではなく、生の演奏を体験することが初めてでした。BBBBが自由に動けない子どもたちの中に入っての演奏と子どもたちを盛り上げる楽しい雰囲気づくり、話術によって、子どもたちが自然と体を動かし、楽器を鳴らし、声をだして全身で音楽の喜びを感じていました。



タイトル：武芸川中学校アウトリーチ ポップス講座
出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND
期 日：平成29年9月27日（水） 16：00～17：00
会 場：武芸川中学校 音楽室
参加者：吹奏楽部生徒 25人

アーティストによるミニコンサートから始まり、吹奏楽部が現在練習している楽曲を普段の指導者の指揮で演奏、BBBBメンバーによる音づくりの講座、各メンバーが各セクションへ入って一緒に演奏をしました。講座では体の力を抜いての演奏やリズムの捉え方(具体的に楽しいことを考えながらリズムを刻むことで音が変わること)を体感し、吹奏楽部の生徒たちは聴いている人を楽しませるには演奏者側もリラックスして楽しむことが大切であることを学ぶプログラムでした。



タイトル：音楽の迫力に感動 田原小学校アウトリーチ
出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND
期 日：平成29年9月28日（木） 11：35～12：20
会 場：田原小学校 音楽室
参加者：4年2組 25人

演奏しながらの入場、誰もが聴いたことのあるカントリーロードの演奏で児童たちの緊張もほぐれ、メンバー紹介と楽器紹介、音楽に合わせて声を出した後は、体の力を抜いて嫌なことはすべて吐き出して、楽しい気持ちになるリズムを体感しました。学校校歌のジャズアレンジはいつもと違うことに新鮮な気持ちで聴いていました。好きな場所で聴いてみる時間には演奏者の前から後ろから聴く姿が見られ、ベースドラム・スネアドラム体験（8ビートでセッション）では、一緒に演奏することで楽器をより身近に感じていました。



タイトル：音楽の迫力に感動 田原小学校アウトリーチ
出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND
期 日：平成29年9月28日（木） 13：55～14：40
会 場：田原小学校 音楽室
参加者：4年1組 27人

ランチタイムコンサートでの子どもたちの高揚が冷めないうちの授業のため、始まる前から楽しみにしている様子でした。演奏しながらの入場、メンバー紹介と楽器紹介。体の力を抜いて嫌なことはすべて吐き出して、楽しいことを浮かべてのリズム体験では、どんなことでもほんの少し楽しいことを見つけることで次に進めることを音楽を通して感じていました。学校校歌のジャズアレンジ演奏、好きな場所で聴いてみること、ベースドラム・スネアドラム体験（8ビートでセッション）は、音楽を体感し、楽しめるプログラムでした。



タイトル：音楽の迫力に感動 桜ヶ丘小学校アウトリーチ
出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND
期 日：平成29年9月29日（金） 11：35～12：20
会 場：桜ヶ丘小学校 音楽室
参加者：4年2組 34人

演奏しながらの入場、最初は大きな音にびっくりした様子でしたが、すぐに演奏に引き込まれていました。メンバー紹介や楽器紹介は皆、前のめりで聴いています。ワッシュョイブギでは全身を使って音楽を受け止めていました。学校校歌のジャズアレンジはいつもと違う雰囲気を味わい、心地よさそうに歌っていました。好きな場所で聴いてみる曲では、ベースドラムやスーザフォンの人気が高く音の迫力を感じているようでした。ベースドラム・スネアドラム体験（8ビートでセッション）では参加してる子も見てる子も楽しめるプログラムでした。



タイトル：音楽の迫力に感動 桜ヶ丘小学校アウトリーチ
出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND
期 日：平成29年9月29日（金） 14：00～14：45
会 場：桜ヶ丘小学校 音楽室
参加者：4年1組 36人

児童たちはランチタイムコンサートの余韻を持ちながらアクティビティです。演奏しながらの入場、メンバー紹介と楽器紹介のあと、聴きなれたカントリーロードや学校校歌もジャズアレンジでの演奏に興味津々でした。ワッシュョイブギやリズムのとり方では全身で音楽を感じています。好きな場所で聴いてみようでは、スネアドラムの細かな速い動きに注目が集まり、また間近で聴く各楽器の音の迫力に興奮している様子でした。ベースドラム・スネアドラム体験（8ビートでセッション）は音楽への興味を刺激するものでした。



コンサート

タイトル：第262回市民の劇場 BLACK BOTTOM BRASS BAND
LIVE ～ブラスバンドでつながる 拡げよう音楽の輪～
出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND
期 日：平成29年9月30日（土）14：00開演
会 場：関市文化会館大ホール（定員：1,200人）
入場者数：562人

コンサート当日に楽器を持ち寄ってメンバーからのワークショップを受講し、コンサート最後にステージで一緒に演奏する参加型コンサートを開催（参加者60人）。アクティビティでBBBBから招待券を渡した子どもたちが親兄弟、祖父母を誘い来場しました（当日券販売が一般113枚、中高校生7枚、整理券21枚）。コンサートではBBBBからアクティビティの様子や市内の観光名所の話題もあり、来場者とのコミュニケーションが図れるプログラムでした。最後の合同演奏は、アクティビティ受講者が飛入り参加するなど大人数でステージや会場を練り歩き、盛り上がりました。



① 応募の動機・事業のねらい

当市では、2017年3月に策定した関市文化振興計画（計画期間10年）において、重点プロジェクトの一つとして、「アウトリーチ・ワークショップの充実」を掲げています。以前はアウトリーチなど教育普及事業は行っていませんでしたが、一昨年アウトリーチフォーラム事業、昨年の公共ホール音楽活性化事業を実施し、子どもたちなど芸術文化に出会う機会のない市民に直接働きかけることで、文化振興事業の認識を改め、その効果を多くの人に理解いただきたいという現場の思いが強くなり、事業の継続に向けて、経験を積み、学びたいというねらいがありました。

② 企画のポイント

今後の事業継続を大事に考え、昨年、一昨年に続き、子供たちへの企画である学校へのアウトリーチとともに、保育園園児や支援学校の児童生徒にも対象を広げて、実施しました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・教育現場における要望（対象者の人数）とアウトリーチを活用した文化振興としての取り組みの受け止め方。
- ・当市ではジャズやクラシックは認知度が低く、敷居が高いイメージもあり、ニューオリンズスタイルのジャズブラスバンドと宣伝しても、コンサートチケットの売上げが伸び悩んでいました。"

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・対象者の人数の問題は、アクティビティ先の事業認知度、理解度を高めていくことが先決となるため、当事業の主旨を繰り返し話をしました。また、アーティストの好意により実現できたことではありますが、小学校では、お昼休みの時間を利用し、児童全員を対象に約10分間のランチタイムコンサートを体育館で行いました。アクティビティを受けられない子どもたちにとって突発的なミニコンサートは楽しさともっと音楽を体感したい余韻を残し、会館コンサートへの誘いへとつなげました。

⑤ 事業を実施しての成果

アーティストのプロモーション動画、音源をアクティビティ先に事前に届けるとともに保育園でのコラボ曲練習風景を動画に収め、園児たちの動画メッセージとともにアーティストへ渡しました。保育園児たち、先生にとってアウトリーチへの期待やアーティストへの思いが高まる要因となり、事前のコミュニケーションとして役立ちました。アーティストと一緒に告知のための新聞社訪問、昼食会場となったお店でのPRにより、SNSで取り上げてもらうことができ、地域の人をまきこんで、本事業そしてコンサートの宣伝ができたことは今後の取り組みでも必要と感じました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

関市文化会館の事業として、当日現場（学校・保育園）で子どもたちへの説明など会館主導で行うことが文化会館を身近に感じるものであることに改めて気づかされました。アクティビティ先との調整について、口頭のみでの調整は互いに確認不足となり、当日細かなことでも行き違いが生じるため、文書での確認が必要であると感じました。また、アクティビティ先の環境や体制を早い段階で確認しつつ、アーティストの個性を活かせる調整が出来たら、効果もより上がると思いました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

保育園や特別支援学校へのアクティビティは初めてでしたが、コンサート当日、園児や児童が家族や友人を誘ってきてくれました。彼らが生の音楽を体験し感動したことで、先生や保護者の方へも伝播し、文化会館のコンサートに来てくれたことをうれしく感じました。アーティストと共に訪れたお店や市民との出会いがPRにつながり、アクティビティで直に本物の芸術に触れた感動がコンサートへつながることとホールの外に出ていくことの大切さを改めて感じました。

岐阜県関市は、一昨年に岐阜県が実施したアウトリーチフォーラム事業でアウトリーチ活動を経験し、芸術文化に出会う機会の少ない市民に直接働きかける活動の重要性を認識され、昨年度はおんかつ事業を実施された。これらの活動から関市文化振興計画を教育委員会文化課主導にて策定され、重点プロジェクトの一つとして取り組む3度目としておんかつ発展継続事業が今年実施された。

昨年度のおんかつの企画ポイントでは、アウトリーチ先の選定にあたって、様々な対象先の中から今後の事業計画を踏まえ方向性を一つに絞り、今後の事業計画を大事に考えるとして、子ども達へのアウトリーチに舵を切り、中学校三校に加え、学校関係へのアウトリーチ展開には欠かせないキーパーソンを発掘する狙いとして校長会へのアウトリーチを展開した。その結果、昨年度の課題では、教育現場の要望と、文化振興を狙いとする文化課の方針をどのように擦り合せてゆくか、という点が課題として残った。そして今年、この方針は今年も継続され、昨年実施出来なかった小学校を始めとして、保育園、特別支援学校へと対象を拡大した事は、今後の取組みに対する文化課の意欲の表れでもあろう。昨年度の課題については、効果的な特効薬は無いが、受け入れ先との度重なる協議と、アウトリーチを体験いただく事によって理解を深めて頂くという、地道ではあるが確実な手法により、受入先との信頼ある関係作りを構築してゆく事が今後の展開に向けても重要ではないかと感じた。

昨年春に改正された文化芸術基本法、そして今年3月に閣議決定された文化芸術推進基本計画では、新・文化庁への組織改編に伴い、従来文科省の所管であった芸術教育行政が文化庁へ移管される事になった。現在までの教育機関へのアウトリーチ活動は、現場の教員や学校長等の理解のもとで実施してきた学校教育カリキュラムには組み込まれない活動であり、いわば教育現場に負担を強いる面もあったのは事実であろう。今後は、プロのアーティストが学校を訪れて実施するアウトリーチやワークショップ活動が、正規の芸術教育のカリキュラムとして組み込まれる事になれば、様々な課題に対して協議が必要ではあるが、受け入れる現場の方々にも一定の理解が生まれる事を期待したいところである。

さて、私が拝見したアウトリーチは桜ヶ丘小学校での午後の枠。午前中にも同様に同校にて実施しているが、ここでは学校の昼休みに対象児童以外の全校対象とした10分程度のランチタイムコンサートが体育館にて実施された。これは、アウトリーチ対象外の子ども達へのプレゼントとして企画されたもので、アーティストの提案によるものと伺った。BBBBのノリの良い軽快でリズムカルな音楽に、体育館に駆けつけるノリノリの子ども達、濃密な10分の中にコンサートの雰囲気が集約され、コンサートのアピールにも効果のあった取組みではあるが、これは楽器の特性やアーティストの理解等、全てのアーティストが対応できるものでは無い事から、今後も継続して取り組むには更なる協議が必要であろうと感じた。

昨年度はチューバのソロによる企画であった。都心部でもなかなか機会の少ないチューバのソロリサイタルと言う点で、券売には苦労もあったと伺った。今年の派遣アーティストはBBBB、7名のブラスバンドだ。しかしながらジャズもクラシックも一般には敷居が高いとの認識のようで、今年も苦労されたようだが、コンサートには様々な仕掛けが功を奏したようで、一定数の入場者だったように思う。長尾さんご自身も市民吹奏楽団のトロンボーン奏者として活動している事もあり、年々来場者の幅が広がってきているように感じた。最終日のコンサートでは、BBBBならでもと言える企画として、楽器を持参してくれば、コンサートの最後にアーティストと一緒に「聖者の行進」を演奏するというもので、その為に、コンサート開演前にはワークショップが実施された。ワークショップ参加者は主として子ども達ばかりかと思いきや、良い意味で予想が裏切られ、楽器を愛好している大人達が、とても楽しそうに笑顔で参加している光景は、今後のアウトリーチ活動の計画に向けたヒントがあるように思った。尚、昨年度は西脇さんと二人三脚で取り組まれたおんかつが、今年は西脇様はお休みされており長尾様一人

で孤軍奮闘されていた。発展継続事業はおんかつに対してアウトリーチ回数が倍になり開催日数も必然と長丁場となる。アウトリーチの取組みを継続する為にも次年度の取組みに向けてはその点の人的な不足についても是非一考いただきたい所である。

実施団体：九重町教育委員会

実施時期：平成29年9月21日(木)～9月23日(土)、平成30年3月15日(木)～3月17日(土)

出演アーティスト：BLACK BOTTOM BRASS BAND (ブラスバンド) Quatuor B (サクソフォン四重奏)

アクティビティ

タイトル：音楽で地域を繋ぐコンサート

出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND

期 日：平成29年9月21日(木) 10:50～11:50

会 場：南山田小学校 体育館

参加者：全校 77人

陽気な関西弁のトークと楽しい楽器紹介で、たちまち子ども達の心をつかんでBBワールドに引き込んでくれた。子ども達は手を伸ばせば触れられる距離で演奏される音楽を体中で楽しんでいた。その感動を自由に表現していいとアーティストから伝えられると、ほとんど全員が体育館中を走り回り、アーティスト、コーディネーター共に初めての体験だったと驚いていた。



タイトル：音楽で地域を繋ぐコンサート

出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND

期 日：平成29年9月21日(木) 16:30～18:30

会 場：大分県立玖珠美山高校 音楽室

参加者：高校生吹奏楽部 22人

音を楽しむワークショップ。普段とは違う音楽との向き合い方を身体の力の抜き方や音の感じ取り方を感覚的にわかりやすい表現で学生たちに伝えてくれた。



タイトル：音楽で地域を繋ぐコンサート

出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND

期 日：平成29年9月22日(金) 10:00～10:30

会 場：九重町立みつばこども園 ホール

参加者：5歳児 (結果的に全園児)

リハーサルの時からその場を離れない3、4歳児。それを見た担任の先生がホールの外から園児にも聞かせたいと園長に直談判。園内に響き渡る楽しい音楽につられて、最終的には0歳児から5歳児までの全園児がホールとその周りに集まって音楽を楽しんだ。



タイトル：音楽で地域を繋ぐコンサート
出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND
期 日：平成29年9月22日（金） 16：30～18：00
会 場：九重町立このえ緑陽中学校 音楽室
参加者：中学生吹奏楽部 23人

音を楽しむワークショップ。普段とは違う音楽との向き合い方を身体の力の抜き方や音の感じ取り方を感覚的にわかりやすい表現で学生たちに伝えてくれた。若干、高校生よりも自然に体験できていたように感じた。



タイトル：音楽で地域を繋ぐコンサート
出演者：Quatuor B
期 日：平成30年3月15日（木） 10：30～11：30
会 場：淮園小学校 多目的室
参加者：全校 39人

卒業式を前に全校を対象としたミニコンサートを行った。演奏した「旅立ちの日に」は6年生にとって思い出に残る贈り物となった。感想発表では10名以上の児童から自分なりの想いをアーティストに伝えてくれた。



タイトル：音楽で地域を繋ぐコンサート
出演者：Quatuor B
期 日：平成30年3月15日（木） 16：00～17：00
会 場：九重町立このえ緑陽中学校 音楽室
参加者：中学生吹奏楽部 23人

ミニコンサート、本公演での共演を見越したワークショップと盛りだくさんの内容で生徒たちもアーティストとの時間を楽しむことができていた。



タイトル：音楽で地域を繋ぐコンサート
出演者：Quatuor B
期 日：平成30年3月16日（金） 11：00～12：00
会 場：介護老人保健施設ケアポート湊和 食堂
参加者：高齢者 34人

車いすやベッドで聞く聴衆もいる中、高齢者が若かった頃の曲などを中心に演奏してくれたことで、手拍子や小さく口ずさむ声が聞こえてきた。施設の職員からも普段は滅多に笑わない利用者がにこにこして音楽を楽しんでいたことに驚いたとの声をいただいた。



タイトル：音楽で地域を繋ぐコンサート

出演者：Quatuor B

期 日：平成30年3月16日（金） 15：00～16：00

会 場：飯田公民館 ホール

参加者：一般住民 21人

地域の公民館に若手のグループ「タナー」のメンバーに集まってもらい、ミニコンサートを開催。メンバーは子育て世代の父母が多く、乳幼児や小学生を連れての参加が多かった。こういった世代へのアプローチが浸透していくことで芸術文化への理解と興味が深まっていくことを目指している。

コンサート

タイトル：ブラックボトムブラスバンド コンサート

出演者：BLACK BOTTOM BRASS BAND

期 日：平成29年9月23日（土祝） 14：00開演

会 場：九重文化センター ホール（定員：407人）

入場者数：184人

玖珠美山高校、ここのえ緑陽中学校、地域の音楽愛好家との共演を行い、会場が一体になるライブのようなコンサートになった。参加者、観客共に音楽を心から楽しむことができた。

タイトル：クワチュール・ベー サクソフォン四重奏コンサート

出演者：Quatuor B

期 日：平成30年3月17日（土） 14：00開演

会 場：九重文化センター ホール（定員：407人）

入場者数：169人

ここのえ緑陽中学校、地域の音楽愛好家との共演をプレコンサートとして行った。本公演ではクラシックの第一部でしっかりと聞かせてくれ、第二部で子ども達にもなじみやすい音楽を演奏してくれた。途中には一本の楽器を三人で演奏するなど視覚的要素でも楽しませてくれた。



① 応募の動機・事業のねらい

地域住民に生の音楽が届くような環境づくりのため。

② 企画のポイント

次世代を担う子ども達へアーティストの音楽を身近に感じてもらうことはもちろん、子ども達の親世代にも生の音楽を楽しむ経験をしてもらうことで、芸術文化を基礎とした地域づくりに目を向けてもらう契機とした。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

学校現場との調整、壮年層の集客。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

教育委員会の担当部署との協議、地域団体への協力依頼。

⑤ 事業を実施しての成果

総じて、アーティストとふれあい、音楽を楽しんだ方々からは好評を得た。また、子ども達にとって様々な感性に触れる貴重なきっかけを提供することができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

継続的に集客が課題。なかなか欲している層に情報が行き届かない状況にある。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アーティストの演奏を心から楽しむ観客の笑顔を見ながら感じたことは、物理的な場としての「ホール」ではあるが、町に暮らす人々にとって文化の拠点であると認識・活用してもらうことで精神的にも大切なシンボルになり得るのかもしれないということ。そして、そのためには目的をはっきりさせて繰り返し事業を提供していくことが必要なのだということである。

アートプロジェクトのたまご

チーフコーディネーター 小澤 櫻作

まちづくりを目指した“アートプロジェクト”を創りたい

これは、昨年3月に行った事前打ち合わせで事業担当の後藤さんが語ってくれた思いです。この熱のこもった一言から事業がスタートしました。

ホール運営者（…）ならではの視点

後藤さんは、これまでの数年間のホール運営のなかで、「普通に自主事業を行っているだけだと、ホールに来る人、ホールを利用する人達は固定されてしまう」、「事業の多様化を図りたいが、集客面を考えると簡単には前に進めない」など、ホール運営の難しさを痛感されていて、私自身も同じホールの運営者として共感することが多かった。

—アウトリーチを活用して、観客の拡大を狙いたい— 事業実施に向けた1回目の打合せでは、クラシック音楽ファン層の拡大を狙い、小学校アウトリーチや地域でのコンサート・ワークショップなどを通じて、まずは、この町のなかで新たに観客になってくれる人がどの程度居るのか、町のリサーチをしていくプロジェクトから始めていくことから検討しました。

この計画で決まり掛けたとき、簡単な会話のなかから担当者としての興味がクラシック音楽だけでないことに気が付きました。しかし、安易にジャンルを多様化させると観客拡大のための計画がぼやけてしまう恐れもあり、慎重に再検討を始めていきました。

まちづくりを目指したアートプロジェクトを創りたい

再検討のなかでは、ただ単にジャンルを変えることにこだわっているのではなく、事業を通じて、まちづくりを目指したいという思いの方が強いことが確認でき、まちづくりのためには将来的には演劇やダンスも視野に入れたアーティスト・イン・レジデンス・スタイルによるアートプロジェクトが良いのではないかと話し合いながら、徐々に企画が決まっていきました。

協力者と目的と成功体験を共有

その後、私は9月のプログラムに参加させていただきました。今回、成功のイメージを持ちながら企画・準備したことによって、視野が広がり、「参加」「体験」「協働」など活動の要素が多様化し、加えて、アクティビティとコンサートが一体的していく企画を描けたことによって、企画意図やねらいが明確に伝わるプロジェクトになったのではないかと感じました。また、参加してくださった方々やご協力をいただいた方々の表情や感想を見ても「趣旨に賛同する」「目的・目標を共有する」「顔が見える」といった一体感と熱意を感じることができました。

少しずつであったとしても、こうした目標・体験の共有と信頼関係を積み上げていけば、いつか町に根付いたアートプロジェクトへと大きく成長していくのではないかと。そんなことを思わせてくれる事業になりました。

第3部
平成29年度公共ホール
音楽活性化事業
コーディネーターレポート

アウトリーチ活動の先に見えること ～ 公共ホールの持続可能性～

1. 持続可能なホール運営とは

皆さんもご存じだと思いますが、アウトリーチは収入がありませんよね。しかも「アウトリーチをすれば助成金を獲得できる」という時代は残念ながら終わってしまいました。アウトリーチ自体は、地域にとっても、ホールにとっても、とても“イイコト”ですが、「継続はしていきたいが現実的には厳しい」というホールは多いと思います。

近年、公共ホールに期待されている役割は多様化しています。一方で、指定管理者制度などの影響もあり“ホール運営の効率化”は厳しく求められるようになりました。すなわち、20年後もその存在が求められるホール（持続可能なホール運営）を達成するためには「社会的役割」と「収支バランスの取れた運営」を同時に達成しなくてはならない。ということになります。果たして、そんなことは可能なのだろうか？と悩んでいる方は多いのではないのでしょうか？

2. ホールがアウトリーチに取り組む理由

皆様のホールがアウトリーチに取り組む理由は何でしょうか。

もちろん、アウトリーチに取り組む理由は様々です。大都市の大規模ホールがアウトリーチに取り組む理由と小さな町の小さなホールが取り組む理由は違って当然ですし、私自身、多種多様な「理由」があった方が楽しいと思っています。

90年代後半。公共ホールでの音楽のアウトリーチが始まったキッカケのひとつに、ホールでクラシック音楽のコンサートを開催しても観客が全然来てくれない。「じゃあ、アウトリーチという手法で直接届けて、音楽の良さを分かってもらおう」という発想があり、その結果「子どもたちが親の手を引っ張って来てくれた」や「音楽に興味がなかった地域の人たちも集まってくれた」など、想像以上の効果が表れたことで一気に全国へと広がっていきました。その後、地域や教育、産業などとの連携や効果などにも注目が集まり様々なプログラムが開発されていきました。また、ここ数年間では「地元アーティストのためのアウトリーチ研修」というキーワードも全国へと広がっています。

そうしたなか、アウトリーチに取り組んでいく過程において、いつの間にかアウトリーチとホール運営が別の物になっていないのでしょうか？ アウトリーチをすることが目的になっていないのでしょうか？ 加えて言うと、アウトリーチとコンサートを有機的に繋ぎ合わせる事が出来ているのでしょうか？ もしくは、繋ぎ合わせるための工夫、アイデア、努力は行われているのでしょうか？ もしかしたら再点検が必要かもしれません。

3. サイレントパトロン世代が実感を求めている。

2000年代に入り、「サイレントパトロン」という考え方が提唱され、アウトリーチが全国に広がる大きな要因となりました。私自身、ホール運営者として、当時も今も、この「サイレントパトロン」という考え方はとても有効的だと思っていますが、一方で、それから10数年の時間が経ち、情報化社会と体験型消費が進むなか、あの時の「サイレントパトロン世代」が、いま、実感を求めているように感じています。そうしたことから、これからのアウトリーチでは「活動の多様化」、「参加者の多様化」、「広報の多様化・充実」そして「より多くの人たちを巻き込んでいくこと」が重要なキーワードになってくると

考えています。

4. 99%へのビジネスチャンス

ホール運営者として、自主事業を行っている主催者として、舞台人として、アウトリーチを考えて見
てはどうでしょうか？

ホール運営者として、まちとホールが共に元気になっていきたいと願います。主催者として、コンサート
に多くの観客が来てほしいと願います。そして、舞台人として、クラシック音楽を心から楽しんでくれ
る観客を増やしたいと願っています。

一般的なアウトリーチは、人口の1%程度と言われる本格的なクラシック音楽ファンのために行う
企画より、残りの99%の「クラシック音楽には、あまり興味がない」という方々に届ける企画の方が多
いと思います。

これを、人口の99%へのビジネスチャンスと考えれば、正直、入場料収入は、まだまだ、これからも
成長が期待できる分野ではないでしょうか？

- アウトリーチとホール運営を有機的に結び付ける - これからは、こうした考え方とその手法に注目
が集まってくるのではないかと考えています。

5. 持続可能なホール運営の実現に向けて

アウトリーチは急速に発展を遂げました。社会包摂、アウトリーチの手法開発等など、『公共ホール
の社会的役割』というキーワードは、これからも様々なジャンルと繋がりますます発展していくと思
います。一方で、参加者の多様化、活動の可視化、観客育成、ファンドレイジング（意識改革）は後手
になっていないでしょうか？アウトリーチが全国に広がり、アートマネジメント力は成長した(?)のかも
しれませんが、ホール運営力は、まだまだこれからだと感じています。

ホール職員の育成

- 発展したアウトリーチから生れた成果をホール運営に反映させる力 -

持続可能なホール運営を実現するためには、アートマネジメント力だけでなく、ホール運営力を見据
えた職員育成が重要になってくるのではないのでしょうか？

コンサートの制作について

おんかつ事業では、アウトリーチとコンサートがセットとなって、車の両輪のように有機的に連携して実施される事を理想としています。しかしながら、アウトリーチはホールから出向いて行なう事が多く、実施先についても様々なアイデア等が出され、その実施にもおのずと手間がかかる反面、コンサートについては、つついアーティストにお任せ的な意識になってしまうホールが多く散見されます。今年の全体研修会では、実施ホールの方から何故コンサートを実施しなければならないのか、アウトリーチだけではダメなのか、と言う意見が出されました。細かな説明は紙面の都合で省略しますが、まずこの事業を実施するのは公共ホールであり、アウトリーチのみを実施するのであれば、その成果は何処に帰依するのか、公共ホールが実施する事業である事を改めて見直していただきたいと思います。つまり、アウトリーチとコンサートは「有機的に連携」と言った通り、「アウトリーチ」も「コンサート」もそれぞれが単独で実施される事なく「連携」していなければ効果が無いのです。「アウトリーチ」はそれのみが単独で終わる事なく「コンサート」に向けての有効な宣伝を担っている事、又、「コンサート」を成功させる様々な要素をアウトリーチに仕込む事によって両者を切り離せないものにする事がおんかつを進めていく上で一番の重要なポイントになってくるのです。

さて、ホールでの本格的なコンサート、おんかつのもう一方の主役であるアーティストにとっては、アウトリーチの先にある「晴れの舞台」だと言う事をご存知でしょうか。様々な環境に出向いて演奏するアウトリーチに対し、ホールコンサートは、楽器を演奏する為に整備された空間で、日々の研鑽の成果を存分に発揮する事が出来る物理的環境が整っており、アーティストにとっては、ホールでのコンサートを聴いてもらう為にアウトリーチを実施していると言っても過言ではありません。つまりコンサートはアウトリーチの先にあるご褒美でもあるのです。又、観客にとっても、クラシック音楽の繊細な響きや、PAを介さない生の豊かな響きを体感できる理想的な環境でもあるのです。

そのコンサート制作、ホールや演奏団体、事務所等、制作する立場によって手法は様々ですが、今回はおんかつ事業にてホールコンサートを実施する上で、心がけておきたいポイントを何点かピックアップしてみました。

まず、コンサートに向けての大まかな業務は以下の三つに別ける事が出来ます。

- 1、公演内容の企画と制作（企画立案）
- 2、広報宣伝の計画と管理（広報宣伝）
- 3、リハーサルや本番の実施と進行管理（本番実施）

簡単にコンサート制作の手順を整理すると、企画立案～広報宣伝～実施です。この手順は殆どのイベント事にも共通する事ですが、演奏家等の実演家に関わる舞台制作（生身の人間が舞台上で演じたり奏でたりする芸術＝音楽や演劇）では、3の「リハーサルや本番の実施と進行管理」が一番重要になってくる事をお忘れなく。

1、公演内容の企画と制作（企画立案）

- ・出演者の選定と企画方針の決定～内容の構築（タイトル・曲目等の構成・入場料金等の決定）

企画はコンサートの根幹を構成する一番重要な要素です。おんかつの場合、まずはアーティストの選定です。その際アーティストの個性や特徴を見極める事がポイントです。ただ「このアーティストに出て欲しい」ではなく、より具体的に「このアーティストに〇〇をして欲しい」といった内容が重要です。〇〇の部分が実は企画のポイントであり、ただ出て欲しいでは、企画ではなく調整でしかありません。

ホールや地域の特性とアーティストの個性や特徴を企画にどう活かすか、コンサートの企画を通じてホールの個性や方向性をアピールする事はホールの発する重要なメッセージなのです。

2、広報宣伝の計画と管理（広報宣伝）

- ・プレスリリースの作成と配布～チラシやチケット等の作成

おんかつ事業の特徴はコンサートの前にアウトリーチが実施される事、つまりアーティストが地域に滞在しているという点です。これを最大限有効活用する事がポイントです。よくある事例ですと、実際のアウトリーチにメディアの取材を計画したり、アーティストへのインタビューを通じてコンサートへの効果的な宣伝に繋げる等、手法は様々ですが、皆さんアウトリーチの内容や、アーティストをうまく宣伝活動に取り入れています。

又、アウトリーチ参加者は一番近くにいる観客潜在層なのです。チラシの配り方ひとつ取っても、アウトリーチ参加時にアーティストから手渡される等、些細な事でも参加者には特別感を醸し出す効果的な仕掛けなのです。つまり、アウトリーチ参加者に対しての広報はコンサートに聴きにきたくなるような仕掛けをアーティストと共に仕込む事が重要です。

昨今SNSによる情報発信がクラシック界でも日常化していますが、コンサートの魅了を伝える重要なツールとして、チラシは未だに欠かせない重要な存在です。コンサートの内容を解り易く魅力的に見せるようにタイトルやコピーを始めデザイン等も関係者間で意見交換をする等して、単に内容を伝えるだけのツール以上にホールから発信するアート作品であるとの意識が重要です。

おんかつの場合は、コンサートの内容だけではなく、アウトリーチを実施する事も是非チラシに組み込んでいただきたいと思います。つまり、ホールがこの事業を通じて地域に何を発信したいのか、直接的ではない間接的なメッセージが地域住民に効果的に伝わるような工夫が出来れば理想的です。

3、リハーサルや本番の実施と進行管理（本番実施）

- ・リハーサルから本番までの実施～スケジュール調整と管理～舞台制作の準備と実施

クラシックコンサートの特徴として、ホールも楽器であると思って下さい。PA機器を介さないジャンルの音楽ですから、楽器のコンディションと共に、その楽器がホールに馴染む為に、又、ホール毎に異なる響きの個性を、観客にとって最良の響きを追求する為に、ホールでの練習〔音作り〕は制作過程の中で非常に重要な地位を占めます。

ホールでの練習を経て迎えるのがリハーサルです。一般的なりハーサルは、ステージマネージャーや舞台監督等を立て、照明・音響も含めて、開演から終演までの流れを、全ての楽曲をフルで演奏し、本番がスムーズに進行する為の確認・調整を行なうものですが、おんかつの場合、アーティストが概ねソロ（独奏）或はデュオ（二重奏）やトリオ（三重奏）が多く、オーケストラやオペラ等の大人数では無い事から、比較的アーティストの意向に沿った形で実施される場合が多いです。これは、リハーサルと言うよりは本番の段取確認と言ったようなもので、アーティストと、ホール担当者、舞台スタッフの全員が揃った上で、アーティストの入出場の確認、演奏曲毎の転換確認、照明調光確認やMCの音響調整、と言った項目を確認するもので、演奏は各楽曲の冒頭や終わりのタイミングを確認する程度にとどめフルでは行なわないものです。何故このようなりハーサルなのかは実はクラシック音楽の特徴であり、本番の全てがアーティストにかかっていると言っても良いでしょう。演劇では監督の指示に沿い俳優のみならず照明や音響スタッフ等が、ひとつひとつの動きに合わせて皆で舞台を創り上げる芸術です。美術ではオープニングまでの準備や仕込みがその業務の殆どを占める展示催事であり舞台芸術ではありません

ん。これに対して、音楽における完全な準備とは、いかにアーティストが最高のコンディションで演奏する事ができるか、その環境を整える事が一番重要なのです。リハーサルを完璧に行なって本番にアーティストが疲れきっていても最高の演奏を届ける事は難しいでしょう。

リハーサルとは、お客様の為に行なうものです。最高の演奏を届ける為に、アーティストにとって負担を極力避け体力を温存させる事がポイントで、ホール技術者やスタッフの動作確認の為にこなっているわけではありません。

つまり、コンサートの成否とはお客様に最高の演奏を届ける事、その演奏を通じて、お客様とアーティストのキャッチボールが成されていれば、大成功と言えるでしょう。入場者数のみでは推し量れない音楽の本質の価値を生み出す為には、些細な準備かも知れませんが、ちょっとした気遣いや、ポイントを意識する事がとても重要なのです。

おんかつのアウトリーチ（アクティビティ）では、「3つの小（少人数・短時間・小さな会場）」を大切にしていることはご存知の通りですが、ここに、私はさらに「3つのW」を足したいと思う。

- Who（対象は誰か）
- Where（会場はどこか）
- Why（実施する目的は）

「当たり前のこと。なにをいまさら？」と思われるかもしれない。が、アウトリーチという事業（活動）がこれだけ世間に広まり、数多くの場所で実施されるようになった現状を考えるなら、実施する側が予めこの3つを明確に、より具体的に設定しておかなければならないと思う。それはまた、アウトリーチ実施後の事業の成果や効果を検証する際に役立つはずで、この検証作業が適正的確にできるかどうか、その事業の可能性に広がりを持たせられるどうかがかかっている。つまり、そのアウトリーチ活動が一度きりの活動（次のステップへとつなげていけない）になってしまうのか、それとも様々な展開の可能性を導きだせる原資になれるかどうかということである。

例えば「Who = 高齢者」の場合。高齢者といっても介護施設に入っている方なのか、自立して生活されていて、いろいろなグループに参加しているお元気な方々なのかによって、会場「Where」はもとより「Why」の実施目的も大きく変わってくる。その結果、アーティストが組み立てる内容も全く異なったものになる。介護施設に入所の方々が対象となるのであれば、ホールに来ていただくことは難しいから、こちらからお届けに伺うことを前提に考えなければならず、その介護施設では何ができるのか、施設ならではの実施内容（制限や、逆に利用できる要素など）の検討も行わなければならない。また、実施内容についても、音楽に接することでお元気になっていただくこと、いつもと少し違ったお洒落で新鮮な時間や体験を持っていただくことなど、入所者の皆さんが何を望んでおられるのか、どんな内容がふさわしいのか、施設スタッフの方々との連携も重要になってくる。アーティストがお伺いしてできること（または、アーティストにしかできないこと）は何かを話し合うことで、より効果のあるプログラムを提供することができる。その結果、アウトリーチを実施したことで、その後どのような効果（変化）があったかを検証することができる。

一方、同じ高齢者でも例えば今回秩父市のおんかつで実施したのはシルバー人材センターに登録しておられる、まだまだ「現役」の方々。この場合、目的も内容も全く違ったものになる。お勤めをリタイアされた後も様々な形で他人や社会の役にたっているという自信とプライドと責任感を持ち、お元気に充実した生活を送っている方々には、アクティビティでクラシック音楽やアーティストと出会うことで新たな刺激や興味を感得実感していただくことができるし、この機会にホールの存在を知り、それをきっかけにして今後さらに視野を広げ、新しい体験や感動に出会える場としてのホールの存在と有用性を認識していただくことなど、その内容や効果はまた様々なものになる。

具体的には、秩父おんかつ担当者の最終的な目標は「「コンサートを聴きにいこう！」とおじいちゃんやおばあちゃんがお孫さんを誘って下さるようになる」ことだったが、その後実際にどれくらいの方々がホールに足を運んで下さることになったかを検証することでアクティビティの成果をはかることができる。

「Who・Where・Why」は全てに連動している。同じく秩父市おんかつのもう一つのアクティビティの例では、「Who = 市役所職員」、「Why = ホールの存在や活動を知ってもらおう」だったのだが、この「WhoとWhy」の部分をつきつめた結果、「Where」が当初はホールの舞台上だったのが、最終的

にはホールのロビーでの開催となった。そもそもこれまでコンサートに足を運んだことがない方たちにとっては、それまで縁のなかった建物に入り、ホール内部まで足を運ぶということ自体が大きなハードルになる。そこで、「ホールを知ってもらおう」のではなく、「ホールで体験できることを知ってもらおう」ことを最初のステップと考えた結果、ステージではなく、ロビーでの活動となった。そこなら扉一枚を抜けるだけですぐそこがステージとなり、「コンサート」というものに対する心理的な抵抗感を軽減できる。また、ロビーは全面ガラス張りで夕方暗くなってからの市役所の駐車場からはとてもよく見えたため、いつもは閉めてしまうブラインドも開けたままにして、仕事帰りでロビーに寄る時間のない方たちにも、何が行われているかを外から見えるようにするという工夫もした。

「Why」のユニークな例も紹介しておきたい。塩尻市おんかつで行われた図書館でのアクティビティなのだが、通常図書館でのアクティビティというと「図書館利用者にも音楽を聴く面白さを体験していただく」ことが目的となる場合が多い。塩尻市でももちろんそれは実施理由の1つではあったのだが、これ以上に重要な「Why = 実施目的」があった。それは、すでに様々な鑑賞・体験プログラムを提供していた図書館と、今後のホール事業においてもコラボレーションできるよう、図書館の職員の方々とつながりを深めるといったものだった。そのため、アクティビティの内容を検討する段階から図書館の方に加わっていただき、テーマや取り上げる本の選択、会場設定の方法やアクティビティに出演していただく朗読の方のご紹介など、さまざまな面で関わっていただいた。今回の取り組みを機に、次のステップとしてホールでコラボレーション企画の実施へとつなげていければと思う。

このように、より効果的なアウトリーチを組み立てるには、「3つのW」をとことんつきつめていくことが重要になってくる。但し、特に「Why」の部分をつきつめていくと、たった1回のアクティビティでは足りないということに、複数回のステップが必要であることに気付くことが多い。だからこそ、継続していくことが重要になってくるわけで、1回目のおんかつでは足りなかった点、あるいはフォローアップが必要な部分を実現するためにも、ぜひ支援事業や発展事業を活用して欲しいと願う所以である。

思いが思いとつながって、人との距離は近くなる

今年度に限ったことではないのだけれど、おんかつ終了後の後味の良さを味わえる時の共通の出来事として、関わってくださった方々との距離の変化が挙げられるように思うのです。もちろんその距離の変化は“近くなった”に限るのだけれど。

どの地域に行く時も変わらないこと、それは出会いがあるということ。出会いと言うと待ち望んでいた人に会えるようなイメージであるけれど、必ずしもすべての方が心開いて待っていてくださるわけではない。そのことで苦労されている担当者の方々も多くいらっしゃいます。

私はスマホの設定とかもう面倒くさくてややこしくて適当にいじってドツボにはまってしまうという典型的な機械音痴ですが、逆に言うと機械はいじらなければ現状維持というわかりやすい奴とも言えます。片や人は、元々合う合わないもあるだろうし、感情、体調等々刻々と変化するものによって揺れ動いたりもする。当たり前ですが、機械とは異なり常に同じ状態というのは無いに等しい。

ただ、たくさんの方々との出会いを通して思うことは、うまく交われないと感じる時には何かしら原因があるということです。その原因のひとつに自分の思いを伝えているか？ということが挙げられるかと思えます。

さて個別研修時、アクティビティ先の方々とお話をさせて頂く際、担当者自身の思いを事前に伝え、相手も理解してくださっている場合は、こちらがやろうとしていることと相手が求めていらっしゃるものととの交わる部分を見つけ出し、お互いが同じ方向を見て具体的な中身の部分をつめられるのですが、思いどころか事業の根本から説明を始めなければならない場合は、なかなか内容にまでは踏み込めず、お互いの出方を待つというような探り合いの状態で打ち合わせを終了するということがままあります。結果、アーティストにおまかせ状態でアクティビティプログラムを組む事になってしまいます。それでもアーティストはプログラム作りを行います、相手が見えなさすぎる状況ではアーティストの能力を発揮させてあげられません。

こんなことがありました。とある地域での子育て支援の所長さんとの打ち合わせの際、打合せ会場がドのつくアウェイ感で満ちていました。原因は所長さんの「何をしにくるの？」という声なき問いかけに答えられていなかったことにありました。「お母さんを孤独にしないために活動を行っている」という強い思いを持って活動をしておられる所長さんはじめ職員の方々に対して、それ以上の思いを持って臨まなければ、共に同じ方向を見据えて進む事が出来ないということの表れだったように思います。

また、肢体不自由の子ども達が通う養護学校では、こちらの「聴いてもらうだけではなく、アーティストと接することによって子どもたちの中に芽生えたものをどうにか表現してもらえる工夫を考えたい」という言動で、先生が事業の真意をつかんでくださり、具体的な子どもたちの様子、加えて個別研修後には子どもたちの活動の様子をビデオ撮影して送ってくださったりと、理想的な共同での組立を行う事が来ました。体が不自由なばかりに表現の手段が限られてしまっている子どもたちに対する先生方の満載の愛情の丈を知る事が出来、プログラム作りの具体的なヒントを頂けるきっかけとなりました。こちらの思いを伝える事によって相手の思いを引き出した事例になるかと思えます。

個別研修ではこのように、アーティストがプログラムを組む際に目指すものを集め、アーティストに報告します。アーティストはそれらを汲み取って、子育て支援のお母さんに対しては「お母さん同士がつながれる活動はできないか」とか、肢体不自由の子どもたちには「皮膚感覚のみで感じてもらえる活動はないか」とか、アクティビティ先で出会う人々に思いを巡らせて経験と知恵を絞り出しそのプログラムの実践に向けてイメージを形にしていきます。

思いと思いがつながることで人との距離は近くなっていくものだと実感します。お互いの思いを寄せ合うことで距離が近くなっていくのだと思うのです。

挑みましょう、思いを持って。

第4部

平成28-29年度公共ホール音楽活性化
アウトリーチフォーラム事業

1 事業趣旨

一般財団法人地域創造（以下「地域創造」という。）は、地域における芸術活動を担う人材の育成および環境づくりに寄与し、あわせて創造性豊かな地域づくりに資することを目的とし、都道府県等との共催により、公共ホール等を拠点とした、クラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する事業を実施する。

2 実施内容

(1) 実施団体

- ①対象団体（研修事業・総括公演プログラム事業）：（公財）愛知県文化振興事業団
- ②公演実施団体（市町村公演事業）：新城市、田原市、知立市、扶桑町、碧南市、豊川市

(2) 事業内容

対象団体は事業を2ヶ年で実施することとする。

①研修事業

ア) 研修プログラムⅠ（シンポジウム、セミナー等）

対象団体は、都道府県内の公共ホール職員、文化行政担当者および教育関係者等を対象として、アウトリーチや文化・芸術による地域づくりに関するシンポジウム、セミナー等を開催する。

イ) 研修プログラムⅡ（全体研修会）

対象団体は、実施団体に対して、市町村公演事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を開催する。

ウ) アウトリーチ研修

対象団体は地域創造と協力して、対象団体の職員および演奏家を対象として、アウトリーチによる地域交流に関する手法開発研修を実施する。

②総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

対象団体は、有料の総括的公演（ガラコンサート）を実施する。

③市町村公演事業

公演実施団体は、原則として4日間の連続した日程で次の事業を実施する。

- ア) 地域交流プログラム 学校や福祉施設でのアウトリーチ（ミニコンサート）等、地域との交流を図る事業。原則として6回（1日につき2回・3日間）実施する。
- イ) コンサート 公共ホール等において有料のクラシック音楽のコンサートを実施する。

3 事業実施に対する支援

(1) チーフコーディネーターの派遣

地域創造は、事業計画の策定・実施にあたり対象団体担当者のコーディネート能力の向上を図るため、また地域におけるアウトリーチ手法のノウハウ蓄積のため、地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

(2) コーディネーターの派遣

地域創造は、実践的なノウハウを習得する機会を提供するとともに事業の円滑な運営を図るために、企画制作の経験が豊富な専門家を派遣する。

(3) 講師の派遣

地域創造は、実践的なノウハウを提供できる企画制作の経験が豊富な講師等を、研修プログラムの実施時に派遣する。

4 経費負担

事業実施に伴う下記の経費については、地域創造が負担する。

①演奏家派遣経費

- ・事業参加に係る報酬（出演料、謝金等を含む）
- ・派遣に係る交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費（現地運搬費を除く）
- ・派遣に係る損害保険料

②研修事業・総括公演プログラム事業（ガラコンサート）負担金

対象団体が支出した研修事業及び総括公演プログラム事業（ガラコンサート）実施に係る経費（③の経費を除く）について、事業実施年度の2年間で50万円を限度として負担する。

③アウトリーチ研修経費

対象団体が支出したアウトリーチ研修実施に係る経費のうち、ピアノ調律費及び現地楽器運搬費について負担する。

④市町村公演事業負担金

実施団体が支出した公演事業実施に係る経費のうち、ピアノ調律費について、1団体につき15万円を限度として負担する。また、ピアノ調律費を除く経費について、1団体につき5万円を限度として負担する。

5 派遣アーティスト及び派遣コーディネーター

(1) 派遣アーティスト

木管五重奏（Les Vents Japonais）

川越あさみ（Cl）、山内信英（Fl）、久保一麻（Ob）、竹下未来菜（Fg）、加治佑子（Hr）

サクソフォン四重奏（Adam）

山下友教（S.Sax）、田口雄太（A.Sax）、野原シーサー朝宇（T.Sax）、奥野祐樹（B.Sax）

ピアノトリオ（Trio Minpia）

黒川実咲（Vc）、水野彰子（Pf）、新井貴盛（Vn）

(2) チーフコーディネーター

児玉真（（一財）地域創造プロデューサー）

(3) コーディネーター

根間安代（琉球交響楽団 クラリネット奏者）

YASSY（BLACK BOTTOM BRASS BAND トロンボーン&リーダー）

箕口一美（東京藝術大学 大学院国際芸術創造研究科 講師）

(4) アシスタントコーディネーター

丹羽梓（横浜国立大学 都市イノベーション学府博士課程前期）

奥田もも子（（公財）びわ湖ホール 音楽企画アドバイザー）

酒井雅代（東京藝術大学 大学院国際芸術創造研究科 教育研究助手）

6 事業概要

(1) 研修事業

①研修プログラム I（シンポジウム）

日時：平成28年5月17日（火）13：30～

会場：愛知県芸術劇場 大リハーサル室

内容：愛知県内の公共ホール職員、文化行政担当者等を対象者として、アウトリーチに関する理解を深めるシンポジウムを開催。

時間	内容
13:30～13:40	開会のあいさつ
13:40～15:40	シンポジウム タイトル:「アウトリーチで“子ども”が変わる!“地域”が変わる！」 (講師:中村透、吉本光宏、児玉真)
15:55～16:40	模擬アウトリーチ (実演講師: Franc木管五重奏団)
16:55～17:40	アーティスト・トークセッション (講師:中村透、児玉真、木管五重奏団フラン)
17:40～17:50	閉会のあいさつ

②研修プログラムⅡ 全体研修会

日 時:平成29年4月25日(火) 13:00～17:30

会 場:愛知芸術文化センター アートスペースEF

対象者:市町村公演事業担当者

内 容:市町村公演の担当者を対象者に、アウトリーチフォーラムに関する説明の後、アーティストを交え、個別打合せを実施。

時間	内容
13:00～13:15	主催・共催あいさつ
13:15～13:45	参加市町村ホールの紹介
13:45～14:45	アウトリーチフォーラム事業について(講師:児玉真)
15:00～15:30	事業説明・質疑応答
15:30～17:30	個別打合せ

③アウトリーチ研修

日 時:平成29年7月9日(日)から平成29年7月14日(金)

会 場:愛知県芸術劇場 大リハーサル室ほか

内 容:

日程	内容
7月9日(日)	開講式、個別研修
7月10日(月)	個別研修
7月11日(火)	個別研修
7月12日(水)	個別研修、ランスルー
7月13日(木)	◎アウトリーチ実施① 会場:東桜小学校 □Les Vents Japonais(レ・ヴァン・ジャポネ) 時間:10:40～11:25 / 対象者:4年生(50名) □Adam(アダム) 時間:11:35～12:20 / 対象者:5年生(45名) □Trio Minpia(トリオ・ミンピア) 時間:13:35～14:20 / 対象者:6年生(62名) ◎全体ミーティング

7月14日 (金)	◎アウトリーチ実施②	
	□ Les Vents Japonais (レ・ヴァン・ジャポネ)	
	11:45～12:30	会場：老松小学校 対象：6年1組 (27人)
	13:40～14:25	会場：老松小学校 対象：5年1組 (28人)
	□ Adam (アダム)	
	10:50～11:35	会場：明倫小学校 / 対象：5年1組、2組 (50人)
	13:35～14:20	会場：明倫小学校 / 対象：6年1組 (32人)
	□ Trio Minpia (トリオ・ミンピア)	
	11:30～12:15	会場：大須小学校 対象：6年1組 (34人)
	13:30～14:15	会場：大須小学校 対象：5年1組 (31人)
◎グループミーティング		
◎閉講式		

(2) 市町村公演事業

アーティスト：

Les Vents Japonais (レ・ヴァン・ジャポネ)



①新城市公演

主催	新城市	
期間	平成29年9月26日 (火)～30日 (土)	
◎アウトリーチ		
9月27日 (水)	10:40～11:30	会場：作手中学校 / 対象：3年生 (21人)
	13:40～14:25	会場：作手小学校 / 対象：1年生 (6人)、 2年生 (15人)
9月28日 (木)	10:40～11:30	会場：作手中学校 / 対象：2年生 (13人)
	13:40～14:25	会場：作手小学校 / 対象：3年生 (8人)、 4年生 (19人)
9月29日 (金)	10:40～11:30	会場：作手中学校 / 対象：1年生 (16人)
	13:40～14:25	会場：作手小学校 / 対象：5年生 (15人)、 6年生 (15人)
◎コンサート		
9月30日 (土)	14:00開演 会場：つくで交流館 (ホール) 入場者：165人	

②田原市公演

主催	田原市	
期間	平成29年10月24日 (火)～28日 (土)	
◎アウトリーチ		
10月25日 (水)	11:35～12:20	会場：田原中部小学校 / 対象：4年1組 (26人)
	13:55～14:40	会場：田原中部小学校 / 対象：4年2組 (28人)

10月26日(木)	9:35～10:20	会場：衣笠小学校 / 対象：4年2組 (31人)
	10:40～11:25	会場：衣笠小学校 / 対象：4年1組 (31人)
10月27日(金)	11:35～12:20	会場：童浦小学校 / 対象：4年1組 (38人)
	13:50～14:35	会場：童浦小学校 / 対象：4年2組 (36人)
◎コンサート		
10月28日(土)	14:00開演	会場：田原市田原文化会館 入場者：160人



アーティスト：Adam(アダム)

③知立市公演

主催	一般財団法人ちりゅう芸術創造協会	
期間	平成29年11月7日(火)～11日(土)	
◎アウトリーチ		
11月8日(水)	11:45～12:30	会場：猿渡小学校 / 対象：4年1組 (26人)
	13:55～14:40	会場：猿渡小学校 / 対象：4年2組 (25人)
11月9日(木)	9:20～9:55	会場：安城特別支援学校 / 対象：高等部2～3年 (38人)
	10:50～11:25	会場：安城特別支援学校 / 対象：中学部、 高等部1～3年 (28人)
10月10日(金)	10:10～10:55	会場：桜木幼稚園 / 対象：年長 (89名)
	13:45～14:30	会場：徳風保育園 / 対象：年長 (41名)
◎コンサート		
11月11日(土)	14:00開演	会場：知立市文化会館(パティオ池鯉鮒) 入場者：131人

④扶桑町公演

主催	扶桑町・扶桑町教育委員会	
期間	平成29年11月28日(火)～12月2日(土)	
◎アウトリーチ		
11月29日(水)	10:45～11:30	会場：山名小学校 / 対象：3年生 (50人)
	13:55～14:40	会場：山名小学校 / 対象：4年生 (38人)
11月30日(木)	10:45～11:30	会場：山名小学校 / 対象：6年1組 (27人)
	13:55～14:40	会場：山名小学校 / 対象：6年2組 (25人)
12月1日(金)	10:45～11:30	会場：山名小学校 / 対象：5年1組 (23人)
	13:55～14:40	会場：山名小学校 / 対象：5年2組 (22人)
◎コンサート		
12月2日(土)	14:00開演	会場：扶桑文化会館 入場者：316人

アーティスト：Trio Minpia（トリオ・ミンピア）



⑤碧南市公演

主催：	碧南市芸術文化ホール指定管理者 エリアワングループ	
期間：	平成30年1月16日（火）～20日（土）	
◎アウトリーチ		
1月17日（水）	10：50～11：35	会場：鷺塚小学校 / 対象：4年（71人）
	14：00～14：45	会場：鷺塚小学校 / 対象：4年（50人）
1月18日（木）	10：50～11：35	会場：西端小学校 / 対象：4年（78人）
	13：50～14：35	会場：日進小学校 / 対象：4年（64人）
1月19日（金）	10：50～11：35	会場：棚尾小学校 / 対象：4年（45人）
	13：55～14：40	会場：棚尾小学校 / 対象：4年（43人）
◎コンサート		
1月20日（土）	14：00開演 会場：碧南市芸術文化ホール 入場者：160人	

⑥豊川市公演

主催：	豊川市	
期間：	平成30年1月23日（火）～27日（土）	
◎アウトリーチ		
1月24日（水）	10：50～11：35	会場：代田小学校 / 対象：5年1組（33人）
	14：10～14：55	会場：代田小学校 / 対象：6年1組、2組（63人）
1月25日（木）	10：55～11：40	会場：千両小学校 / 対象：4年1組、 5年1組（36人）
	14：00～14：45	会場：一宮東部小学校 / 対象：6年1組（39人）
1月26日（金）	10：55～11：40	会場：牛久保小学校 / 対象：4年1組（33人）
	13：30～14：15	会場：牛久保小学校 / 対象：4年2組（31人）
◎コンサート		
1月27日（土）	15：00開演 会場：豊川市小坂井文化会館 入場者：223人	

(3) 総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

日時：平成30年2月17日（土）会場：三井住友海上 しらかわホール 入場者：253人

Les Vents Japonais (木管五重奏)

○山内 信英 (やまのうち のぶひで) —フルート—

東京音楽大学卒、同大学大学院(科目等履修)修了。大学在学中、オーディションに合格し東京音楽大学主催ソロ・室内楽演奏会に出演。サントリーホール主催レインボウ21デビューコンサートに出演。これまでにフルートを植村泰一・故齊藤賀雄・相澤政宏の各氏に師事。東京音楽大学助手を経て、現在はソロ・室内楽・オーケストラ・吹奏楽の分野で活動中。アンサンブル エステ、アムノルド フルートアンサンブル各メンバー。新潟ウインドオーケストラ常任指揮者。美幌町(北海道網走郡)観光物産大使。

○久保 一麻 (くぼ かずま) —オーボエ—

埼玉県立大宮光陵高等学校音楽科卒業後、洗足学園音楽大学音楽学部入学、優秀賞にて卒業。2011、2012年度特別選抜演奏者及び前田記念奨学生に認定。オーボエを井上恵子、辻功、和久井仁、青山聖樹の各氏に、室内楽を千葉直師、浅野高瑛、辻功、山岸博、酒井秀明の各氏に師事。ヤマハ新人演奏会第17回木管楽器部門に出演。これまでに首都圏のオーケストラを中心に客演し、神奈川フィルハーモニー管弦楽団では契約団員を務める。現在、洗足学園ニューフィルハーモニック管弦楽団団員、洗足学園音楽大学演奏補助要員、重本音楽事務所に所属。

○川越 あさみ (かわごえ あさみ) —クラリネット—

埼玉県立伊奈学園総合高等学校を経て、フェリス女学院大学卒業。
在学中より学内外での演奏活動始める。ヤマハ新人演奏会に出演。東京シンフォニエッタにて欧州公演、サントリーサマーフェスティバルを始めとする様々な公演、録音に参加。また、パリ音楽院教授、フィリップ・ペロー氏との共演など、室内楽での活動も行っている。Les Vents Japonais 主宰。

これまでにクラリネットを西澤春代、板倉康明の各氏に師事。ギィ・ドゥプリュ、ポール・メイエ、アレッサンドロ・カルボナーレ、アラン・ダミアンの各氏によるマスタークラスを受講。現在、東京シンフォニエッタ メンバー。

○竹下 未来菜 (たけした みきな) —ファゴット—

東京音楽大学卒業。桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程卒業。
第22回日本クラシック音楽コンクール大学女子の部第2位。小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト XIII、2015年・2017年セイジ・オザワ 松本フェスティバル子どものためのオペラに参加。
これまでにファゴットを早川邦宏、霧生吉秀、水谷上聡、井上俊次、オーケストラ・アカデミーにて岡本正之の各氏に師事。

○加治 佑子 (かじ ゆうこ) —ホルン—

埼玉県立伊奈学園総合高等学校を経て、東京音楽大学卒業。
在学中、東京音楽大学ソロ、室内楽定期演奏会出演。2007年霧島国際音楽祭に参加、同音楽祭演奏会出演。現在フリーランス奏者として、オーケストラをはじめ、室内楽、吹奏楽等でも演奏活動をする他、国内外で後進の指導も精力的に行っている。これまでにホルンを、曾根敦子、水野信行、山岸博、西條貴人、五十畑勉各氏に師事。また、マスタークラスにて、ジョナサン・リプトン、サボルチ・ゼンプレーニ各氏に師事。Peer Tone Ensemble メンバー。

Adam (サクソフォン四重奏)

○山下 友教 (やました ともゆき) —ソプラノサクソフォン—

神奈川県出身。昭和音楽大学を経て、同大学大学院修士課程修了。第7回横浜国際音楽コンクール第1位。第14回大阪国際音楽コンクール第1位。特別賞として、ジャーナリスト賞、アルソ出版社賞受賞等、受賞歴多数。2015年6月、国内最高峰の実力を持つクラシカル・サクソフォンの若手奏者たちによる集団「Tokyo Rock'n Sax」に加入し、2016年3月、1stアルバム『Permanent』をリリース。TV、ラジオや雑誌にも取り上げられるなど、注目を浴びている。これまでに、サクソフォンを武藤賢一郎、室内楽を武藤賢一郎、大森義基、榮村正吾、福本信太郎、G.プーレ、霧生吉秀、オーケストラ・スタディを有村純親、ピリオド演奏法を有田正広の各氏に師事。

○田口 雄太 (たぐち ゆうた) —アルトサクソフォン—

神奈川県出身。昭和音楽大学を経て、同大学器楽研究科を首席で修了。第19回浜松国際管楽器アカデミー&フェスティバルにて、選抜者によるプレミアム・コンサートに出演。東京都交響楽団、東京吹奏楽団をはじめとする在京オーケストラ、吹奏楽団の公演に参加。また、神奈川県内のスクールバンドや市民バンドの指導者、指揮者として吹奏楽指導に意欲的に関わり、「生徒の活動を献身的に支えた優れた外部指導者」として、2013年、神奈川県教育委員会より部活動インストラクター賞を受賞。サクソフォンを新井靖志、福本信太郎、松井宏幸、武藤賢一郎、O.マーフィー、室内楽を新井靖志、中川良平、福本信太郎、武藤賢一郎の各氏に師事。

○野原 シーサー 朝宇 (のはら しーさー ともたか) —テナーサクソフォン—

沖縄県出身。昭和音楽大学を経て、同大学研究科修了後、渡仏。セルジーポントワーズ地方音楽院を満場一致の一等賞、室内楽を満場一致の金賞を得て修了。2012年、地元沖縄にて演奏会を開催し、2015年には、ドルチェ楽器東京店アーティストサロンにてリサイタルを開催。同年、地元沖縄にて、屋良久美子氏とデュオリサイタルを開催し、いずれも好評を博す。ソロやアンサンブル、在京オーケストラや吹奏楽団のエキストラとして演奏活動やレコーディングに参加。現在、沖縄県立芸術大学非常勤講師。「Circle A Sax」メンバー。サクソフォンを屋良久美子、彦坂眞一郎、新井靖志、田村真寛、大森義基、榮村正吾、ジャン＝イブ・フルモー、室内楽を福本信太郎、松原孝政、マリリーズ・フルモー、アレクサンドル・スーヤの各氏に師事。

○奥野 祐樹 (おくの ゆうき) —バリトンサクソフォン—

神奈川県出身。昭和音楽大学卒業。卒業時に、読売新聞社主催の新人演奏会、同侪会湘南支部新人演奏会に出演。在学中より、佐渡裕氏監修の「富士山河口湖音楽祭」や、JTアートホール「期待の音大生によるアフタヌーンコンサート」など様々な演奏会に出演。現在も、各地でのアウトリーチやCM音楽のレコーディング等といった演奏活動をはじめ、作・編曲なども手掛けており、幅広い音楽活動を展開している。サクソフォンを大森義基、室内楽を榮村正吾、有村純親、松原孝政の各氏に師事。アレクサンドル・ドワジー氏、モーフィン・サクソフォン・カルテットによるマスタークラスを受講。

Trio Minpia (ピアノトリオ)

○水野 彰子 (みずの しょうこ) —ピアニ—

名古屋市出身。3歳からピアノを始める。愛知県立明和高等学校、東京藝術大学音楽学部を経て、同大学院修士課程音楽研究科を首席修了、同時に大学院アカンサス音楽賞を受賞。

徳永二男、三浦文彰らと共演、室内楽ピアニスト、声楽伴奏や新国立劇場合唱団の合唱伴奏ピアニストとして活動中。テレビ朝日「題名のない音楽会」、BS-TBS「日本名曲アルバム」にも出演。

ピアノを志賀紀子、アレクサンダー・セメツキー、西川秀人、江口玲に、室内楽を西谷牧人、有森博、小池郁江、迫昭嘉、東誠三、坂井千春、松原勝也の各氏に師事。

○新井 貴盛 (あらい たかもり) —ヴァイオリン—

名古屋市出身。南山高等学校を経て東京藝術大学音楽学部を首席で卒業。アカンサス音楽賞を受賞。米テンプル大学に奨学生として留学。現在東京藝術大学大学院博士課程在籍。

ソリストとして高関健、澤和樹、D.ボストック各氏指揮藝大フィルハーモニア、D.ヘイス氏指揮テンプル・シンフォニーオーケストラと共演。

2017年バルトーク国際ヴァイオリンコンクールセミファイナリスト、他入賞多数。

これまでに清水高師、エドワード・シュミーター、ヤン・ソンシク、エステル・ペレーニ、ピエール・アモイヤル、市川絵理子、宮島克実の各氏に師事。

○黒川 実咲 (くろかわ みさき) —チェロ—

名古屋市出身。愛知県立明和高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部卒業。

2015年ザルツブルク＝モーツァルト国際室内楽コンクール第1位、第67回全日本音楽コンクールチェロ部門大学の部第2位、第4回秋吉台音楽コンクール弦楽器部門第3位他、内外コンクールで入賞。

セイジ・オザワ松本フェスティバルの他、小澤征爾主宰のアカデミーやプロジェクトに参加。北九州、宮崎、ラヴェンナ、上海などの国際音楽祭に出演。カルテット奥志賀メンバー。

中島顕、倉田澄子、山崎伸子の各氏に師事。

《実施目的》

愛知県芸術劇場では、県内すべての子どもたちと劇場との“出会いの場”をつくり、舞台芸術に触れる機会を創出することを目的として「劇場と子ども7万人プロジェクト」を提唱し、平成27年度から学校単位で小・中学校の子どもたちを公演事業に招待している。今後、このプロジェクトを県内の市町村の劇場との連携して推し進め、子どもたちと劇場との“出会いの場”を拡大していく方策を探る手始めとして、公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業を実施した。

《市町村公演実施状況》

市町村公演は、すでにアウトリーチを継続的におこなっている知立市、碧南市、豊川市と、今回初めてアウトリーチをおこなう新城市、田原市、扶桑町の6つの市町で開催した。すでに実施している市町の中には、独自でおこなっているアウトリーチの検証の場とすることを目的として参加した劇場があった。また、初めて実施した市町の中には、今後のアウトリーチを実施する契機として参加した劇場があった。

《成果》

- ・県が「シンポジウムの開催」、「実施市町村の募集」、「アーティスト研修」、「アーティストとコーディネーターの派遣」をおこない、市町村が「アウトリーチとコンサートの実施」をおこなった。今後の県と市町村の連携を考える上で、ひとつのモデルケースとして参考となった。
- ・アーティストが各地に5日間滞在することによって、アーティストと地域との交流がぐっと深まり愛着が生まれた。また、アウトリーチが6回にわたり実施されたことにより、実践とフィードバックが繰り返しおこなわれプログラムが進化していった。短期間では成しえない様々な成果があった。
- ・ガラコンサートを名古屋市内の民間ホールで実施するなど、愛知県の特徴も取り入れることができた。
- ・これまでに当劇場とは連携のなかった新城市、田原市、扶桑町での実施が実現した。新城市とはフォーラム後に共催で演劇の台本を読むワークショップをつくで交流館にて実施するなど新たなつながりがうまれた。
- ・名古屋芸術大学と連携して、県内の音楽アウトリーチに関する実態調査を実施した。

《課題》

- ・県内にはアウトリーチを積極的に実施している劇場が多くあるため、今後そういった実施経験のある劇場と協同して、愛知県ならではの連携の仕組みを考えていきたい。
- ・愛知県芸術劇場がアーティストと地域を結ぶ役割としてさらに機能していくためには、事業実施を単発的におこなうだけでなく、各地域の現状を把握し長期的な視野で地域と関わり事業を位置づけて実施していく必要があると感じた。市町村のニーズにも耳を傾けながら、市町村が求めている環境をどのように整えていくかが引き続きの課題である。

アウトリーチフォーラム愛知をおえて

愛知県を中心とする中京圏は近年企画担当者の交流が盛んで個人的な要素が強いとしても地域のホールの役割を意識した情報交換もずいぶん行われている地域だという認識がある。また、音楽文化の社会基盤ともいえる音楽大学やオーケストラなどが活動していることから、団体だけではなくソロ活動をすすめる音楽家にとってもほかの地域に比べて可能性のある地域だと言うことが出来る。

アウトリーチのような地味な活動は単独では小さな影響しかもたらさないが地域のあちらこちらでの広がりを持ち仕組みが得意と大きな力になるような事業だといえるだろう。アーティストは活動の拠点から自治体の枠を自在に破って活動のエリアを広げる傾向にあることから、少し広域で活動の基盤を作っていくような仕組み作りが出来ると有効だと思う。その意味で、各自治体の会館がそれぞれアウトリーチ活動を行っているだけでなく、情報交換やノウハウの蓄積、向上などをともに意識するきっかけとして、このフォーラム事業が行われると良い、と思っていた。

今回そこに県の芸術劇場のような芸術に対する専門的な知見と人的なパワーのある団体が協働することで新しい流れが出来れば一番だと思う。過去においては事業そのものは上手くいっていたが、それが地域のコーディネーターを育成し活用する、というところまで繋がらないといううらみがあった事を考えると大きな意味があったと思う。

オーディションの結果今回参加したグループは、木管5重奏、サクソ4重奏、ピアノトリオの3つの団体である。うち一つは愛知に縁のあるメンバーで結成したピアノトリオ。この報告を読んでいただくとわかると思うが、アウトリーチという活動に臨むスタンスは、楽器の特質にもよると思うが3組がそれぞれ个性的でプログラムの作り方やアプローチの仕方も個性豊かだった。この違いは最初戸惑う部分もあったが、終わってみれば、この事業がアウトリーチ手法の開発という目的を含んでいることを考えると、刺激的だったといえるだろう。

地域プログラムで出かけた6つの市町村は、アウトリーチをすでに数多く行っている会館と殆ど取り上げていない会館にはっきり2分されたが、担当者の熱意はどこも高く、それが演奏家との関係作りでも熱い気持ちを持ってたことで強い絆を作れたフォーラムだったようにもう。県と市町村、アーティストと会館担当者の関係性が今後も維持されていくことを願うとともに、今回をきっかけに継続的な事業に発展して行ってくれることを願う。

最後に現場で考えたことをいくつか

1. 地域人材の活用はフォーラムが出来た頃からの課題だが、今回のようなノウハウを持った県立会館との協働の場合、コーディネート業務をどこまで地域の人材と一っしょにやっていくかを考えても良いだろうと思われた（サブコーディネーターとか）。
2. 同様にコンサート制作に強い団体の場合、ガラコンサートの企画制作はより県の会館のプロデューサー主導でやった方が良かったかもしれない。また、合同演奏は時間的配分（前後半のバランス）などから、行うケースが殆どだが、編曲の負担もあるので必要に応じて予算化をする方が良いかもしれない。
3. 今後、コーディネーターに少し若い世代の起用をより積極的に考えたらどうか（世代交代の意味もあるが、年齢差が大きくなりすぎると一緒に考えるよりも教えるにちかくなってしまう）

レ・ヴァン・ジャポネ木管五重奏は新城市公演が9月、田原市公演が10月と、最初のアウトリーチとコンサートが研修会を終えて2ヶ月後という厳しい日程から、早めに話し合いの場を設けてもらいました。

最初にメンバーとアウトリーチプログラムについて話し合ったのは5月。予め4月に、「レ・ヴァン・ジャポネとして何を子供達に伝えたいか？どんなアウトリーチがしたいか？」というコンセプトをメンバー内で話し合うようお願いしていました。

5月にメンバー全員と会って、問いの答えを聞くと、プログラムは動物の謝肉祭をメインとしたプログラム、「子供達、生徒さん達に音楽の何を伝えたいのか？」と改めて聞くと、「何かを感じて欲しい」との返答。

「何を伝えたいか？」この問いの真意がメンバーには中々伝わらないようでした。当然と言えば、当然なのですが……。聴き手にどのようにコンセプトを伝えるか、アーツマネジメント的な視点が日本の音楽教育に於いて加わったのがこの数年の動きで、音楽家の卵が演奏家として専門的な教育を受ける時、①楽器を奏でる身体的なアスリートとしての要素、②楽譜から音楽的な文脈をどう読み解き、自身が感じたフィーリングと共に表現するか？主にこの2点に集中して、日々研鑽を行っているのが通常だからです。メンバーは卒業後フリー奏者としてオーケストラやアンサンブルの学校公演などで演奏しており、その経験がモデルケースとして彼らの中に根付いているようでした。そのイメージから脱却するのが一番の課題であると彼らとの話し合いの中で感じました。

「フォーラム事業の研修会（通称キャンプ）は、結構大変ですよ」と関係者数名から事前に聞いていましたが、確かに密度の濃い1週間でした。結果として、最終的にはとても面白いアウトリーチのプログラムが出来上がり安堵しましたが、それにはメンバーの様々な試行錯誤がありました。

レ・ヴァン・ジャポネはアンサンブルを組んで2011年から活動しているとプロフィールには記載されていましたが、メンバーの交代があり、現メンバーでの活動はこのフォーラム事業が初めてでした。その為、お互いの距離感をはかりつつ、毎日12時間以上一緒に過ごし、練習したり、話し合ったりする中で、様々な意見の相違や、自分の感じていることを論理的に周りに伝えることが出来ないなどの葛藤も生まれていました。

研修会の最初の時点では、まだ「何を伝えたいか」という根本的なテーマが定まっていなかったが、全体のランスルーの前に、とりあえず、メンバーが考えてきたプログラムをチーフコーディネーターの児玉真氏や愛知県劇場館長の丹羽康雄氏などの関係者に披露して意見を頂く事が出来ました。特に丹羽館長からの「ありきたりで、楽しくない」と率直な感想がメンバーの心に響いたようで、やっと本当の意味で「何を伝えたいか」を明確にする作業が始まりました。

教師の経験を持つアシスタントコーディネーターの丹羽梓氏が、「もっと子供達と遊ぶ感覚で考えたら？」とアドバイスすると、リーダーの川越あさみ氏から「音、そのものを聴いてもらうようなものがしたい……」——みんなの中から答えが見つかった嬉しい瞬間でした。

それから木管五重奏のそれぞれの楽器の特色をひとつに絞って考える事を提案すると、メンバーからも次々とアイデアが生まれました。

基本的なアウトリーチプログラムは下記の通り。

1. イベール／木管五重奏のための3つの小品より第1曲

自己紹介～演奏家が生徒を教室の真ん中に取り囲む様に端に移動し、生徒も各々興味を持った楽器の前に移動してもらう

2. この楽器の得意なこと、なにに？

*一番高い音を出せる楽器、大きい音を出せる楽器など、対決して答え合わせ
(中学校はクイズ形式)

3. 山の音楽家じゅんばん協奏曲

*各楽器の音や特色を踏まえ、有名なメロディを聴いてもらう

4. モーツァルト／きらきら星変奏曲より

5. クルークハート／木管五重奏曲より第4楽章

アウトリーチの対象は小学1年生から中学3年生まで幅広かったのですが、試行錯誤した甲斐があり、それぞれの楽器の特色を対決して答え合わせする手法は、子供達の想像力を喚起し、各々が興味を持った演奏者や楽器を応援して盛り上がる名コーナーとなりました。またメンバーはその都度年齢を考慮、言葉や伝え方にも注意し、アクティビティ後には改善点を話し合い、微修正を加え毎回バージョンアップし、進化し続ける事が出来た事はとても良かったと思います。この丁寧な作業を繰り返した経験は、演奏家としてこれから生きていくと確信しています。

新城市でのコンサートは会場のついで交流館が木造の素敵な新しい建物から“木の音かほる木管五重奏 Les Vents Japonais コンサート”と題して開催されました。中学校での下見の時、先生方が小さい頃に使用していたペチカのお話を伺い、アンコールにアウトリーチの写真を背景に映しながらペチカを演奏しました。田原市では“しおさい音楽会～木管五重奏の響き～レ・ヴァン・ジャポネ～”と題し、しおさいメドレー（海にまつわる既存曲をメドレーとして演奏）をプログラミングするなど、両市に関わる曲をプログラムに取り入れる工夫も行いました。新城市、田原市共に担当者が熱心に取り組んで下さり、沢山のお客様にご来場して頂きました。河合芳明氏、平亘弘氏、前川孝子氏、小山沙織氏に感謝の意を表したいと思います。またレ・ヴァン・ジャポネのメンバーが関係者とも積極的にコミュニケーションを取り、アーティストとしても人柄もそれぞれ個性が光り、魅力的だった事が事業を成功に導いた要因になったと感じています。2月のガラコンサートでは特に合同演奏で、ミンピア、アダムとともに楽しいステージになりました。

最後に、チーフコーディネーターの児玉真氏、アシスタントコーディネーターの丹羽梓氏、地域創造の阿比留ひろみ氏、愛知県劇場の加藤愛氏には大変お世話になりました。ありがとうございました。

キャンプ初日、4人4色（赤・青・緑・黄）のカラフルなポロシャツを着て現れたアダム。彼らの気合いの入りように、この事業にかける思いの強さに、こちらの気持も楽しく高揚してまいりました。いよいよアダムとのプログラム創りが、始まります！

『アダムは何を伝えたいのか』

アダムの4人は、何を思っているのだろうか。

まずは、人柄も含めてそこを理解し、共感しながら進んで行きたい。

彼らの演奏を聴き、考えを聞き、思いを聞き、夢を聞き・・・

そこから出て来たキーワードを、書き出す事から始った。

ここから「なぜそう思うのか」をより深く、思いや言葉をよりシンプルにしていく。

もちろん言葉にならない思いもあるだろうし、思いを言葉にした奥の奥で初めて気づく事もあるだろう。

自分の中に知らない思いがまだまだあり、扉を開けるように進めていく！

この作業が、アウトリーチプログラムの核となり、子供達の心の扉を開けていく感覚をつかむヒントになるので、語り合う事、各自が自問自答していく事を大切にしたのである。

彼らの思いが見え始めると、伝えたい事が少しずつ・・・言葉になり始めた。

『アウトリーチでアダムは何を伝えられるのか』

子供達の中にどう飛び込み心の扉を開けるのか。

子供達の世界観を、大きく広がる為には。

今回、アダムと選んだのは、『音楽の色々な楽しいを、一緒に見つけよう！』という、いわゆる体験していくプログラムだ。

耳と目だけではなく想像をし、新しい発見をし、心と身体全身で楽しむ。

45分という短い時間の中で、彼らが『楽しい』を通して伝えたい事は、音楽の楽しさだけではなく「やさしさ」「勇気」「幸福」「自由」・・・、子供達がそれぞれの心の扉を開け、そこにあるものを体験する事だと思う。

このようなプログラム作りは、この3日間で完成というよりも、彼らの成長と共に進化するものであると考え、今の彼らの100%、いや120%を期待して、進めていった。

僕は、4人が遊ぶようにワクワクして進んでいけば、いいものが出来ると確信しており、

困惑しながらも、それすら遊ぶように楽しんでいた彼らは頼もしかった。

こうした中から生まれたのが、アダムのプログラムだ。

実際に行ったアウトリーチは、教室のあらゆる方向から入場するサプライズから始まり、ユーモアたっぷりのサックスクイズ。そして、アダム体操(彼らが開発した、身体をリラックスさせて音楽を聴く準備体操のようなもの)へ。体操後に演奏する「琉球幻想曲」は、波の音が聞こえ、まるで沖縄の海と空が目の前に広がるような錯覚すら覚える。ここから、音が360度から聴こえるを体感する「パッチワーク」。ここまでで色々な楽しいを体験して、「ニューシネマパラダイス」へ。叙情的な5分を超える長い曲にも関わらず、時間と共に音楽の世界に引き込まれていく。皆が集中して聴いている中、涙ぐむ児童も多数おり、心・身体が音楽で満たされていく様子は、後方で見ていてもはっきりわかる。

最後の楽しいは、「音楽のアトラクションへいってらっしゃい！」ではじまるディズニー音楽。児童のとびきりの笑顔に、今回のプログラムの一つの成果が見られた。

今回、アダムの皆と多くの時間を過ごして、語り合う事も多く。この事業を通して、彼らは変化した実感があるようだが、元々持っていたものが出て来たに過ぎず。自問自答していくうちに、何らかの扉が開き発見があったのだと思う。奥にはまだまだ扉があって、そこに可能性がある事を信じて開け進めてもらいたい。今後の彼らの活躍を大いに期待する。

10歳のこどもたちが、8分近くかかる初めて聞いた「クラシック音楽」を身じろぎもせず、集中を感じさせる眼差しで聞いている。場所は小学校の音楽室。スピーカーから聞こえる、小さな音楽室には納まらないサイズのオーケストラの録音ではなく、3人の音楽家がある場で演奏している生の音楽を聞いているのだ。

いつもはチョークの粉とホコリに埋もれているピアノのふたが取り払われ、たぶんこれまで端から端まで鳴ったことのないピアノの弦が全部震えている。知識としては知っていても、チェロとヴァイオリンというのは、こんな風にして音を響かせるのを目の当たりにしたことはない。

終わった瞬間のわずかな間と、「それがマナーです」と言われて仕方なくしているのではない、心からの拍手やため息が、45分の「今日の音楽の授業」を締めくくる。

今では、この国のあちこちで行われている音楽アウトリーチの、いつもの一場面だ…と思っている。そして、碧南市と豊川市で、この1月にいくつかの小学校で「普通に」起こったことでもある。

今回『トリオ・ミンピア』に手を挙げてくれた両館は、いずれもコミュニティ活動を熱心に行っていて、アウトリーチ事業も手がけている。そのどちらからも「いつものとは、違う」というコメントをもらった。

何が違うのだろうか？10年ぶりのコーディネーターなので、その間に自分が描いてきたアウトリーチ像とは、だいぶずれてしまったのかも…。

ミンピアとのプログラム作りは、誤解を恐れずに言えば、とても楽だった。音楽家3人が、クラシック音楽のレパトリーで、今自分たちが弾きたいという音楽を最初からはっきりさせていたからだ。

したいことが明らかならば、アウトリーチプログラムとして作り込むことはただひとつ。その音楽をこどもたちが喜びと発見を持って聴けるように、45分を構成するだけだ。

「ピアノトリオという編成の特徴は、独奏者3人の合奏にある」ということを言葉での説明ではなく、音楽でわかるように、いきなり3人のソロを立て続けに弾く。かなりの冒険＝あんまり前例がないなあ、とは思ったが、本人たちがやるというのだから、「こどもたちがカッコイイ！と思う」ことを念頭に、出入りや曲の繋ぎの細部を詰める。

その後は一転、3人それぞれのキャラクターが見えやすいように、自己紹介は「うじくん、しょこたん、みーちゃん」。こどもたちはそれぞれ気に入った楽器のそばに寄って、てんでに楽器の話などおしゃべりする。音楽家は最後の8分間の演奏に向けて、曲の主題や、聞いて欲しいポイント、音楽家の思いなどを、プログラムの構成軸がぶれないように注意を払いつつ、あとはかなりの「即興トーク」「即興進行」。音楽家とこどもたち（と先生など大人たち）の間に、緩やかにとても温かい共感が育っていき、冒頭に描いた8分間がやってくる。

もし、ミンピアのアウトリーチが、これまでと違う、というなら、このプログラムは「音楽」が無理をしていないこと、そして、音楽家がトークではなく、「シェア」をしていることだろう。

ミンピアは、弾きたい曲を弾いた。子どもたちはよく知っているけれど、音楽家は弾き込んでいないアニメ音楽ではなく、今一番真剣に取り組んでいる曲を弾くのが、音楽家に無理をさせないことになるし、音楽も無理にならない。事典に書いてあるようなことを曲の説明のように一方的にトークするのではなく、音楽そのものから受け取ったメッセージを織り込みながら、こどもたちの目をみて、手渡しするようにやりとりしていく。

音楽家がふだんステージでしていることを取り出して、分かりやすいようにクローズアップし、聴くときのコツや肝を参加者に丁寧に伝えて実感してもらおうのが音楽アウトリーチなら、これは鑑賞型ワークショップと言っていいだろう。

ミンピアの3人はいずれも愛知県出身。これが故郷での音楽家としての活動の大事な要素になってほしい、と今回は特に意識していた。街にホールがある、ということは、ミンピアのメンバーのような音楽家とこどもたちが出会えること。そうでなかったら、大寒波が押し寄せていたあの1月に起きたことを、あの子どもたちは経験できなかった。ホールがアウトリーチをなぜするのかは、そこに尽きると思う。

コンサートが終わった後、聴きにきてくれた子どもたちと、昔からの知り合いのように楽しそうに話している3人の音楽家と、それをニコニコ見ている担当者の笑顔が、この事業にふさわしいコードだった。

私たちレ・ヴァン・ジャポネチームは、9月末に新城市公演、10月末に田原市公演を行いました。新城市と田原市は、どちらもホールで自主事業を行っていないという共通点がありました。新城市の担当の河合さん、田原市の担当の前川さんが、4月の全体研修会で事業の内容を聞き、とても不安な表情をされていたのですが、2市とも、担当のお二人のきめ細かい対応のおかげで、充実したアウトリーチとコンサートを実施することができました。

新城市公演は、新城市の作手地区で実施しました。河合さんから、子どもの数が少ないため、地区内の小中学生全員にアウトリーチを届けたいという提案がありました。しかし、研修で考えたプログラムは、小学4年生を対象とした内容だったため、小学1年生から中学3年生までの子ども達には対応できません。そこで、新城市入りの前に再度集まり、研修で考えたプログラムを各学年に合うようにアレンジして実施しました。

コンサートの会場となった、つくで交流館は、図書館と小学校が併設されている施設のため、コンサート会場が、小学校の式典などにも利用されるなど、小学校の一部としても機能している施設でした。そのため、アウトリーチの実施場所を、つくで交流館か音楽室かで迷いましたが、コンサートとの差別化を図るために、アウトリーチは音楽室で実施することになりました。小学校とコンサート会場が同じ施設にあるというのは、あまりないことですが、子ども達が下校前にコンサート会場を覗きにきてくれるなど、演奏者との交流が生まれ、子ども達にとっても、レ・ヴァン・ジャポネにとっても、お互いの距離が近く感じられてよかったのではないかと思います。

新城市の担当の河合さんは、つくで交流館を盛り上げていきたいという熱い思いを持っており、やりとりをし始めた当初から、その思いがとてもよく伝わってきました。河合さんは、職員だけで事業を進めるのではなく、地域の方々の意見を取り入れながら準備を進めていたため、アウトリーチもコンサートも、地域の方々が積極的に関わってくださいました。特にコンサートでは、もぎり係やドア係、影アナなどの業務を、地域の方々がボランティアスタッフとして担当していただき、レ・ヴァン・ジャポネは、地域の方々に支えられながら、温かい雰囲気の中でコンサートを開催することができました。ボランティアの方にお話を聞くと、つくで交流館でやってみたい企画や、つくで交流館の今後の展望などを、楽しそうに語っていただき、つくで交流館のことを身近な存在として感じていることがとてもよく伝わってきました。地域の人々が積極的に関わることができる施設は、とても魅力的な施設だと思います。河合さんが、地域の方々とよい関係を築いている結果だと思いました。

田原市公演は、田原文化会館でのコンサートと、その近隣の小学校3校へのアウトリーチを実施しました。自主事業やアウトリーチを実施していない会館でしたが、担当の前川さんを中心に、数年前に実施したおんかつの資料などを参考にしながら、チラシ作成スケジュールやチケット発売日を決定し、計画的に作業を進めてくださいました。

アウトリーチは、全て小学校4年生を対象に実施しました。しかし、同じ年齢の子ども達であっても、とても元気なクラス、集中して演奏を聴くクラスなど、毎回子ども達の反応は異なり、演奏者は対応に苦労していました。同じプログラムを実施しても、全く異なる展開になるのが、アウトリーチの面白い部分でもあり、難しい部分でもあります。アウトリーチは、同じプログラムをただ繰り返せばよいわけではないということも、改めて実感しました。

コンサートについては、普段自主事業を実施していないこともあってか、集客が思うようにいきませんでした。早い段階から、近隣の学校や市内の吹奏楽部への告知を積極的に行っていたのですが、なかなか興味をもってもらえず、集客にはつながりませんでした。そこで、前川さんは、片道1時間以上かけて市役所職員の会議に赴き、コンサートの告知を行うなど、できる全ての広報活動を行っていただきました。また、愛知県の担当の加藤さんが、田原市の図書館の館長と知り合いだったため、コンサートの宣伝のための図書館ミニコンサートを実施することができました。広報活動の努力が実り、コンサートは、アウトリーチ先の子ども達や先生、市役所職員の方や、図書館ミニコンサートのお客さんなどを中心に、たくさんの方々に来場していただくことができました。

<知立市>

知立市文化会館・パティオ池鯉鮒は、約1,000席のかきつばたホールと、約300席の花しょうぶホールの2つのホールを備え、一般財団法人ちりゅう芸術創造協会の指定管理の下、平素より多彩な自主事業を行っている。本事業のAdam公演はそのうち花しょうぶホールを使って開催された。

知立市では小学校1校、幼稚園・保育園各1校と特別支援学校1校で多様な年齢層を対象にアウトリーチを実施した。パティオ池鯉鮒は、日頃より県内のアーティストやツアー公演で滞在するアーティストを起用して積極的にアウトリーチを実施している。その影響か今回の事業において公募をおこなったところ小学校1校の他は応募がなく、アウトリーチ先の確保に難航した。しかし下見や打ち合わせのために現地を訪問した際の、会館の担当者お二方と各施設や地域住民の方々とのやりとりから、会館職員の方々が日頃から地域の一員として活動されていることがよくわかった。普段からアウトリーチ事業が充実しているからこそ会場探しに難儀したものの、カフェや弘法縁日でのミニコンサート、ローカルメディアへの出演といったプロモーション活動については次々と話がまとまっていたのが印象的である。コンサートの券売が本番前の最終週に約50枚一気に伸びたのも、日頃のコミュニケーションが実を結んだ点も大きいだろう。

知立市でのAdamのコンサートは、前半がサックス四重奏作品をベースに「クラシック音楽のコンサートらしい」内容、後半は演奏位置や衣装も替え、それまでの数日間知立市で行ってきたアウトリーチを一般のお客様にも知っていただけるよう、アウトリーチ時のプログラムに照明などの演出を交えた構成で行った。会場の花しょうぶホールは構造・音響ともに演劇やダンス向きのホールであるが、むしろそれが生きてクラシック音楽の枠にとらわれないAdamらしいステージになった。最終的な入場者数は131名で満席というわけにはいかなかったが、明るくアットホームな雰囲気の中で公演を終えることができた。

<扶桑町>

扶桑町でのAdam公演は芝居小屋の趣にあふれた746席の扶桑文化会館で実施。扶桑文化会館も伝統芸能や芝居、落語などを中心に、またロビーコンサートも年間十数回実施するなど、積極的に自主事業を行っている会館である。

扶桑町のアウトリーチは、知立市とは対照的にすべて同一の小学校内で学年・クラスをかえて実施され、3日間毎日同じ学校に通うことで児童たちと交流を深めることができた。

コンサートについては、事前に会館側からクリスマスらしい内容にしてほしいという要望があったため、前半は知立公演と同じく音楽に重点を置いたプログラム、後半はAdamが近年取り組んでいる芝居仕立てのコンサートを上演することとなった。通常芝居となると台本や進行表があり綿密な下準備のもとで公演をおこなうが、今回は滞在期間中のリハーサルを通してAdamと会館スタッフの方々と共に創り上げていった。技術スタッフの皆さんがAdamのアイデアをもとに創意工夫をしてくださり、そのおかげで映像や照明を駆使した非常に華やかなステージになった。

当初は集客が心配されたが、最終的には来場者数316名とたくさんの方にお越しいただいた。本番前日には会館のチケット販売窓口にも子どもたちが並ぶ姿が見受けられ、本番当日も子どもたちだけでなく、教諭の先生方の姿も見受けられ、ロビーは非常に賑わった。Adamのアウトリーチの成果が表れていたように思う。

前述の知立市でも市民ボランティア団体が活躍していたが、扶桑文化会館のボランティア「夢応援団」は、会場案内やもぎりなどのサポートだけでなく、チケット販売や公演時の喫茶コーナーの営業など、当日の表回り業務の大半を担う存在である。開場前に何人かとお話をさせていただいたが、開館時からほとんど全ての公演に携わっているという方もいた。おそろいの法被を着て、お客様への積極的なお声かけや、会館の歴史について語ってくださる様子はまさに「応援団」と呼ぶのにふさわしく、ロビーを華やかに盛り上げていて、館内はまさに「私たちの町の会館」といった雰囲気に満ちていた。

<総括>

他府県と比較して、愛知県は県内の会館のネットワークが非常にしっかりとしているように見受けら

れた。地理的・経済的な素地ももちろんあるのだろうが、先導されている方の努力の賜物でもある。知立市・扶桑町ともそれぞれ会館のカラーは異なりつつも、しっかり地域に根差した活動を行っておられたのが印象的であった。今回の事業を通して会館間の繋がりもより一層深まったようであり、今後の継続・展開に期待したい。

Trio Minpia(トリオ・ミンピア)はこのアウトリーチフォーラムを機に結成された、全員が名古屋出身のピアノトリオ。Minpiaとは、Made in Nagoya Piano Trioの頭文字とのことだった。トリオ・ミンピアとして取り組むアウトリーチは今回が初めてだったが、「妥協はしない。本物を本気で弾いて、聴いてもらう」という強い意志を最初から3人で共有していたように思う。

アウトリーチ先の碧南市と豊川市は、すでに多くアウトリーチを実施していた。終了後に両市からは「今回のアウトリーチは、今までとは違った」という感想をいただいたが、ミンピアの妥協しないプログラムが成功した一因には、今回担当くださった両会館に、学校の先生と関係性を築きながら、柔軟にアーティストの要求に対応できるだけの経験と素地があったからともいえるであろう。

◇トリオ・ミンピアのアウトリーチプログラム

ミンピアのアウトリーチプログラムは、メンデルスゾーンのピアノトリオ1番の1楽章を、小学生に“能動的”に聴いてもらうことを目的に、3人が演奏を通じて伝えたいことを織り込みながらデザインされた。コーディネーターの箕口さんのファシリテーションにより、3人がたどり着いたプログラムは大きく分けて3つの部分から構成され、その進行は以下の通りである。

1. 3人のソロ

①ヴァイオリンのソロ バッチーニ《妖精の踊り》

子供たちが音楽室に集まり、座って落ち着いたところで、突然音楽室の扉が開き、ピアノによる前奏が始まる。ヴァイオリニストは音楽室の外から弾きながら登場。

②チェロのソロ タヘル《フラメンコ》

続いて、拍手が鳴り止まないうちに、教室の後ろからチェロのソロを演奏。

③ピアノのソロ ショパン《エチュードOp.10-12 革命》

再び教室の前よりピアノのソロを演奏。

2. 子供たちとのインタラクティブ

①子供たちが好きな楽器の周りに集まる。

3人の自己紹介のあと、子供たちに自分が一番好きだった、興味がある楽器のまわりに集まってもらう。ピアノの蓋は中が見えるように、危険を避けるために毎回はずしておいた。

②トリオの演奏《メンデルスゾーン：ピアノトリオ3楽章》

子供たちは自分で選んだ好きな楽器の近くでトリオを聴く。

③楽器の説明をしながら子供達と会話

子供たちの質問を拾いながら、会話をする

3. メンデルスゾーンのピアノトリオ1番への導入

①2つのメロディーの紹介

1楽章の第一主題、第二主題を2つのメロディーとして紹介する。

それぞれの主題をそれぞれの楽器で弾いたり、3人で弾いたりしながら2つの主題を子供たちに覚えてもらう。

②ソナタ形式を物語に見立てて説明し、第1楽章を演奏。

①で紹介した2つのメロディーを主人公に見立て、さまざまな風の中を主人公が旅する曲だと説明した。再現部に戻る瞬間を、最初のメロディー（主人公）が帰還して、安堵するようなどとも素敵な場面だと説明したため、子供たちは第一主題が戻ってくるのを探しながら聴くことになる。

このプログラムが、とてもゆるゆるとした進行であることを、最初は心配もしたが、7月のキャンプで行なった名古屋でのアウトリーチの子供たちの反応を見て、その心配はほぼなくなった。実にうまくデザインされたプログラムだったのだ。最初の3人のソロの部分では子供たちの好奇心にぼっと火がつき、次のインタラクティブの部分では、子供たちは自分の関心の赴くまま、自分で選択した楽器に近寄

る。そして興味のスイッチが入ったところで、メンデルスゾーンのトリオの話が始まり、第1主題、第2主題を紹介し、子供たちには2つの主題にフックがかかった状態で、1楽章を聴いてもらう。1楽章を演奏中の子供たちの集中力は見事であった。このことは学校の先生にも明らかで、驚かれた先生が多かった。ある学校の校長先生からは「子供たちのレベルに降りていくのではなく、子供たちを引き上げてくれるようなプログラムを実施いただき、大変ありがたかった」と感想をいただいた。このプログラムの本質をつく嬉しいコメントであった。

◇碧南市、豊川市でのアウトリーチの様子

最初に訪れたのは、碧南市。エメラルドホールという室内楽には最適のホールを有する。アーティストにとって、響きが良いホールという恵まれた環境で毎日リハーサルができたことはとても意義ある時間だった。碧南市で訪れたのは、鷺塚小学校、西端小学校、日進小学校、棚尾小学校の4校で、いずれも4年生が対象だった。ミンピアのアウトリーチのプログラムは全員に目線が届く30人ぐらいを対象に行うことが望ましいことがわかっていたため、70人の子供を相手にどう乗り切るかということが碧南での最大の挑戦であった。初日は子供たちとのインタラクションの部分で少々苦戦をしている様子も見受けられたが、回数を重ねるごとに大人数を巻き込んでいくコツをうまく掴み、うまくブラッシュアップ出来ているように感じた。

続いて訪れた豊川市では、代田小学校、千両小学校、一宮東部小学校、牛久保小学校の4校でアウトリーチを実施。例年にはない寒波に見舞われたり、代田小学校では予定していたクラスがインフルエンザで学級閉鎖になり、急遽違う学年を対象にアウトリーチを行うなど、ハプニングが多かったが、碧南での経験を生かしながらアウトリーチを行うことが出来ていた。また、碧南とは違い、対象となる学年が4年生から6年生までと幅があったため、ミンピアの3人は子供たちの年齢の差による反応の違いを肌で感じながら対応しようと試みていた。ミンピアがアウトリーチ1回ずつの経験、特に子供たちからの反応を確実に自分たちの糧に出来たことは大きな収穫であったと思う。特に豊川での、最終日のコンサートの演奏には、その成長が音になって現れていたように感じた。

第5部

平成29年度公共ホール音楽活性化

政令指定都市

アウトリーチセミナー事業

平成29年度公共ホール音楽活性化政令指定都市アウトリーチセミナー事業 実施概要

1 趣旨

一般財団法人地域創造は、市町村等で実施してきた公共ホール音楽活性化事業で蓄積したノウハウを活かした事業を政令指定都市に普及することを目的として、政令指定都市等との共催により、公共ホール等を拠点としたクラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する研修会等を実施する。

2 実施内容

(1) 実施団体

公益財団法人新潟市芸術文化振興財団

(2) 事業内容

実施団体は地域創造と共同して次の事業を実施する。

①研修会プログラムの策定

実施団体は、地域創造が派遣するアドバイザーと共同して研修会プログラムを策定する。

②研修会等の開催

実施団体は、当該市内及び周辺地域の公共ホール職員、文化行政担当者、教育関係者及びアーティスト等を対象とした、地域交流プログラム並びに文化・芸術による地域づくりに関する研修会等を開催する。

3 経費負担

研修会等の実施に係る経費のうち、対象経費について、30万円を限度として地域創造が負担する。

ただし、下記以外の現地移動費やその他の諸経費及び実施団体が前項に定める内容を超えて事業を行った場合に発生した超過分については、実施団体の負担とする。

4 事業実施に対する支援

(1) アドバイザー等の派遣

地域創造は、研修会プログラムの策定・研修会等の実施にあたり、地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

アドバイザー等の派遣は、研修会プログラム策定（2回程度）と研修会等実施時に行うことができる。

(2) 講師の派遣

地域創造は、地域の芸術活動に詳しい専門家やアウトリーチに積極的に取り組むアーティスト等を講師として派遣する。

5 主催・共催等

主催：公益財団法人新潟市芸術文化振興財団

共催：一般財団法人地域創造

制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

6 アドバイザー

児玉 真（一般財団法人地域創造プロデューサー）

7 事業の流れ

年度	時期	内容
平成 29 年度	6月6日	小学校でのアウトリーチ実践、意見交換会 (新潟市立沼垂小学校)
	7月25日	老人福祉施設でのアウトリーチ実践、意見交換会 (介護老人保健施設 健やか園)
	8月22日、23日	アウトリーチセミナー (新潟市音楽文化会館)

講座①

タイトル：小学校でのアウトリーチ実践①

期 日：平成29年6月6日（火）

講 師：小山瑠美子（ソプラノ） 齊藤晴海（ピアノ）

りゅーとぴあアウトリーチ事業登録アーティストである、ソプラノの小山瑠美子による、小学4年生に向けたアウトリーチ実践。

講座②

タイトル：小学校でのアウトリーチ実践②

期 日：平成29年6月6日（火）

講 師：サクソフォンカルテット スピリタス

地域創造登録アーティストであるスピリタスによる、小学校アウトリーチの実践。

講座③

タイトル：意見交換

期 日：平成29年6月6日（火）

講 師：山本若子 小山瑠美子（ソプラノ） 齊藤晴海（ピアノ）
サクソフォンカルテット スピリタス

実践を終えた2組の音楽家を交えて、小学校でのアウトリーチに関する意見交換。

講座④

タイトル：老人福祉施設でのアウトリーチ実践①

期 日：平成29年7月25日（火）

講 師：薫風之音

りゅーとぴあアウトリーチ事業登録アーティストである、和楽器デュオ「薫風之音」による介護老人福祉施設でのアウトリーチ実践。

講座⑤

タイトル：老人福祉施設でのアウトリーチ実践②

期 日：平成29年7月25日（火）

講 師：大森智子（ソプラノ） 白石光隆（ピアノ）

地域創造登録アーティストである2人の音楽家による、介護老人福祉施設でのアウトリーチ実践。



講座⑥

タイトル：意見交換

期 日：平成29年 7月25日（火）

講 師：新井英夫 薫風之音 大森智子（ソプラノ）
白石光隆（ピアノ）

ダンサーである新井英夫から、コンテンポラリー・ダンスの側からのさまざまなアウトリーチに関する事例報告と、実践を終えた音楽家による意見交換。

講座⑦

タイトル：アウトリーチ概論

期 日：平成29年 8月22日（火）

講 師：児玉真

アウトリーチの概念の根本と共に、定型的な答えのないテーマについて、明確な認識と、考え続ける手がかりを与える講義。

講座⑧

タイトル：アウトリーチ、様々な手法

期 日：平成29年 8月22日（火）

講 師：丹羽徹

地域の特長・特色を織り込んで、アウトリーチという手法によって芸術と地域を繋いでいくさまざまなケースの報告。

講座⑨

タイトル：地域アーティストのアウトリーチ

期 日：平成29年 8月22日（火）

講 師：三雲由佳（宮崎県立芸術劇場） 根間安世（琉球交響楽団クラリネット奏者） 榎本広樹（りゅーとぴあ）

三者三様の取り組みの中から、主に宮崎と沖縄のケースを報告し、共通の課題を考えた。

講座⑩

タイトル：りゅーとぴあ登録アーティスト プレゼンテーション

期 日：平成29年 8月22日（火）

講 師：りゅーとぴあアウトリーチ事業登録アーティスト

りゅーとぴあアウトリーチ事業登録アーティスト8組が、プレゼンテーションを行なった。



講座⑪

タイトル：求められる地域アーティスト像と研修の中身について

期 日：平成29年8月23日（水）

講 師：小黑亜紀（ピアノ） 中尾友彰（りゅーとびあ）

りゅーとびあアウトリーチ事業の登録アーティストとホール側スタッフの双方から、どんな必要性からどんな研修やプログラムづくりを行なったのかを報告。

講座⑫

タイトル：アウトリーチが地域アーティストにもたらすメリットについて

期 日：平成29年8月23日（水）

講 師：加藤礼子（ヴァイオリン） 伊藤香織（りゅーとびあ）

地域で活動する音楽家にとって、アウトリーチという活動はどのような位置づけであり、可能性やメリットをもたらすものであるのか、展望を含めて報告。



講座⑬

タイトル：コーディネーターが帰ったあとのホール職員の役割

期 日：平成29年8月23日（水）

講 師：ワーク・ショップ（ファシリテーター：三雲由佳 根間安世）

参加者を2つのグループに分けて、ホール職員にできる役割、求められる点について、意見交換を行なった。



講座⑭

タイトル：育てるホールと活用するホール

期 日：平成29年8月23日（水）

講 師：榎本広樹（りゅーとびあ）

公共ホール間で役割分担と連携を行ない、地域の音楽家の活躍の場を広げていくための方策を探った。

① 研修会のねらい

今回の研修会は、対象を主として「アウトリーチに興味がある公共ホール職員」「アウトリーチを行っている（あるいは興味がある）音楽家」と想定し、おそらくその対象には、「アウトリーチ概念を理解したい」「さまざまな手法についての情報を知りたい」「地域アーティストの情報を知りたい」というニーズがあるものと考えた。

また、りゅーとぴあアウトリーチ事業登録アーティストが学び、さらには自身の存在を県内公共ホール職員にアピールする場となればと願った。

② 企画のポイント

上記のねらいから、実践を互いに見て学ぶ場と、座学がほぼ同率で組み合わせるようなスケジュール・内容を考えた。また、りゅーとぴあアウトリーチ事業では招くことのできない音楽家の、実際のアウトリーチを見る機会を作りたいと願った。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

予想以上に県内公共ホールの事業予算の縮小が進み、かつては予算削減が公演数の減少とアウトリーチ活動の拡大に結びついた面があったが、アウトリーチすら実現できなくなっている状況が垣間見えた。そのことが、公共ホール職員からの研修参加が少ない原因ともなっていた。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

研修内容を詳しく連絡した結果、「そういう内容なら」と参加を申し込んできたホール職員が数名いた。

⑤ 研修会を実施しての成果

地域創造登録アーティストによる実践は、それぞれ特長あるもので地域アーティストに大きな刺激となった。それによって、秋のアウトリーチ活動においてプログラムに変化が起きるなど、実際に好影響が出ている。

また、多様なアウトリーチの可能性を改めて認識したことで、今後の参加各ホールの事業展開に新たな可能性があることを認識できた。

⑥ 研修会を実施しての反省点・課題

もっと多くの公共ホール職員が参加するよう、早期の強い働きかけを行なうべきだった。またとない機会を十分には活かせなかった。

⑦ 今回の研修会を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

新潟市という政令指定都市において、舞台芸術の中心施設であるりゅーとぴあと市内の中小規模の各ホールとは、それぞれの機能を活かした役割分担をする必要があるが、そのグランドデザインがあまり明確ではない。指定管理者制度の制度的問題点もあって、市内のホール間でどのように連携するべきか、合意形成がなされていない。今後は、その部分の解決を働きかけていきたい。

新潟市 政令市アウトリーチ研修プログラム 報告と考えたこと

新潟市では2012～13年度に「地元演奏家によるアウトリーチ」をテーマにした研修事業を協同で行った。素晴らしい企画をしているホールとして、地域アーティストや地域の音楽界との接点（というより回路か）を持つ事の重要性と、アウトリーチ活動によって地域アーティストの本格的な育成にまで届くような企画にしたいという意欲があったように思う。

当時はまだ県内のホールの職員だった榎本氏は最後のガラコンや翌年行った各自のリサイタルを聴いて、やり方によってはアーティストの音楽的な力量にも良い成果の出せる事業だと気がつき、その後の2回のオーディションや研修、アウトリーチ活動を推進してきた。今回は事業をよりよいものにして行きたいということで申し込まれた。

今回、新潟市がこの研修事業でやりたいと思っていたことは3つ

1. 先進的な新潟の取り組みを地域協同の財産にするため、地域のホールにその成果を知ってもらい、連携関係を築きたい
2. 他地域の同様の取り組みとの交流によって刺激しあいより高い目標を目指したい
3. 学校中心だったアウトリーチだけでなく、高齢者、福祉関連そのほかのさまざまなジャンルにも手を広げるためのノウハウをこの研修でアーティストにも職員や近隣ホールの関係者にも深めてもらいたいということ

そのために、まず、おんかつアーティストと地元アーティストのアウトリーチを交流し、検討会を行うとともに、市内の老人施設へのアウトリーチではよりノウハウを持ったダンスのアーティスト（新井英夫さん）の意見も見聞きする研修（研究）を行った。最後の研修会では、過去の手法の確認とともに、宮崎、沖縄のアウトリーチ事業の制作担当者に各地域の「地域アーティストを活用したアウトリーチの実例（課題と成果）」を聞いた。また、地元演奏家が今どのような意識を持って活動するようになったのかも聞いた。最後に演奏家も交えて「コーディネーターが帰った後の制作者の役割」「育てると活用するのはさまで何を考えていけば良いか」というテーマで制作側からの見方も交えてワークショップとミーティングを行った。混在チームでの話し合いは、明確な提案が出来るまでには至らなかったが、おたがい気を遣いながらも有意義であったと思う。

新潟は2017年度登録の演奏家からアウトリーチプログラム作りの時間のかかる話し合いを、音楽担当のホール職員とアーティストによって行う方向に切り替えた。地域には演奏家と対等以上にプログラム作りを話し合っているマネジメント人材が不足しているという認識はかねてよりあるが、アーティストと本気で、全人格的に接する必要があるこの方法は、その人材づくりの一つの方法にもなっていくのではないか。アーティストなどの人材も含めて、一つの市町村ではなく広域の地域で共有し活用していく事が出来ると、地域の音楽事情に対して一石を投じられる事例になっていくのではないかと思う。